

広島大学東広島キャンパス  
埋蔵文化財発掘調査報告書V

—陣ヶ平地区の調査—



2008年2月

広島大学埋蔵文化財調査室



a. 陣ヶ平西遺跡遠景



b. 陣ヶ平西遺跡1号・2号・3号須恵器焼成窯跡完掘状況



a. 陣ヶ平西遺跡 1号須恵器焼成窯跡最終作業面検出状況



b. 陣ヶ平西遺跡 1号須恵器焼成窯跡完掘状況



a. 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡燃焼部堆積状況



b. 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡出土須恵器



a. 陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡最終操業面検出状況



b. 陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡焚口部・前庭部



a. 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡埋積状況



b. 陣ヶ平西遺跡 3号須恵器焼成窯跡出土須恵器



a. 陣ヶ平西遺跡 2号須恵器焼成窯跡完掘状況



b. 陣ヶ平西遺跡 2号須恵器焼成窯跡出土須恵器

## 序

このたび、東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書の第5集を刊行した。

本報告書には、陣ヶ平地区（下見地区）に所在する陣ヶ平西遺跡を収録した。報告書の作成にあたり、本学事務局、大学院文学研究科から物心両面にわたる多大なご支援を頂いたことにまずもお礼を申し上げたい。また、埋蔵文化財調査室の藤野次史准教授ならびに榎林啓介教務補佐員、原田倫子教務補佐員（平成18年3月退職）、手島智幸技能補佐員の献身的な努力によって本報告書の刊行が可能となったことに対して、関係者の一人として敬意と感謝の意を表したい。

本報告書に収録した陣ヶ平西遺跡は東広島キャンパス北端の陣ヶ平山の西側に広がる平坦な丘陵地帯に位置する。本遺跡は古墳時代および古代（奈良時代）を中心とする遺跡で、須恵器生産に関連する遺構・遺物が多数発見された。とくに、古墳時代については須恵器製作に関わる集落跡、須恵器焼成窯跡および古墳が一体的に発見されており、全国的に見ても貴重な歴史資料が明らかとなった。また、広島県においては古墳時代の須恵器焼成窯跡の調査例はきわめて少なく、本地域の基準資料となっている。

陣ヶ平西遺跡は下見職員宿舍の建設に伴って1992年度に発掘調査した。前年度までの予備調査で須恵器製作に関わる古墳時代の集落跡が発見されたために、宿舍建設の大幅な計画変更して調査を行ったものである。その結果、古墳時代および古代の須恵器焼成窯跡が発見されたが、誠に遺憾ながらこれらは現状保存することができなかった。しかし、古墳時代の集落

跡、古墳については現状保存をすることができ、現在、職員宿舎を取り巻く自然環境の一部として残されている。今後、整備・公開を行い、教育・研究および社会貢献に十分活用したいと考えている。

2002年度から継続してきた報告書刊行事業も本報告書の刊行をもって終了することとなる。東広島への統合移転およびその後の開発事業に伴って1981年度から21年間にわたって実施した調査に関する報告についてはこれですべて完了し、社会的責任の一端を果たすことができた。しかし、これまでの調査によって出土した資料は膨大であり、関係者の努力の賜物として東広島キャンパスには16遺跡が保存されている。今後は、これらの出土資料の公開・展示や保管・管理や保存遺跡の整備・公開が重要かつ永続的な仕事として残されている。まず手始めとして、本年度5月には展示室を改修し、総合博物館と連携する形で学内外の方々にこれまでの成果の一端をご覧いただいている。出土遺物の保管・管理のための整理作業、保存遺跡の整備などについても今年度から計画的に行うこととなった。今後、地域の教育委員会などとも連携しながら社会貢献に努めたいと考えている。また、広島大学構内では継続的に開発事業が実施・計画されており、開発事業との調整、埋蔵文化財の調査に関する業務も継続的に行っていかなければならない。これまで同様に皆様のご支援とご協力をお願い申し上げます。

2008（平成20）年1月

広島大学理事（医療・施設担当）

埋蔵文化財調査室長

弓 削 孟 文

## 例 言

1. 本書は、広島大学東広島キャンパス（統合移転地）内に所在する陣ヶ平西遺跡の発掘調査報告書である。
2. 陣ヶ平西遺跡は1992年度に発掘調査を実施し、調査概要を『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』XI（1993年）に報告した。また、陣ヶ平西地区の予備調査は、1983年度、1989年度、1990年度に実施し、『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』III（1984年）、同VIII（1990年）、同IX（1991年）に調査概要を報告した。
3. 発掘調査は統合移転地埋蔵文化財調査委員会が主催した。現地調査は調査委員会の指示を受けて調査委員会調査室が担当した。本調査ならびに予備調査は、河瀬正利、藤野次史、吉井宣子が担当した。
4. 発掘調査に要した経費は文部省施設整備費を利用し経理事務は広島大学事務局施設部企画課総務係が担当した。また、予備調査に要した経費については広島大学共通の運営費を充当した。
5. 出土遺物の基礎的整理は、1984・1990・1991・1993年の『年報』刊行に際して当時の調査室構成員全員（河瀬、藤野、吉井、井口孝子、池川京子、松原和恵）で行った。また、本書作成のための整理は、2006年度、2007年度に実施し、調査室構成員全員（藤野、榎林啓介、原田倫子、手島智幸）で行った。
6. 本書の執筆は、藤野次史、榎林啓介が分担して行い、文末に執筆者を明記した。遺構・遺物の記載については、検出遺構を藤野が、出土遺物を榎林が主として担当した。遺構図の浄書については藤野が、遺物図の浄書については榎林が行い、手島が協力した。写真図版の作成は藤野が行った。
7. 本書の編集は藤野が行った。
8. 本報告を作成するにあたって、土壌の火山灰分析ならびに出土木炭片の樹種同定を古環境研究所に、炭化物の年代測定を地球科学研究所に依頼し、その分析結果を付編に収録した。
9. 本書を作成するにあたり、出土遺物について、広島県立歴史博物館鈴木康之、東広島市教育委員会妹尾周三、奈良文化財研究所岡広尚世、兵庫県立考古博物館森内透造の各氏に有益なご教示をいただいた。また、関連資料の見学に際しては、(財)広島県教育事業団埋蔵文化財調査室古瀬祐子氏、東広島市教育委員会中山学氏ならびに広島県教育事業団埋蔵文化財調査室、東広島市教育委員会、(財)東広島市教育文化振興事業

団にお世話になった。

10. 本書で使用した遺構表示記号は次のとおりである。

SY 須恵器焼成窯跡

SB 住居跡

SK 土坑

SD 溝、溝状遺構

SX そのほかの遺構

11. 本書で使用した遺構番号は、『年報』Ⅳ，同Ⅸ，同Ⅹを基本的に踏襲しているが、発掘調査の結果や調査後の検討の結果、新たに認識した遺構や抹消した遺構などがあるため、一部遺構番号や遺構名称が変更になったものがある。すべての遺構番号は本書をもって最終的なものとする。
12. 出土遺物は、須恵器焼成窯跡を検出する以前については、1号土坑SK01を除いて、基本的に平板で出土位置を記録して取り上げている。遺物の出土位置は遺物の中心で計測し、平面位置は縮尺1/50、垂直位置は0.5cm単位で記録した。須恵器焼成窯跡検出以降は、窯体・前底部については、最終作業面上の遺物は縮尺1/10で平面図を作成して取り上げ、最終作業面以下の遺物はセクションベルト設定のために便宜的に設けた調査区ごとに一括して取り上げた。灰原および焼成窯跡周辺については、大グリッドを100分割した小区画ごとに取り上げた。
13. 出土資料は広島大学埋蔵文化財調査室が保管している。

# 目 次

第1章 調査の経過と遺跡の概要	
第1節 調査にいたる経過	1
1. 陣ヶ平地区における予備調査と遺跡の確認	1
2. 陣ヶ平西遺跡の発掘調査の経過	6
第2節 調査の組織	8
1. 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会	9
2. 広島大学環境保全委員会	12
3. 広島大学埋蔵文化財調査室	13
第3節 遺跡の概要	15
第4節 遺跡周辺の環境	20
第2章 陣ヶ平西遺跡の調査	
第1節 立地と調査区	35
第2節 層序と文化層	41
第3節 古墳時代の遺構と遺物	42
1. 1号須恵器焼成窯跡SY01	44
2. 3号須恵器焼成窯跡SY03	87
3. 1号土坑SK01	105
4. 集落跡	107
5. 古墳(陣ヶ平西古墳)	114
第4節 古代の遺構と遺物	117
第5節 その他の出土遺物	125
第3章 考 察	
第1節 陣ヶ平西遺跡の古墳時代須恵器焼成窯跡出土須恵器をめぐって	129
第2節 陣ヶ平西遺跡の古代須恵器焼成窯跡出土須恵器をめぐって	157
第3節 調査の成果	167
1. 弥生時代の遺物	167
2. 古墳時代の遺構と遺物	168
3. 古代の遺構と遺物	183
4. 広島大学統合移転地(東広島キャンパス)の埋蔵文化財調査の成果	187

付編 自然科学分析

第1節	分析試料の概要	195
第2節	陣ヶ平西遺跡における火山灰分析	197
第3節	陣ヶ平西遺跡における樹種同定	201
第4節	陣ヶ平西遺跡出土炭化物の放射性炭素年代について	204

## 卷頭図版目次

- 卷頭図版第1 a. 陣ヶ平西遺跡遠景  
b. 陣ヶ平西遺跡1号・2号・3号須恵器焼成窯跡完掘状況
- 卷頭図版第2 a. 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡最終作業面検出状況  
b. 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡完掘状況
- 卷頭図版第3 a. 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡燃烧部堆積状況  
b. 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡出土須恵器
- 卷頭図版第4 a. 陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡最終作業面検出状況  
b. 陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡焚口部・前庭部
- 卷頭図版第5 a. 陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡埋積状況  
b. 陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡出土須恵器
- 卷頭図版第6 a. 陣ヶ平西遺跡2号須恵器焼成窯跡完掘状況  
b. 陣ヶ平西遺跡2号須恵器焼成窯跡出土須恵器

## 図版目次

- |                         |                          |
|-------------------------|--------------------------|
| 図版第1 陣ヶ平西遺跡             | 図版第13 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(9)  |
| 図版第2 陣ヶ平西遺跡土層断面(1)      | 図版第14 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(10) |
| 図版第3 陣ヶ平西遺跡土層断面(2)      | 図版第15 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(11) |
| 図版第4 陣ヶ平西遺跡遺物出土状況       | 図版第16 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(12) |
| 図版第5 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(1)  | 図版第17 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(13) |
| 図版第6 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(2)  | 図版第18 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(14) |
| 図版第7 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(3)  | 図版第19 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(15) |
| 図版第8 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(4)  | 図版第20 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(16) |
| 図版第9 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(5)  | 図版第21 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(17) |
| 図版第10 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(6) | 図版第22 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(18) |
| 図版第11 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(7) | 図版第23 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(19) |
| 図版第12 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(8) | 図版第24 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構(20) |

- 図版第25 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構 (21)
- 図版第26 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構 (22)
- 図版第27 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構 (23)
- 図版第28 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構 (24)
- 図版第29 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構 (25)
- 図版第30 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構 (26)
- 図版第31 陣ヶ平西遺跡検出古墳時代遺構 (27)
- 図版第32 陣ヶ平西遺跡検出古代遺構 (1)
- 図版第33 陣ヶ平西遺跡検出古代遺構 (2)
- 図版第34 陣ヶ平西遺跡検出古代遺構 (3)
- 図版第35 陣ヶ平西遺跡検出古代遺構 (4)
- 図版第36 陣ヶ平西遺跡検出古代遺構 (5)
- 図版第37 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (1)
- 図版第38 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (2)
- 図版第39 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (3)
- 図版第40 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (4)
- 図版第41 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (5)
- 図版第42 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (6)
- 図版第43 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (7)
- 図版第44 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (8)
- 図版第45 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (9)
- 図版第46 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (10)
- 図版第47 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (11)
- 図版第48 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (12)
- 図版第49 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (13)
- 図版第50 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (14)
- 図版第51 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (15)
- 図版第52 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (16)
- 図版第53 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (17)
- 図版第54 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (18)
- 図版第55 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (19)
- 図版第56 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (20)
- 図版第57 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (21)
- 図版第58 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (22)
- 図版第59 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (23)
- 図版第60 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (24)
- 図版第61 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (25)
- 図版第62 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (26)
- 図版第63 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (27)
- 図版第64 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (28)
- 図版第65 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (29)
- 図版第66 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (30)
- 図版第67 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (31)
- 図版第68 陣ヶ平西遺跡出土古墳時代遺物 (32)
- 図版第69 陣ヶ平西遺跡出土古代遺物 (1)
- 図版第70 陣ヶ平西遺跡出土古代遺物 (2)
- 図版第71 陣ヶ平西遺跡出土古代遺物 (3)
- 図版第72 陣ヶ平西遺跡出土古代遺物 (4)
- 図版第73 陣ヶ平西遺跡出土そのほかの時代遺物 (1)
- 図版第74 陣ヶ平西遺跡出土そのほかの時代遺物 (2)
- 図版第75 陣ヶ平西遺跡出土そのほかの時代遺物 (3)
- 図版第76 陣ヶ平西遺跡出土そのほかの時代遺物 (4)
- 図版第77 陣ヶ平西遺跡調査風景
- 図版第78 陣ヶ平西遺跡現地説明会風景

## 挿図目次

第1図	陣ヶ平西地区予備調査区配置図	3
第2図	統合移転地（東広島キャンパス）周辺の古墳時代遺跡分布図	21・22
第3図	陣ヶ平西遺跡調査区配置図	35
第4図	陣ヶ平西遺跡小グリッド区分模式図	36
第5図	陣ヶ平西遺跡土層断面図（1）	37・38
第6図	陣ヶ平西遺跡土層断面図（2）	39・40
第7図	陣ヶ平西遺跡検出遺構配置図	43
第8図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01調査区設定図	44
第9図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01実測図	45・46
第10図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01前庭部・灰原実測図	47
第11図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01燃焼部・前庭部堆積状況と作業期設定図	48
第12図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01焼成部・燃焼部最終作業面遺物出土状況実測図	50
第13図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01前庭部（第1作業期）実測図	52
第14図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01（第2作業期）実測図	54
第15図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01・1号作業場SX01実測図	56
第16図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第1作業期出土須恵器接合関係垂直分布図	59
第17図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2作業期出土須恵器接合関係垂直分布図	59
第18図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第1-1作業期出土須恵器接合関係平面分布図（1）	60
第19図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第1-1作業期出土須恵器接合関係平面分布図（2）	61
第20図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第1-2作業期出土須恵器接合関係平面分布図	62
第21図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-1作業期出土須恵器接合関係平面分布図（1）	63
第22図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-1作業期出土須恵器接合関係平面分布図（2）	64
第23図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-2作業期出土須恵器接合関係平面分布図（1）	65・66
第24図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-2作業期出土須恵器接合関係平面分布図（2）	65・66
第25図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-2作業期出土須恵器接合関係平面分布図（3）	67
第26図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図（1）	69
第27図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図（2）	72
第28図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図（3）	75
第29図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図（4）	76

第30図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(5)	80
第31図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(6)	81
第32図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(7)	83
第33図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(8)	84
第34図	陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(9)	85
第35図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03調査区設定図	87
第36図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03実測図	89・90
第37図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03焼成部・燃焼部最終操業面遺物出土状況実測図	91
第38図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03焚口部・前底部実測図	92
第39図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03前底部掘り方実測図	93
第40図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03焚口部・前底部木炭層堆積範囲実測図	94
第41図	陣ヶ平西遺跡1号・3号須恵器焼成窯跡SY01・03木炭層堆積範囲実測図	95
第42図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03・2号土坑SK02実測図	97
第43図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03出土須恵器実測図(1)	98
第44図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03出土須恵器実測図(2)	100
第45図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03出土須恵器実測図(3)	102
第46図	陣ヶ平西遺跡3号須恵器焼成窯跡SY03出土須恵器実測図(4)	104
第47図	陣ヶ平西遺跡1号土坑SK01実測図	106
第48図	陣ヶ平西遺跡1号土坑SK01および本調査地区包含層出土須恵器実測図	107
第49図	陣ヶ平西遺跡集落地区出土須恵器実測図(1)	109
第50図	陣ヶ平西遺跡集落地区(3号住居跡SB03)出土須恵器実測図(2)	111
第51図	陣ヶ平西遺跡集落地区(3号住居跡SB03)出土須恵器実測図(3)	113
第52図	陣ヶ平西遺跡横穴式石室(陣ヶ平西古墳)実測図	115
第53図	陣ヶ平西遺跡の古墳および古墳周辺出土須恵器実測図	116
第54図	陣ヶ平西遺跡2号須恵器焼成窯跡SY02実測図	119・120
第55図	陣ヶ平西遺跡2号須恵器焼成窯跡SY02出土須恵器実測図(1)	122
第56図	陣ヶ平西遺跡2号須恵器焼成窯跡SY02出土須恵器実測図(2)	124
第57図	陣ヶ平西遺跡出土珪土器実測図	126
第58図	陣ヶ平西遺跡出土瓦質土器・磁器実測図	128
第59図	陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器焼成窯跡出土須恵器分類概念図	132
第60図	陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器焼成窯跡操業期別出土壺坏変遷図	134・135

第61図	陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器焼成窯跡操業期別出土高坏変遷図	138・139
第62図	陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器焼成窯跡操業期別出土甕変遷図	144・145
第63図	陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器焼成窯跡操業期別 出土壺・坏・鉢・壺・平瓶ほか変遷図	148・149
第64図	陣ヶ平西遺跡古墳時代須恵器編年図	150・151
第65図	平木池遺跡出土の主要須恵器	153
第66図	山中池南遺跡第2地点出土の主要須恵器	155
第67図	広島県陣ヶ平西遺跡2号窯跡・許山窯跡出土須恵器	159
第68図	広島県小林1号窯跡・東山窯跡・安芸国分寺SK451出土須恵器	162
第69図	陣ヶ平西遺跡における自然科学分析用試料採取地点概要図	196
第70図	陣ヶ平西遺跡における試料の層位	197
第71図	陣ヶ平西遺跡B3区の火山ガラス比ダイアグラム	199
第72図	陣ヶ平西遺跡の炭化材	203
第73図	14C測定データの暦年較正図(1)	206
第74図	14C測定データの暦年較正図(2)	207
第75図	14C測定データの暦年較正図(3)	208
第76図	14C測定データの暦年較正図(4)	209

## 表目次

第1表	陣ヶ平西遺跡の火山ガラス比分析結果	198
第2表	陣ヶ平西遺跡の火山ガラス屈折率測定結果	200
第3表	陣ヶ平西遺跡の樹種同定結果	202
第4表	陣ヶ平西遺跡古墳時代出土土器観察表	212~227
第5表	陣ヶ平西遺跡古代出土土器観察表	228~229
第6表	陣ヶ平西遺跡弥生時代・近世ほか出土土器観察表	230・231
第7表	陣ヶ平西遺跡弥生時代出土土器計測表	232
第8表	陣ヶ平西遺跡古墳時代出土土器接合資料一覧表	232~235
第9表	陣ヶ平西遺跡古代出土土器接合資料一覧表	236

# 第1章 調査の経過と遺跡の概要

## 第1節 調査にいたる経過

### 1. 陣ヶ平地区における予備調査と遺跡の確認

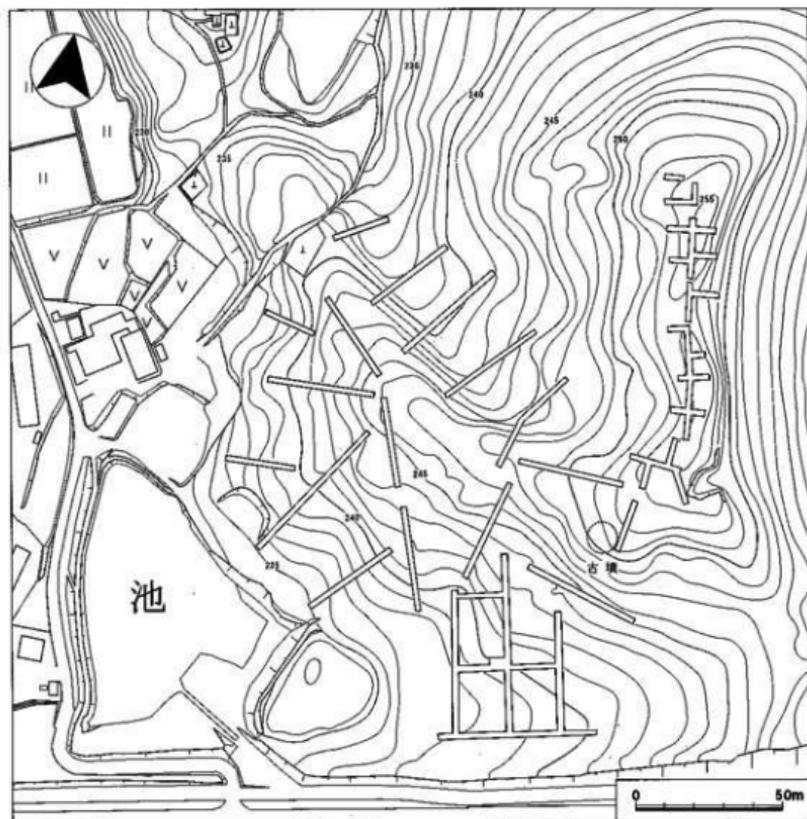
陣ヶ平地区は、統合移転地（東広島キャンパス）の北部に位置する標高321mの陣ヶ平山（陣ヶ平東地区）とその西側の低丘陵地帯（陣ヶ平西地区）からなる。現状は、陣ヶ平地区の南側を東広島市道（プールバール）が東西に縦断しており、山中地区や国史跡鏡山城跡が位置する鏡山公園との境界を画しているが、旧地形ではそれらの地区とは谷地形で画されていた。陣ヶ平山の山麓は東側を除くと、低丘陵地帯を形成しており、北側では北へ伸びる低丘陵地帯を形成し、西条盆地北部の沖積地へと移行している。南側の山麓部は南側へ伸びる低丘陵地帯で、やや急な丘陵斜面を形成し、谷地形へ移行している。西側および東側の山麓部は低丘陵の発達が弱く、隣接する丘陵地帯や山塊との間に鞍部などを形成している。陣ヶ平山の西側に広がる低丘陵地帯（陣ヶ平西地区）は陣ヶ平山とは鞍部でわずかに繋がっているものの、独立した地形をなしている。低丘陵地帯は陣ヶ平山との間に北に伸びる谷地形があり、元々は陣ヶ平山西麓に形成された平坦な地形面であったものと推定される。丘陵は主として西および北側に伸びており、それらの間には小規模な谷地形が形成されていた。丘陵地帯の南側は東から西へ伸びる比較的大規模な谷地形に接しており、この谷地形が南側の山中地区との地形的境界をなしている。丘陵地帯の西側は西条盆地沖積部が南側に伸びており、盆地部から貫入するように幅広い谷地形を形成していた。

陣ヶ平地区については、陣ヶ平東地区（陣ヶ平山の南側）に職員宿舍などの建設計画があり、陣ヶ平西地区が大学付属施設候補地となっていた。陣ヶ平東地区では、職員合同宿舍予定地について、1982年（昭和57）2月20日に開催した統合移転地埋蔵文化財調査委員会において1982年度の事業計画として予備調査が決定された。予備調査の対象地域は約2000㎡で、鏡西谷遺跡、鏡東谷遺跡の発掘調査終了の後、9月頃から調査を開始できるものと予想していた。ところが、前年（1981年）度に発掘を行った鏡西谷遺跡のうち、D・F・G地区の現状保存の決定に伴い、農場代替地が必要となり、その候補地について予備調査を実施したところ、全域から遺構・遺物が検出され（H地区）、発掘調査が必要であることが判明した。さらに、鏡東谷遺跡では、1980年（昭和55）に広島県教育委員会によって

予備調査が行われ遺構が確認されていなかった調査区南側の丘陵上にも遺構が広く存在することが明らかとなった。このように、農場代替地に伴う鏡西谷遺跡H地区の調査、鏡東谷遺跡の調査区の拡大によって当初の予定より大幅な発掘調査期間の変更が必要となり、陣ヶ平地区の予備調査を開始したのは10月20日であった。調査対象地区は、統合移転地の東北端部にあたり、陣ヶ平山から南東～南へ派生した3本の丘陵を主体に調査を実施した<sup>(1)</sup>。西から順にA地区、B地区、C地区として、丘陵平坦面、山麓斜面などに調査区を設定して調査した。A地区については遺構・遺物とも検出されなかったが、C地区北端部で集石遺構を検出し、周辺から須恵器片が出土した。また、B地区では土師質土器が若干出土したが、遺構などは検出されなかった。これらのことから、陣ヶ平遺跡と呼称することにした。

1984年(昭59)度には、陣ヶ平東地区南西端部が大学付属関連施設候補地となっていたことから、1984年4月17日に開催した統合移転地埋蔵文化財調査委員会において、予備調査の実施が決定された。対象地域は付属幼稚園の西側隣接地で、陣ヶ平山の南西麓にあたり、緩斜面が広がっていた。対象面積は約1haで、7月23日～9月13日まで実施した<sup>(2)</sup>。所々に平坦面も存在していたため当初遺構の存在も予想されたが、弥生土器、須恵器などの破片が若干出土したのみで、遺構はまったく検出されなかった。また、緩やかな斜面は花崗岩風化したマサ土の堆積によって形成されたことが判明し、出土遺物の多くはマサ土の堆積に伴う二次的な包含状態を示すものと推定された。しかし、須恵器がある程度まとまって出土した調査区北東部では地山が急に高くなっていること、調査区に隣接する北側にもやや平坦な部分が存在することなどから、隣接地に遺構の存在の可能性が推定された。

また、2000年(平成12)度には、1999年(平成11)6月の集中豪雨によって陣ヶ平山南側斜面で土石流が発生し、その災害復旧工事の実施が年度途中で明らかとなったため、急遽工事用仮設道路部分の予備調査が必要となった。対象地区は陣ヶ平山南麓部の緩斜面を中心とし、対象面積は約400m<sup>2</sup>である。調査は6月5日～8日まで実施した<sup>(3)</sup>。6ヶ所の調査区を設けて調査を実施した結果、調査対象地区南部の1区および3・4区で弥生～古墳時代の遺物が出土した。特に、3区では遺物が集中して出土し、周辺部に遺物の広がりが予想された。遺物の出土層は地表下1m程度の深さがあり、仮設道路設置の際には遺物包含層などに影響が及ばないように十分配慮することで道路建設を実施することとした。また、この調査で遺跡であることを確認したが、東約500mに1982年(昭和57)度に予備調査を実施した陣ヶ平遺跡があることから、これまで陣ヶ平遺跡とした地点を陣ヶ平遺跡第1地点、今回調査を行った地点を陣ヶ平遺跡第2地点と呼称することとした。



第1図 陣ヶ平西地区予備調査区配置図

陣ヶ平西地区については、1983年（昭和58）度から3次にわたる予備調査を実施した。陣ヶ平西地区を含む市道下見中郷線沿いの東側約100m（アカデミック地区東側隣接地）は東広島への統合移転が開始された当初から大学付属施設候補地となっており、年次計画をもって順次予備調査を実施することが計画された。1981年（昭和56）度、1982年（昭和57）度については、統合移転が開始される前に実施された分布調査によって明らかとなっていた鏡地区の遺跡群の発掘調査がすでに計画されていたことから、これらの調査が終了した1983年（昭和58）度に予備調査を開始することとなったのである。1983年4月20日に

開催した統合移転地埋蔵文化財調査委員会において、市道下見中郷線東側一帯の大学付属関連施設の年次調査は北側から順次行うこととし、1983年（昭和58）度は陣ヶ平西地区、山中地区北部について予備調査を実施することが決定された。しかし、同年度の事業計画として先行して行ったがから山西麓地区（国際交流会館予定地）の予備調査に当初計画した以上の時間と経費を費やしたため、1983年度の大学付属関連施設の予備調査については、プールパールの北側の陣ヶ平西地区のみの調査となった。

陣ヶ平西地区の1983年度調査対象地域は南西部のプールパールに接した丘陵緩斜面部（A地区）と東端部の丘陵平坦部（B地区）で、対象面積は約3haである。調査は10月24日～12月16日まで実施した<sup>(4)</sup>。A地区南半の調査では、現地表下約3mまで掘り下げたにもかかわらず花崗岩風化土のマサ土が厚く堆積しており、大規模な埋没谷が存在するものと推定された。一方、A地区の北半部の丘陵傾斜変換線付近からは、古墳時代後期の柱穴状遺構や須恵器片が出土した。この付近から丘陵上手にかけて古墳時代の遺構が広がっていると推定され、陣ヶ平西遺跡と呼称することとした。なお、陣ヶ平西地区B地区は、1978年（昭和53）に実施した分布調査で下見砂池古墳と仮称した丘陵の高まり部を中心とした地域にあたる。古墳墳丘と推定された高まりを含めた丘陵平坦部を中心に調査区を設定し、調査を実施した。古墳と推定された丘陵の高まり付近では、古墳と断定できるような内部主体はもとより、外表施設、関連遺物は検出されなかった。その他の調査区においても遺構・遺物ともに検出されなかった。

1985年度以降は、急遽、西ガガラ遺跡、鴻の巣遺跡の発掘調査が持ち上がり、大学付属関連施設候補地の年次調査は中断された。これらの急遽行われた発掘調査については、いずれも統合移転実施計画委員会と統合移転地埋蔵文化財調査委員会の年度当初の移転計画すり合わせの段階ではまったく狙上に上がらなかった予定であった。こうした事後処理的調査に終始しなければならない場合は統合移転地埋蔵文化財調査委員会と大学当局の間で移転地内の調査済み地域に関する理解に齟齬があったことに起因することが判明し、1989年5月30日に開催した統合移転地埋蔵文化財調査委員会において、1989年（平成元）度はその時点で判明しているアカデミック地区周辺の造成・建築予定地についてすべて予備調査を行うこととなった。陣ヶ平西地区についても職員宿舍建設計画があることから、11月24日～12月11日まで予備調査を実施した<sup>(5)</sup>。1989年度の調査対象地区は1983年度調査地区（A地区）の西側隣接地にあたり、北西に伸びる丘陵の南西および西側緩斜面を主体とし、対象面積は約1haである。8ヶ所設定した調査区のうち丘陵裾部に近い緩斜面部5ヶ所から古墳時代を中心とする遺物が出土した。特に第2・3区では古墳時代後期の須恵

器・土師器が多量に出土し、第2区では住居跡3軒、土坑5基が検出された。これらの遺構・遺物は1983年度調査区A地区において検出された古墳時代の遺構・遺物の分布域（陣ヶ平西遺跡）に連続するものと思われ、丘陵裾近くの南緩斜面に階段状に営まれた古墳時代集落が広く残されているものと推定された。

陣ヶ平西地区の下見職員宿舍建設は1991年（平成3）に計画されていたため、遺跡の取扱いについて早急に協議することが必要となり、1990年（平成2）2月に調査委員会幹事会を開催してこの問題について協議検討を行った。建設計画の面からは農業用の水利権や保安林の問題などから宿舍の建設候補地としてこの地域の他に適地が見当たらないことから、できればこの地区に建設したいとの意見が大学当局から出された。一方、調査委員会側からは、統合移転地内にかつて古墳時代集落跡の平木池遺跡が存在したが、調査の後、工事によって消滅しており、現状保存の方向で検討してほしいとの意見があがった。調査地区内での建設場所の変更などについても協議を続けたが、建設年度の変更は大学移転の年次計画の変更といった問題をも惹起する可能性があることが懸念された。結局、この幹事会においては、遺跡自体の構造や内容についてなお不明な点が多いということもあって、平成2年度以降において工事に先立って本調査を実施するというで一応の結論を得たのである。

上述の幹事会の結論を受けて、1990年（平成2）5月29日の統合移転地埋蔵文化財調査委員会において、弓道場用地ならびに下見中郷線東側の大学付属施設候補地の予備調査とともに陣ヶ平西遺跡の発掘調査が1990年度の事業計画として決定された。また、陣ヶ平西地区建設予定の職員宿舍については拡張計画が明らかとなり、拡張部分について予備調査を実施することもあわせて了承された。しかし、当初要求した調査経費が削減されるとともに、発掘調査を予定した下見職員宿舍用地（陣ヶ平西遺跡）についても、保安林の解除の問題や農業用水利の問題など早急には解決できない多くの問題が生じたため、1990年度中の発掘調査は不可能となった。また、総合科学部共通講義棟の建設計画が具体化してきたことに伴い、用地の中にぶどう池南遺跡が含まれる恐れが出てきた。このため、同年8月に幹事会が開催され、調査計画の再検討が行われたのである。この結果、1990年度はぶどう池南遺跡の発掘調査と下見職員宿舍拡張予定地および学生会館などの建設が予定されるアカデミックセンター用地の予備調査を行うことに計画が変更された。

下見職員宿舍用地では、先に述べたように、1983・1989年度の予備調査によって、丘陵南側緩斜面で古墳時代後期の集落跡（陣ヶ平西遺跡）が発見され、広島県内でも類例の少ない遺跡と考えられたことから建設計画区域から少しでも除外してもらうよう大学当局へ

要望した。保安林や水利の問題などから計画の見直しは困難な状況であったようであるが、全体の工事計画を北・東へ拡張することで遺跡への影響を小さくする計画案が出された。この案を受けて、1990年の予備調査は当初の予定地域の北側と東側の拡張地域について対象地域とすることとなった。

対象地域は1983年度調査区（A地区）および1989年度調査区北側にあたり、北西に伸びる丘陵平坦面および北側斜面、丘陵北側の谷部などで、対象面積は約6000㎡である。予備調査は11月1日～12月13日まで実施した<sup>(6)</sup>。谷部と東側の丘陵平坦部（尾根部）に8ヶ所、丘陵南側斜面に3ヶ所の計11ヶ所の調査区を設定した。丘陵平坦部（尾根部）では、遺構・遺物とも検出されなかった。谷部では弥生土器や中世土器などが少量出土したが、いずれも丘陵上部から流れこんだもので、遺構は検出されなかった。丘陵南側斜面に設定した第10区では土坑1基を検出し、周辺から多量の弥生土器、石鏃、須恵器などが出土した。1989年度調査区で古墳時代の遺構・遺物が出土した地域の隣接地である。さらに、調査区東端部で横穴式石室を埋葬施設とする古墳1基を検出した。墳丘盛土は流失しているが直径約10mの円墳と推定される。1981・1989年度検出の古墳時代集落跡に近接し、出土須恵器から見て両者はきわめて有機的な関係にあるものと想定される。

このように、3次にわたる下見職員宿舎用地の予備調査によって、古墳時代を中心とする陣ヶ平西遺跡の広がりを確認することとなった。中でも、古墳時代後期の集落跡および古墳1基の検出は、広島県内でも類例の少ない古墳時代の貴重な遺跡が存在することを明らかにしたのである。

この他に、陣ヶ平西地区においては、1997年（平成9）度に大学前交番用地の予備調査を実施している。調査対象地はブルーパールと市道下見中郷線の交差点北東隣接地で、11月20日～12月4日まで調査を実施した<sup>(7)</sup>。対象面積は約1300㎡である。残された地形から推測すると沖積地へ移行する緩斜面あるいは丘陵平坦面先端部と思われたが、4ヶ所の調査区を設定して調査した結果、全域に花崗岩風化土と思われる砂質土が厚く堆積しており、谷地形内に位置すると判断された。須恵器、磁器などが少量出土したが、いずれも流れ込みと思われる。

## 2. 陣ヶ平西遺跡の発掘調査の経過

1983・1989・1990年度の予備調査によって陣ヶ平西地区には丘陵南側緩斜面を中心に約6000㎡にわたって陣ヶ平西遺跡が広がっていることが明らかとなった。陣ヶ平西遺跡は古墳時代後期の集落跡や横穴式石室を内部施設とする古墳などを中心とする遺跡で、広島県

内でも類例の少ない遺跡と考えられた。前節でも述べてきたように、本遺跡は下見職員宿舍用地内に位置しており、いったんは1990年（平成2）度に発掘調査が計画されたが、保安林の解除、農業用水利などの問題から発掘調査が見送られた。その後上記の問題が解決したことや移転計画が順調に進行していることから、職員宿舍建設が解決すべき急務の問題となっていた。しかし、本遺跡が広島県内でもきわめて貴重な遺跡であることが予備調査の段階で予想されたことから、1992年4月15日に統合移転埋蔵文化財調査委員会が計画区域から少しでも除外してもらうよう大学当局と改めて協議した結果、当初の建設予定地域を北東側に少し移動するとともに、建設予定地も縮小することで合意した。この結果、遺跡の中心部分は工事区域外とすることができたのであるが、遺跡の北偏地域については、設計変更が困難であり、工事区域に含まれるところから、やむをえず事前の発掘調査に着手したのである。発掘調査の実施については1992年6月2日の統合移転埋蔵文化財調査委員会において了承された。

発掘調査は8月26日から開始した<sup>6)</sup>。調査対象地域の大部分は、宿舍への進入道路予定地にあっており、工事計画も勘案して、発掘調査は対象地域の西側部分から開始した。西端部の調査区（A4区、B3区）では、遺構は検出されず遺物も少量であったが、B4区やC区になると多量の須恵器片が出土しはじめた。遺物の出土状況からはじめは丘陵上手側からの流れ込みではないかと考えたが、さらに精査を進めたところ、丘陵斜面に掘り込まれた2基の須恵器焼成窯跡が検出された（1号・2号須恵器焼成窯跡）。1号須恵器焼成窯跡は古墳時代後期、2号須恵器焼成窯跡は奈良時代に属し、いずれもきわめて良好な状態で残されていた。調査が進展するうちに、1号須恵器焼成窯跡の下部からさらに1基の須恵器焼成窯跡を検出した（3号須恵器焼成窯跡）。1号・3号須恵器焼成窯跡は切り合い関係にあり、3号を埋めて連続的に1号を構築していることが明らかとなった。窯跡群の周辺から土器焼成作業に関連すると見られる土坑なども検出された。この3基の須恵器焼成窯跡の調査と併行して、窯跡群の東側地域（F区～J区）の調査を実施したが、調査地区の大半は近代以降に自然営力によって削平され、厚くマサ土が堆積していた。弥生土器片、須恵器片などが少量出土したのみで、遺構は検出されなかった。当初まったく予想していなかった須恵器窯跡群が検出されたことから、大幅な調査期間の延長を行い、調査が終了したのは1993年2月11日であった。

調査の結果、古墳時代の須恵器焼成窯跡2基、土坑1基、奈良時代の須恵器焼成窯跡1基が検出された。須恵器焼成窯跡はいずれもきわめて保存状態が良く、広島県を代表する遺跡であることが改めて明らかとなった。また、集落跡、須恵器焼成窯跡、古墳が一体的

に検出され、全国的に見ても貴重な遺跡であることが明らかとなったことから、調査終了間近の1993年2月3日に、統合移転地埋蔵文化財調査委員会幹事会を開催して本遺跡の取扱い方法について協議した。遺跡の全面保存について検討されたが、当初の建設計画を設計変更によって遺跡の中心部分を区域から除外したこと、進入道路の造成工事が窯跡部分を除いてすでに終了していることなどの状況から判断して、誠に遺憾ではあるが工事に着手されてもやむをえないとの結論となったのである。

## 注

- (1) 藤野次史「陣ヶ平遺跡の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅱ 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、41～42頁、1983。
- (2) 藤野次史「陣ヶ平西地区の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅳ 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、7～9頁、1985。
- (3) 増田直人「陣ヶ平西遺跡第2地点」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、51～53頁、2002。
- (4) 藤野次史「下見地区（プールバール周辺）の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅲ 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、17～19頁、1984。
- (5) 藤野次史「陣ヶ平西遺跡の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅳ 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、72～82頁、1990。
- (6) 藤野次史「下見地区（陣ヶ平西遺跡）の予備調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅴ 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、26～36頁、1991。
- (7) 藤野次史「1996・1997年度調査の概要」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅴ 広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室、7～12頁、1999。
- (8) 藤野次史「陣ヶ平西遺跡の調査」『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』Ⅵ 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、9～40頁、1993。

## 第2節 調査の組織

東広島キャンパスの埋蔵文化財については広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会が1981年（昭和56）以来一貫して対応してきたが、1999年（平成11）4月の全学的な委員会の見直しに伴って環境保全委員会に統合され、東広島キャンパス（統合移転地）の埋蔵文化財についても環境保全委員会に取り扱うこととなった。陣ヶ平地区の調査については、前節で述べたように、1982年（昭和57）度～2000年（平成12）度まで断続的に実施してお

り、委員会の統合後の2000年（平成12）度の陣ヶ平東地区（陣ヶ平遺跡第2地点）の予備調査については環境保全委員会の所轄のもとに実施した。しかし、委員会の統合によって統合移転地埋蔵文化財調査室も環境保全委員会の所属となったことから、東広島キャンパスにおける埋蔵文化財の実質的な調査研究については一貫して埋蔵文化財調査室が行ってきている。

また、2001年（平成13）度には東広島キャンパス内における埋蔵文化財調査が一段落したことから、2002年（平成14）度からこれまで発掘調査を実施した遺跡について年次計画（5年計画）に基づき報告書の作成・刊行事業がスタートした。しかし、2004年4月には国立大学が独立行政法人化され、委員会組織の大幅な改廃が行われた。埋蔵文化財調査室の所属していた環境保全委員会も廃止され、埋蔵文化財調査室は大学法人事務局内に新たに組織された財務室の管轄となり、継続して報告書の作成・刊行をすることとなった。

## 1. 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会

### 1) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会要項

- 第1 広島大学に、広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。
- 第2 委員会は、広島大学統合移転地における埋蔵文化財の発掘調査等に関し必要な事項を調査審議する。
- 第3 委員会は、埋蔵文化財の発掘調査等に関連のある者のうちから、学長が指名する委員若干名で組織する。
- 第4 委員会に、委員長及び副委員長を置く。
  - 2 委員長及び副委員長は、委員のうちから学長が指名する。
- 第5 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
  - 2 委員長に事故があるときは、副委員長がその職務を行う。
- 第6 委員会は、必要と認めるときは、委員以外の者の出席を求め、その意見を聴くことができる。
- 第7 委員会に、委員会の運営を補助するため、幹事会を置くことができる。
- 第8 委員会に、統合移転地の埋蔵文化財に関し次の業務を行うため、調査室を置く。
  - (1) 調査実施計画の立案
  - (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
  - (3) 調査報告書の作成

(4) その他必要な事項

第9 調査室の室員は、広島大学の助教授または講師及び助手をもって充て、委員長の命令を受け、調査室の業務を処理する。

第10 委員会の事務は、関係部局の協力を得て施設部企画課において処理する。

第11 この要項は、統合移転地における埋蔵文化財の発掘調査等が終了した日に、その効力を失う。

2) 埋蔵文化財調査委員会 (1982年度以降、陣ヶ平地区調査年度のみ)

1982年(昭和57)度

委員長 磯貝英夫(文学部長)

副委員長 潮見 浩(文学部教授)

委員

岡本哲彦(総合科学部長)、頼 祺一(総合科学部助教授)、坂本賞三(文学部教授)、藤原健蔵(文学部教授)、川越哲志(文学部助教授)、野地潤家(教育学部長)、小野忠熙(学校教育学部教授)、八木佐市(法学部教授)、村田 弘(理学部長)、安藤久次(理学部教授)、鈴木 充(工学部教授)、村地四郎(生物生産学部長)、島田達男(施設部長)

1983年(昭和58)度

委員長 磯谷英夫(文学部長)

副委員長 潮見 浩(文学部教授)

委員

岡本哲彦(総合科学部長)、頼 祺一(総合科学部助教授)、坂本賞三(文学部教授)、藤原健蔵(文学部教授)、川越哲志(文学部助教授)、沖原 豊(教育学部長)、八木佐市(法学部教授)、東郷重明(理学部長)、安藤久次(理学部教授)、鈴木 充(工学部教授)、村地四郎(生物生産学部長)、島田達男(施設部長)

1984年(昭和59)度

委員長 磯谷英夫(文学部長)

副委員長 潮見 浩(文学部教授)

委員

岡本哲彦(総合科学部長)、頼 祺一(総合科学部助教授)、坂本賞三(文学部教授)、藤原健蔵(文学部教授)、川越哲志(文学部助教授)、沖原 豊(教育学部長)、八木佐市(法学部教授)、東郷重明(理学部長)、安藤久次(理学部教授)、

鈴木 充 (工学部教授), 小野誠志 (生物生産学部長), 和田昭三 (施設部長)

1989年 (平成元) 度

委員長 稲賀敬二 (文学部長)

副委員長 潮見 浩 (文学部教授)

委員

天野 実 (総合科学部長), 頼 祺一 (総合科学部助教授), 坂本賞三 (文学部教授), 藤原健蔵 (文学部教授), 川越哲志 (文学部助教授), 片岡徳雄 (教育学部長), 西川恭治 (理学部長), 八木佐市 (法学部教授), 田中隆荘 (理学部長, ~5月20日), 菅原正博 (理学部長, 5月21日~), 鈴木 充 (工学部教授), 小野誠志 (生物生産学部長), 西村正之 (施設部長)

1990年 (平成2) 度

委員長 潮見 浩 (文学部長)

副委員長 川越哲志 (文学部助教授)

委員

天野 実 (総合科学部長), 頼 祺一 (総合科学部教授), 岸田裕之 (文学部教授), 藤原健蔵 (文学部教授), 片岡徳雄 (教育学部長), 菅原正博 (理学部長), 鈴木 充 (工学部教授), 森 和好 (施設部長)

1992年 (平成4) 度

委員長 潮見 浩 (文学部長)

副委員長 川越哲志 (文学部助教授)

委員

戸田吉信 (総合科学部長), 頼 祺一 (総合科学部助教授), 岸田裕之 (文学部教授), 藤原健蔵 (文学部教授), 片岡徳雄 (教育学部長), 西川恭治 (理学部長), 鈴木 充 (工学部教授), 森 和好 (施設部長)

### 3) 幹事会 (1982年度以降, 障ヶ平地区調査年度のみ)

1982年 (昭和59) 度~1989年 (平成元) 度

幹事長 潮見 浩 (文学部教授)

幹 事 藤原健三 (文学部教授), 坂本賞三 (文学部教授), 川越哲志 (文学部助教授)

1990年 (平成2) 度~1992年 (平成4) 度

幹事長 潮見 浩 (文学部教授)

幹 事 藤原健三 (文学部教授), 岸田裕之 (文学部教授), 川越哲志 (文学部助教授)

#### 4) 調査室 (1982年度以降)

河瀬正利 (文学部講師)	1981年4月1日～1990年3月31日
(文学部助教授)	1991年4月1日～1997年3月31日
藤野次史 (文学部助手)	1981年4月1日～1997年6月30日
(文学部講師)	1997年7月1日～
増田直人 (文学部助手)	1997年8月1日～
鍋木理広 (技能補佐員)	1982年7月15日～1983年3月31日
吉井宣子 (技能補佐員)	1986年11月1日～
堀田美智子 (事務補佐員)	1981年6月5日～1983年1月31日
井口孝子 (事務補佐員)	1982年4月1日～1985年3月31日
池川京子 (事務補佐員)	1985年4月1日～1992年4月30日
松原和恵 (事務補佐員)	1992年8月1日～

## 2. 広島大学環境保全委員会

1999年(平成7)度から統合移転地埋蔵文化財調査委員会は環境保全委員会に統合され、統合移転地埋蔵文化財調査室も環境保全委員会の所属となった。同委員会は安全管理を含めた非常に幅広いキャンパス環境の問題を対象として審議を行うものである。そこで、審議を円滑に行うため、実質的な検討作業を行うワーキングが設けられ、これまで統合移転地埋蔵文化財委員会の所轄事項については埋蔵文化ワーキンググループが設置された。また、統合移転地埋蔵文化財調査室についても新たに設置要項が設けられた。

### 1) 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査室設置要項

第1 広島大学統合移転地の埋蔵文化財に関する調査などのために文化財調査室を置く。

(所 属)

第2 文化財調査室の所属は広島大学環境保全委員会とする。

(業 務)

第3 調査室は次の業務を行う。

- (1) 調査実施の計画
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

第4 調査成果などについて、委員会においてその活動報告を行う。

(構成)

第5 調査室の室員は、広島大学の助教授または講師及び助手をもって充て、委員長の命令を受け、調査室の業務を処理する。

(事務)

第6 調査室の業務は、関係部局の協力を得て施設部企画課において処理する。

第7 この要領は、統合移転地における埋蔵文化財の発掘調査等が終了した日に、その効力を失う。

2) 環境保全委員会埋蔵文化ワーキング・グループ

1999年(平成11)度

ワーキング・グループ長	河瀬正利(文学部教授)
ワーキング・グループ委員	川越哲志(文学部教授), 岸田裕之(文学部教授), 中田 高(文学部教授)

2000年(平成12)度～2003年(平成15)度

ワーキング・グループ長	河瀬正利(文学部教授)
ワーキング・グループ委員	川越哲志(文学部教授), 岸田裕之(文学部教授), 中田 高(文学部教授), 藤野次史(文学部講師), 大学院文学研究科助教授2003年4月1日から)

3) 調査室

藤野次史(文学部助手)	1981年4月1日～1997年6月30日
(文学部講師)	1997年7月1日～2003年3月31日
(文学研究科助教授)	2003年4月1日～
増田直人(文学部助手)	1997年8月1日～2003年3月31日
中村真理(文学研究科助手)	2003年4月1日～2004年3月31日
吉井宣子(技能補佐員)	1986年11月1日～2004年3月31日
福原昌子(技能補佐員)	2000年8月1日～2003年1月31日
横田 彩(技能補佐員)	2003年4月1日～
松原和恵(事務補佐員)	1992年8月1日～2000年6月30日

3. 広島大学埋蔵文化財調査室

2004年(平成16)4月には国立大学は独立行政法人化され、大学内の組織も大きく再編された。これに伴って、2003年度まで埋蔵文化財調査室が所属していた環境保全委員会は

廃止されたが、新たに設置された運営組織の一つである財務室の所轄となった。埋蔵文化財調査室要項についても新たに定め、2002年（平成14）度から実施してきた報告書作成・刊行事業を継続するとともに、東広島キャンパスを含めた広島大学全キャンパスの埋蔵文化財調査に携わることとなった。

## 1) 埋蔵文化財調査室要項

### (趣 旨)

第1 この要項は、広島大学埋蔵文化財調査室の設置等に関し必要な事項を定めるものとする。

### (設 置)

第2 広島大学（以下「本学」という。）に、本学構内の埋蔵文化財の発掘調査等を行うため、広島大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

### (業 務)

第3 調査室は、発掘調査等に関し次に掲げる業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査及び確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) 調査資料の保管・管理および公開
- (5) その他必要な事項

第4 調査結果等についての審議は、理事（医療・施設担当）の下に設置された施設マネージメント会議（以下「施設マネージメント会議」という）で行う。

### (組 織)

第5 調査室に、次の職員を置く。

- (1) 室長
- (2) 専任教員
- (3) 調査員
- (4) その他必要な職員

第6 室長は、理事（医療・施設担当）をもって充てる。

2 室長は、調査の業務を掌握する。

第7 調査室の専任教員は、施設マネージメント会議の推薦により、学長が任命する。

第8 調査員は、本学専任の准教授、講師、助教又は助手をもって充てる。

2 調査員は学長が任命する。

(事務)

第9 調査室の事務は、関係部局の協力を得て、施設管理部において処理する。

(雑則)

第10 この要領は、本学における埋蔵文化財の発掘調査等が終了した日に、その効力を失う。

附則

この要項は、平成16年4月1日から施行する。

附則(平成17年4月1日一部改正)

この要項は、平成17年4月1日から施行する。

附則(平成19年3月23日一部改正)

この要項は、平成19年4月1日から施行する。

附則(平成19年6月27日一部改正)

この要項は、平成19年6月27日から施行し、この要項による改正後の広島大学埋蔵文化財調査室要項の規定は、平成19年5月21日から適用する。

2) 調査室

藤野次史(文学研究科助教授)	2003年4月1日～2007年3月31日
(埋蔵文化財調査室准教授)	2007年4月1日～
植林啓介(教務補佐員)	2004年4月1日～2005年3月31日
(文学研究科助手)	2005年4月1日～2007年3月31日
(教務補佐員)	2007年4月1日～
原田倫子(教務補佐員)	2005年4月1日～2007年3月31日
横田 彩(技能補佐員)	2003年4月1日～2006年3月31日
手島智幸(技能補佐員)	2006年4月1日～

### 第3節 遺跡の概要

陣ヶ平地区では、陣ヶ平遺跡第1地点、同第2地点、陣ヶ平城跡(以上、陣ヶ平東地区)、陣ヶ平西遺跡の4遺跡を確認している。陣ヶ平遺跡第1地点では古墳時代、中世の遺構・遺物、陣ヶ平遺跡第2地点では弥生時代、古墳時代の遺物が検出されている。陣ヶ平城跡は尼子氏が鏡山城攻略のため陣を張ったとされ、郭と思われる平坦面や土塁、石塁と考え

られる施設などが確認されているが、未調査のため、詳細は不明である。陣ヶ平西遺跡では古墳時代を中心とする遺構・遺物が検出されている。陣ヶ平地区ではこれまで予備調査が主体で、発掘調査を実施したのは陣ヶ平西遺跡のみである。ここでは、陣ヶ平西遺跡の発掘調査を中心とする検出遺構・遺物の概要について述べてみたい。

陣ヶ平西遺跡は統合移転地（東広島キャンパス）の北端部に位置する。標高321mの陣ヶ平山の西側に広がる標高240m前後の低丘陵地帯にあり、北西に伸びる低丘陵の南西斜面に立地している。1983年の予備調査によって発見された遺跡で、1992年度の発掘調査を含めて4回の調査を実施した。1983年（昭和58）、1989年（平成元）の予備調査では古墳時代の住居跡群などを検出し、丘陵の南西斜面裾一帯に古墳時代の集落跡が広がっていることが明らかとなり、さらに1990年（平成2）の予備調査では集落跡の東側で横穴式石室を内部主体とする古墳が検出された。これらの予備調査を通じて本遺跡が広島県でもきわめて貴重な遺跡であることが予想されたことから、開発計画を変更して丘陵南西斜面裾一帯を現状保存し、建設予定地を予備調査において遺構・遺物の分布が希薄であった北側へずらすこととしたのである。

発掘調査は予備調査において、弥生土器や須恵器がある程度まとまって出土した丘陵南西斜面の上部を対象として行った。小規模な谷が東北—西南方向に多数伸びているが、大半は砂質土（マサ土）によって埋没し平坦な地形となっていた。調査区西部は古墳時代集落跡の北端部にあたり、予備調査では須恵器が多少出土していたことから住居跡など集落跡の一部が検出される可能性を考えていたが、予想に反して調査では古墳時代後期の須恵器焼成窯跡2基、土坑1基、奈良時代の須恵器焼成窯跡1基などを検出した。須恵器焼成窯跡は前後関係が明瞭で、3号窯跡→1号窯跡→2号窯跡の順序で構築されている。

1号焼成窯跡は、3号焼成窯跡を廃棄した直後に3号焼成窯跡を埋積・整地し、窯体の主体を大きく北東（斜面上方）に移し連続して構築している。窯体部の長さは8.4m、幅は中央部で約2.2mの規模である。断面は蒲鉾状で、高さは燃焼部北端部で約1.5mと推定される。主軸はN64°Eで、焼成部床面の傾斜は約38°である。焼成部床面では幅20cm程度の半円形の平坦面を多数検出しており、棚状の施設が設けられていたと想定している。焚口部の壁面に径10～15cm程度の柱穴数本が検出されたことから、少なくとも廃絶時には焚口付近の天井は粘土などで構築されていたものと推定される。前庭部は焚口から灰原に連続する溝状部分と焚口部に接して溝状部分の両側に配された左右対称形の半月状の作業平坦面（S X04・05、作業場）からなる。廃絶時の溝状部分は途中でくの字状に屈曲しているが、これは3号焼成窯跡埋土の沈み込みによるものと推定される。窯構築当時は窯体の

主軸と一致して直線的に配置されており、灰原に向かってラッパ状に開く構造をしている。廃絶時の形状を復元すると、長さ約6m、幅約1.4mの規模である。左右の半月形平坦面（作業場）は、長さ約2m、幅1.5～2m規模で、前庭部全体としては平面が円形を呈している。溝状部分を中心に木炭層が厚く堆積していた。灰原は3号窯跡の焚口付近～前庭部と重複し、3号窯跡を完全に埋積・整地して形成されていた。平面形は斜面下方に向かってわずかに開く形状で、調査区外へ連続している。検出した部分は長さ約7m、南端部で幅約8mの規模である。窯体の東西で近接して長さ2m程度の作業場と思われる平坦面4基（SX01～03・09）を検出した。

1号焼成窯跡は、焚口部に接した前庭部作業平坦面などで柱穴が検出され、作業時には焚口部を中心に上屋が存在したものと想定される。また、1号焼成窯跡はかなり長期に操業されたものと思われ、燃焼部床面断面では10数枚の還元面層を確認することができた。前庭部の作業平坦面は1度改修が行われている。前庭部の改修や燃焼部、前庭部中央の溝状部分の堆積層状況を合わせて考えると、1号焼成窯跡は1度大規模な窯体の改修が行われたと考えられ、大きくは2時期の操業期が想定できる。出土須恵器は、窯体、前庭部、灰原から多数出土している。器種は、蓋坏、高坏、壺、甕、大甕、横瓶などで、陶邑編年（中村編年）Ⅱ型式5段階後半～6段階に比定される。

2号焼成窯跡は3基の窯跡の中で最後に構築されたもので、1号焼成窯跡の西に近接して位置し、1号焼成窯跡を構築した際の整地土を一部切込み形で構築されている。窯体部は長さ約5.8m、幅は中央部で約1.6mの規模である。断面形は蒲鉾形で、高さは中央部で約1.0mと推定される。主軸はN61°Eで、焼成部床面の傾斜は約39°である。窯体北端部には煙道の基底部が残存していた。焼成部北端部で幅20～30cmの平面半円形の平坦面を4ヶ所検出しており、小型器種の据付けなどに利用されたものと推定される。前庭部は整地面を掘り込んで構築され、平面形は灰原部に向かってラッパ状に開いている。灰原は前庭部に接して斜面部を浅く掘り込んでおり、木炭層が堆積していた。燃焼部床面は1枚のみで、灰原の堆積状況や土器の出土量などからも本窯跡の操業は短期間であったものと推定される。出土須恵器は灰原を中心に出土しており、窯体内では数点の破片が出土したのみで、前庭部からの出土もわずかである。灰原出土の須恵器は1号焼成窯跡などに由来するものが多数混じっており、2号焼成窯跡に由来する須恵器はあまり多くはない。出土須恵器は、蓋坏、坏、長頸壺、甕などがあり、8世紀前半を中心とする時期（陶邑編年Ⅲ型式2段階）と推定される。

3号焼成窯跡は3基の須恵器焼成窯跡中最初に構築されたもので、もともと斜面下方に

位置している。灰原は南側の未調査区に広がっており、全体の規模は不明である。窯体の中央部には天井部が一部残存していた。窯体は長さ約9.0m、幅は中央部で約2.0mの規模で、高さは天井部の残存している部分で約1.0mである。主軸はN3°Eで、焼成部床面の傾斜は約31°である。焼成部床面で、1号焼成窯跡同様、幅20～30cmの半円形の平坦面を多数検出した。主軸に直交して連続的に配置された部分も何列か認められ、棚状の平坦面が形成されていた可能性が高い。焚口部の平面形状は燃焼部から急速に狭まっており、燃焼部途中から「く」の字状に屈曲している。焚口部の左右には半弧形あるいは方形の作業平坦面（作業場）が上下2段に構築されている（SX10～13）。これらの作業場に登るために西側では階段状の平坦面（SX15）が構築されているが、廃絶時にはその平面形状が不明瞭となっている。東作業平坦面（焚口向かって右側）は全長約2.3m、西作業平坦面（焚口向かって左側）は全長約1.9mの規模である。東側の作業平坦面に接して平坦面（SX14、作業場）が作り出されている。南北に長い平坦面で、長さ約2.4m、幅約80cmの規模である。前底部は斜面部を一旦大きく摺り鉢状に掘削し、50～60cmの厚さで砂質土を全体に埋積させて整地し、ほぼ平坦な面を形成している。中央部には溝2条（SD03・04）が掘削されており、溝の主軸と焚口部の主軸はほぼ一致している。SD03は深さ約40cmに掘削し、粘質土を充分詰込んで床面を形成しており、SD04は整地土に直接掘り込んでのみである。こうした砂質土による整地や溝の構築は水分が窯の操業に影響を与えないようにするための工夫と考えられる。燃焼部床面は基本的に1枚で、須恵器の出土量などから見ても操業期間は短かったと推定される。出土の須恵器は、窯体、前底部から出土しており、窯体床面上にもかなりの個体が残されていた。器種は、蓋坏、高坏、壺、甕、大甕、横瓶などがあり、陶呂編年Ⅱ型式5段階に位置づけられる。

1号土坑SK01は窯跡群の西に位置する小規模な谷に面した小丘陵東端で検出した。一部を削平されていたが、平面隅丸方形で、長径1.9m、短径約1.7m、深さ約15cmの規模が推定される。埋土は褐色系の粘質土で、埋土上部に多量の須恵器破片を包含していた。これらの須恵器は土坑がある程度埋没（あるいは意図的に埋積）した段階に一括廃棄したような状況であるが、ほとんど接合できるものがなく、当初より破片の形で集積されていたものと推定された。2号土坑SK02は3号焼成窯跡前底部西縁に接して位置し、3号焼成窯跡に関連する遺構と考えられる。平面楕円形を呈し、長径約1.5m、短径約95cm、深さ約60cmの規模をもつ。埋土上部に焼土層が広く堆積していたが、壁面は焼けておらず、機能に関連するかどうかは不明である。3号土坑SK03は1号焼成窯跡前底部南側の平坦面SX08上に構築されており、平面楕円形の土坑である。掘り込み面を明確にできないが、

平坦面が1号焼成窯跡の造成に伴って形成されたものと想定されることから、1号焼成窯跡に伴う遺構である可能性が高い。長径1.2m、短径80cm、深さ約20cmの規模で、遺物の出土はほとんどなく、性格は不明である。

これらの窯跡群の南側には工房跡を含む住居跡群が分布している。1989年度の子備調査では3軒の住居跡（工房跡）を検出しており、1983年度の子備調査でも住居跡状の遺構を検出している。住居跡は丘陵斜面をL字状に削平して平坦面を造成し、その平坦面上に営まれているものと考えられる。検出の住居跡はいずれも一部を検出したのみで、規模・構造などを明らかにできないが、3号住居跡S B03は一辺7m前後の平面方形と推定される。3号住居跡は竈を付設しており、2号住居跡にもその可能性がある。3号住居跡内には土坑2基（5号・6号土坑）、地床炉1基が付設されている。土坑は大型で、土坑内には黒色土が充填されていた。検出面で調査を終えたため、土坑の性格を明らかにできない。炉跡は住居のほぼ中央に位置していると思われ、炉内には多量の木炭・焼土が充填され、その周囲では木炭・焼土・灰が広く分布していた。4号土坑SK04は平面楕円形を呈するものとみられ、埋土内に焼土を含んでいる。3号住居跡の北側に近接して位置し、その位置関係から3号住居跡付設竈の煙突出口の可能性もある。出土遺物は住居跡・土坑を中心に須恵器・土師器が多数出土した。1983年度調査区を含めた丘陵南西斜面一帯に集落跡が広がっているものと推定される。出土遺物の9割以上は須恵器が占め、そのうち約半数は生焼け状態である。須恵器の器種構成は、坏蓋、坏身、高坏、壺、埴、甕、大甕、横瓶などで、甕、提瓶以外の器種はほぼ揃っており、坏身、坏蓋を中心とする一般集落跡の器種構成とは大きく様相を異にしている。焼成の良好なものについても重ね焼による歪みや失敗品がかなり見受けられ、生焼け品を含めて集落内で消費していた印象を受ける。須恵器生産に関連する集落の性格が強く窺え、1号・3号須恵器焼成窯跡を経営した工人集落であると想定される。

また、須恵器焼成窯跡群の東側の丘陵で横穴式石室を内部主体とする古墳（陣ヶ平西古墳）を検出した。墳丘の大半が削平され、天井石も失われていたが、直径10m程度の円墳と推定される。奥壁および側壁の上面を検出したのみで、内部の調査を行っていないが、無袖式と思われる。羨門部付近を削平されており、残存部の全長2.5m、玄室奥壁部で幅1mの規模である。墳丘の南側では墳丘および石室を削平した際に流出したと思われる須恵器が多数出土しており、1号焼成窯跡第2操業期とほぼ同時期と思われる。

#### 第4節 遺跡周辺の環境

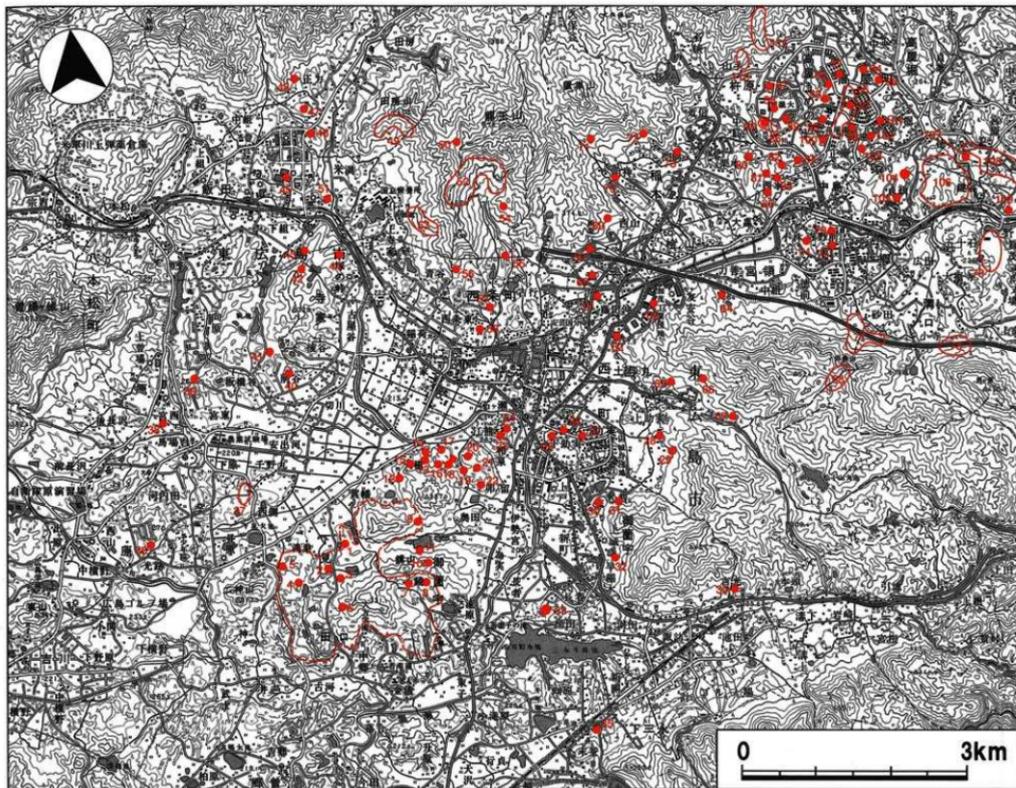
広島大学東広島キャンパス（統合移転地）は広島県南部のほぼ中央に位置しており、西条盆地のほぼ中央の独立山塊の一角に立地している。西条盆地（東広島市）は標高200m前後の山間盆地であり、瀬戸内側と日本海側、中国地方の東西を結ぶ交通の要衝地として古より重要な位置を占めてきた。また、低平な地形が発達しており、県内でも有数の遺跡密集地である。西条盆地における遺跡の様相については、すでに過去の報告で述べている<sup>(1)</sup>ので、ここでは本報告の主体である古墳時代を中心として、古墳と集落跡の分布状況などに注目しながら概観してみよう。

旧石器時代、縄文時代の遺跡は西条盆地の全域で見られているが、その内容が明らかとなっている遺跡はあまり多くはない。旧石器時代では、広島大学校内の鴻の巣遺跡<sup>(2)</sup>、西ガガラ遺跡第1地点<sup>(3)</sup>、同第2地点<sup>(4)</sup>などの発掘調査が行われ、集落研究や編年研究のための良好な資料が検出されている。西条盆地の旧石器時代の遺跡は後期旧石器時代前半期に属するものが多く知られている。

縄文時代の遺跡についても広島大学校内を中心に調査が進展している。広島大学校内の西ガガラ遺跡第1地点<sup>(5)</sup>、鴻の巣遺跡<sup>(6)</sup>、山中池南遺跡第1地点<sup>(7)</sup>、山中池南遺跡第2地点<sup>(8)</sup>、山中池南遺跡第6地点<sup>(9)</sup>、鴻の巣南遺跡<sup>(10)</sup>、ぶどう池南遺跡第2地点<sup>(11)</sup>など早期を中心として早期～後期の多数の遺跡が調査されている。広島大学以外では、三永町和坪遺跡<sup>(12)</sup>で中津式～彦崎Ⅱ式期の良好な資料が出土している

弥生時代では多くの遺跡が知られるようになるが、中期後半以前の遺跡は非常に少ない。前期では八本松町藤ヶ道1号古墳墳丘下<sup>(13)</sup>、西条町貞付谷遺跡<sup>(14)</sup>、前期～中期では西条町黄幡1号遺跡<sup>(15)</sup>、中期前葉～中葉では高屋町西本6号遺跡<sup>(16)</sup>、西条町大槇1号遺跡<sup>(17)</sup>や広島大学校内の鴻の巣遺跡<sup>(18)</sup>などの遺跡が知られている程度で、西条盆地の各地で点的に発見されている。中でも、西本6号遺跡、鴻の巣遺跡では住居跡が検出されており、集落跡の一部を構成したと見られる貴重な遺跡である。中期後葉～末以降は西条盆地各地で多くの遺跡が知られるようになり、特に後期になると高屋地区では遺跡が密集して形成されている。同時に、高屋町西本遺跡群<sup>(19)</sup>や淨福寺遺跡群<sup>(20)</sup>など、大規模な遺跡が形成されている。広島大学校内においても、鏡西谷遺跡<sup>(21)</sup>、山中池南遺跡第2地点<sup>(22)</sup>、鴻の巣南遺跡<sup>(23)</sup>など各時期の遺跡が点々と営まれている。

墳墓について見ると、中期以前では、八本松町藤が迫遺跡<sup>(24)</sup>、高屋町槇ヶ坪3号遺跡<sup>(25)</sup>などがあげられる程度で、調査例はわずかである。組み合わせ式木棺墓、土壙墓を主体と



- |                   |              |
|-------------------|--------------|
| 1. 陣ヶ平古遺跡         | 56. 青谷2号古墳   |
| 2. 平太池遺跡          | 57. 青谷1号遺跡   |
| 3. 山中池南遺跡         | 58. 諏訪神社周回遺跡 |
| 4. 陣の泉遺跡          | 59. 石橋遺跡     |
| 5. 陣の泉古墳          | 60. 須田遺跡     |
| 6. 西ガワ古墳          | 61. 瓦石遺跡     |
| 7. 農業倉古墳          | 62. 鹿ヶ崎古墳    |
| 8. 大塚大塚古墳         | 63. 大塚田古墳    |
| 9. 陣ヶ平跡           | 64. オノ遺跡群    |
| 10. 蔵山古墳          | 65. 荒名原古墳    |
| 11. 奥田大地古墳        | 66. 松ヶ丘古墳    |
| 12. 栗御堂古墳         | 67. 松子山古墳    |
| 13. 大塚1号古墳        | 68. 白鳥古墳群    |
| 14. 大塚2号古墳・大塚2号遺跡 | 69. 西山古墳     |
| 15. 大塚3号古墳        | 70. 大塚3号古墳   |
| 16. 助平2号古墳        | 71. 明神谷1号古墳  |
| 17. 助平3号古墳        | 72. 明神谷2号古墳  |
| 18. 三ヶ城古墳群        | 73. 門前古墳     |
| 19. 八幡山古墳         | 74. 奥の谷古墳    |
| 20. 古市2号古墳        | 75. 原の谷遺跡    |
| 21. 狐ヶ城古墳         | 76. 東の谷古墳    |
| 22. 助平古墳          | 77. 大谷古墳群    |
| 23. 江敷古墳          | 78. 原田岡山古墳群  |
| 24. 石ヶ原千ヶ塚古墳      | 79. 興向山古墳群   |
| 25. 助美古墳          | 80. 平田古墳群    |
| 26. 淨智寺遺跡         | 81. 大轟古墳     |
| 27. 下上戸遺跡         | 82. 西本1号遺跡   |
| 28. 丸山神社古墳群       | 83. 西本3-4号遺跡 |
| 29. 新鎌遺跡          | 84. 西本5号遺跡   |
| 30. 松賀山遺跡         | 85. 西本6号遺跡   |
| 31. 松賀古墳群         | 86. 杉森古墳群    |
| 32. 鹿上山古墳         | 87. 西4地点遺跡   |
| 33. オノヶ城古墳群       | 88. 西7地点遺跡   |
| 34. 吉光谷遺跡         | 89. 西8地点遺跡   |
| 35. 夫婦茶屋古墳        | 90. 明山古墳群    |
| 36. 光路古墳          | 91. 東田1号遺跡   |
| 37. 千野丸古墳群        | 92. 東田2号遺跡   |
| 38. 雁1号古墳         | 93. 蔵田3号遺跡   |
| 39. 松ヶ丘古墳         | 94. 中郷古墳     |
| 40. 寺家城遺跡         | 95. 中央3号遺跡   |
| 41. 金平山遺跡         | 96. 南郷古墳群    |
| 42. 狐坂古墳群         | 97. 網郷2号遺跡   |
| 43. 向原古墳群         | 98. 網郷4号遺跡   |
| 44. 鹿ヶ崎古墳群        | 99. 網ヶ坪2号遺跡  |
| 45. 網ヶ坪古墳群        | 100. 網ヶ坪古墳群  |
| 46. 坂崎遺跡          | 101. 淨福寺1号遺跡 |
| 47. 破神社古墳群        | 102. 淨福寺2号遺跡 |
| 48. 光堂寺古墳群        | 103. 淨福寺3号遺跡 |
| 49. 塔ヶ谷古墳群        | 104. 仙人塚古墳群  |
| 50. 寺西古墳          | 105. 貞取北1号古墳 |
| 51. 飯間川古墳         | 106. 福岡山古墳   |
| 52. 高ヶ原古墳群        | 107. 福岡神社遺古墳 |
| 53. 新木古墳群         | 108. 藤古墳群    |
| 54. 五栗古墳群         | 109. 木原飯山古墳群 |
| 55. 青谷1号古墳        | 110. 山手古墳群   |
|                   | 111. 足山古墳群   |

第2図 統合移転地（東広島キャンパス）周辺の古墳時代遺跡分布図

している。箱式石棺墓の出現時期は明確にできないが広島大学校内の山中遺跡<sup>(36)</sup>は箱式石棺墓1基、土壙墓11基で構成され、出現期に位置づけられるものと思われる。遺跡内からの遺物の出土は確認されていないが、構成墳墓や周辺遺跡の土器の出土状況から中期末～後期前葉に位置づけられる。後期になると、西条町狐が城遺跡<sup>(37)</sup>、高屋町鍵向山遺跡<sup>(38)</sup>、胡麻5号遺跡<sup>(39)</sup>、西本遺跡E地点<sup>(40)</sup>、西本6号遺跡<sup>(41)</sup>など多くの遺跡が知られており、箱式石棺、石蓋土壙墓、土壙墓、土器棺墓などを内部主体としており、箱式石棺の割合が大きく増加している。また、高屋地区では、大規模集落の存在に対応するように大規模な墳墓群が形成されており、古墳時代へとつながる有力な政治的勢力が形成されつつあったことが窺える。

古墳時代では弥生時代後期に大規模な集落遺跡が成立した高屋町や高屋町に隣接した西条盆地北東部に前期古墳が集中して分布している。西条盆地で最古に位置づけられるのは高屋町才が迫古墳<sup>(42)</sup>である。2基の竪穴式石室を内部主体とした小規模な方形墳で、古墳時代初頭に位置づけられる。後続する古墳としては高屋町原の谷古墳<sup>(43)</sup>、白鳥古墳<sup>(44)</sup>、や西条町丸山神社古墳<sup>(45)</sup>などがある。原の谷古墳は大きく削平を受けていたため内容に不明な点が多いが、竪穴式石室を内部主体とし、4世紀前半に位置づけられる。白鳥古墳は標高453mの白鳥山山頂に立地し、仿製三角縁三神三獣鏡2面などが出土遺物として伝えられている。丸山神社1号古墳は発掘調査が実施されていないため、内容は不明であるが、4世紀代に位置づけられる前方後円墳である。この他に、高屋町では榎ヶ坪1号・2号古墳<sup>(46)</sup>など10m程度の小規模な墳丘を有し、箱式石棺や粘土槨などを内部主体とする古墳や胡麻4号遺跡<sup>(47)</sup>(弥生時代末～古墳時代初頭)のように墳丘を構築しない箱式石棺墓、土壙墓などが知られている。榎ヶ坪1号古墳・2号古墳は1辺15m程度の方形墳で、いずれも箱式石棺を内部主体とする。副葬品は検出されておらず、墳丘などから土師器が出土している。胡麻4号遺跡第1調査区は、箱式石棺墓8基、土壙墓12基からなる。4号石棺墓で勾玉、管玉、小玉が副葬されていたが、副葬品を伴うものはほとんどない。1号～10号・47号墓は溝で区画されており、43号～45号墓は溝などによる区画域内に構築されており、区画内には土器が副葬されている。このように、一定の区画墓といえるものを含んでいるが、墳丘を持つものではなく、多くの墳墓が群集して構築されて、ほとんどの墳墓では副葬品を確認できない。才が迫古墳、原の谷古墳、白鳥古墳などは、西条盆地の全体を統括する首長墓と思われるが、榎ヶ坪古墳群はそれらの首長を補佐する集団、胡麻遺跡の墳墓は政治的にはさらに下位に位置する集団に属するものと思われ、西条盆地の小地域を構成する政治集団の階層性を垣間見ることができる。

高屋町以外の前期古墳としては、志和町蛇迫古墳群<sup>(38)</sup>があり、八本松町藤が迫1号古墳<sup>(39)</sup>も竪穴式石室を内部主体とし、前期に属するものかもしれない。いずれにせよ、高屋町地域を除くと、ほとんど前期古墳を認めることができない。同様に高屋町および隣接地以外では西条盆地を統括したと思われる首長墓墳は現状では認められず、いずれも小地域を代表する小首長墓と思われる。

前期の集落遺跡については、現状では高屋町や西条町下見などを中心に検出されており、弥生時代後期の集落の分布状況を反映していると言える。しかし、いずれも規模が小さく、弥生時代後期から規模を縮小しながら連続するものが大半であり、西条盆地を統括した首長や小地域の首長が居住したと想定できる集落跡はまったく知られていない。丘陵裾や沖積低地に多くの集落が立地していることが予想されるが、こうした立地部分の調査はほとんど進展していない。いずれにせよ、前期古墳の分布から見ると、少なくとも前期前半の段階では、高屋町を中心とする地域以外では、古墳を築造するような政治的勢力の成長は不十分であったようである。

中期では、高屋町千人塚古墳<sup>(40)</sup>が古期に位置づけられ、白鳥1号古墳に後続する首長墓と想定される。その後、西条盆地でも全長約60mの西条町スクモ塚1号古墳<sup>(41)</sup>、全長92mの西条町三ツ城古墳<sup>(42)</sup>に見られるように、50mを超えるような大規模な古墳が築造されている。スクモ塚1号古墳は帆立貝式の前方後円墳であるが、発掘調査が実施されていないため詳細は不明である。墳丘には葺石、埴輪がめぐっている。三ツ城古墳は三段築成の前方後円墳で、左右くびれ部に作り出しを有し、墳丘には円筒埴輪、朝顔形埴輪をめぐらせている。主体部は、竪穴式石室状の箱式石棺2、箱式石棺1で構成され、1号主体に珠文鏡、管玉、勾玉、鉄刀など、2号主体に銅、勾玉、棗玉、丸玉、縦櫛、鉄刀、鉄刀子など、3号主体に鉄剣、鉄鉾、鉄鎌などが副葬されていた。スクモ塚1号古墳は5世紀前半、三ツ城古墳は5世紀中頃に位置づけられ、西条盆地、あるいは安芸南部を代表する首長墓と想定されるが、両古墳とも前期古墳が明らかでない地域に新たに出現している。その背景には西条盆地や安芸南部の政治的動向が関連するものと予想されるが、現状では具体的に考察できる状況ではない。高屋町では、前期と同様に、木原向山古墳群<sup>(43)</sup>、胡麻5～7号古墳<sup>(44)</sup>、中郷古墳<sup>(45)</sup>、浄福寺1号古墳<sup>(46)</sup>など中期を通じて小規模な古墳が築造されるとともに、墳丘を築かない蔵田1号遺跡<sup>(47)</sup>などの箱式石棺墓を中心とする墳墓も認めることができ、小地域における政治的集団の階層を垣間見ることができる。一方、中期では、前期古墳の存在が明確ではなかった西条盆地の各地に古墳を認めることができるようになる。内容が明らかかなものとしては、スクモ塚1号古墳の位置する西条町三水地区ではスクモ塚

2号・3号古墳<sup>(48)</sup>や西条町夫婦茶屋古墳<sup>(49)</sup>が、三ッ城古墳が位置する西条町西条中央～下見地区では、八幡山大池古墳<sup>(50)</sup>、大槓1号古墳<sup>(51)</sup>、大槓3号古墳<sup>(52)</sup>が築造されている。この他にも、西条町寺家地区、八本松町原地区、八本松町飯田地区などにも箱式石棺を内部主体とする古墳が点在している。これらの古墳は前期、あるいは後期に属する可能性もあるが、内部主体や前期・後期の古墳分布から見て、中期に属するものがかなりあるものと推定される。西条盆地各地における中期古墳の分布は、高屋町周辺を除く地域においても古墳を築造することのできる政治的勢力の成長があったことを示すのであろう。

ところで、先に述べたように、これらの古墳は箱式石棺を内部主体とするものが多く、副葬品が貧弱あるいはまったく検出されないものも多く、小地域を代表する首長墓と想定されるものが大半であるが、スクモ塚3号古墳、大槓1号・3号古墳は、規模や副葬品から見て、単なる小地域を代表する首長墓ではない内容を示している。スクモ塚3号古墳は直径約8mの円墳で、箱式石棺を内部主体とする。獣形鏡1、管玉2、鉄刀子などが副葬されていた。大槓1号古墳では直径約16mの円墳で、箱式石棺を内部主体とする。副葬品は出土していないが、墳丘から鉄刀子、土師器甕が出土しており、墳丘には円筒埴輪、朝顔形埴輪が立てられていた。大槓3号古墳は方形墳であった可能性があるが、後世の削平が著しく、規模は不明である。内部主体は箱式石棺2基であり、1号主体には、鉄剣1、鉄鏃3、鉄刀子1、鉄鏃、鉄鋌先などが副葬されていた。これらの古墳の存在は、スクモ塚1号古墳、三ッ城古墳に象徴されるごとく、西条盆地地域の安芸国における政治的地位の上昇に伴って、政治機構が強化されたと見ることもできる。

中期の集落遺跡の検出例はきわめて少なく、西条町助平3号遺跡<sup>(53)</sup>、古市2号遺跡<sup>(54)</sup>、高屋町浄福寺2号遺跡<sup>(55)</sup>など数遺跡を挙げることができるにすぎない。助平3号遺跡は中期～後期の集落遺跡で、自然流路に面した丘陵裾に竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡17棟などが検出され、数少ない低地に立地する調査例である。また、助平3号遺跡では自然流路内で祭祀と思われる土器集中部が検出されている。祭祀遺跡としては、西条町浄福寺遺跡<sup>(56)</sup>があり、滑石製模造品とともにミニチュア土器が出土している。

後期の古墳は中期古墳が認められた地域に継続して認めることができるが、中期中頃の三ッ城古墳に後続する首長墓は後期においても認めることできない。高屋町森信1号墳<sup>(57)</sup>は後期に位置づけられる可能性がある前方後円墳であり、同時期の古墳の中ではやや突出した存在かもしれないが、発掘調査は実施されておらず、内容はまったく不明である。

後期前半期に属すると考えられる古墳としては、西条町狐が城古墳<sup>(58)</sup>、古市古墳<sup>(59)</sup>、高屋町鍵向山2号古墳<sup>(60)</sup>などがあり、内部主体は主として竪穴式石室である。狐が城古

墳、古市古墳の主体部は控え積みを持たない簡略型の竪穴式石室である。鍵向山2号古墳は箱式石棺と報告されているが、最下段にやや厚手の板石を用い、その上部に扁平な板石を複数段長手積みに行っていることから竪穴式石室の簡略形、あるいは箱式石棺と竪穴式石室の折衷形と見ることができる。この他にも、出土遺物は不明であるが、黒瀬町宗近柳園1号古墳<sup>(61)</sup>や大学校内の千人塚古墳<sup>(62)</sup>も同様な構造の竪穴式石室であり、横穴式石室の出現期まで内部主体として利用されているようである。これら後期前半期の古墳は須恵器など副葬品がわずかで、小地域の首長墓と思われる。

西条盆地における横穴式石室の出現は後期中頃（6世紀中葉）以降とみられるが、西条盆地では古式の横穴式石室は現状で知られていない。しかし、西条町助平古墳<sup>(63)</sup>では竪穴系横口式石室を内部主体としており、本地域における横穴式石室導入期の一様相を示している。管玉、丸玉、鉄鏃、須恵器などを副葬している。後期後葉には横穴式石室を内部主体とする古墳が多数築造されており、西条盆地に分布する古墳のうち1/3以上はこの時期に属する。中期～後期前半期の古墳分布と重なるように後期後葉の古墳も築造されているが、それまで古墳が認められなかった場所にも築造されている。この時期の古墳分布の特徴として、高屋町や後に安芸国分寺が建立される西条町西条本町、吉行などの北側の山麓部に古墳群が形成されている。一方、その他の地域では、単独あるいは2～3基の小規模な古墳群である。発掘調査が行われた例として、志和町蛇迫山古墳<sup>(64)</sup>、塚土2号・5号古墳<sup>(65)</sup>、八本松町藤が迫2号・3号古墳<sup>(66)</sup>、西条町奥田大池古墳<sup>(67)</sup>、大楨2号古墳<sup>(68)</sup>、龍王山古墳<sup>(69)</sup>、高屋町運道2号古墳<sup>(70)</sup>、原田岡山古墳群<sup>(71)</sup>、志村古墳群<sup>(72)</sup>、黒瀬町宗近柳園2号古墳<sup>(73)</sup>や広島大学校内の鏡東谷古墳<sup>(74)</sup>などがある。大半が6世紀後葉に築造され、副葬品は須恵器、鉄鏃を中心に、耳環、鉄刀、馬具などを伴うものも散見される。また、墳丘を有さない土壌墓が西条町助平2号遺跡<sup>(75)</sup>、高屋町西10地点遺跡<sup>(76)</sup>などで検出されており、須恵器が副葬されている。横穴式石室を内部主体とする古墳の被葬者に有力農民層や工人集団の長などが新たに想定されるとすれば、これら墳丘を有さない墳墓の存在も含めて、後期後葉における階層・階級分化の進行を窺うことができる。

横穴式石室を内部主体とする古墳は、藤が迫3号古墳<sup>(77)</sup>、胡麻4号古墳<sup>(78)</sup>、志村2号古墳<sup>(79)</sup>などのように、少数ではあるが、7世紀以降も追葬や新たな築造が行われている。

集落遺跡では、八本松町徳政遺跡<sup>(80)</sup>、西条町助平2号遺跡<sup>(81)</sup>、金平山遺跡<sup>(82)</sup>、高屋町柳原遺跡<sup>(83)</sup>、小谷黄幡遺跡<sup>(84)</sup>、志村遺跡<sup>(85)</sup>など、比較的多くの遺跡を挙げることができる。中期から継続して集落が形成された助平3号遺跡を除くと、いずれも丘陵斜面や丘陵上に位置しており、数軒程度の小規模なものが多く、6世紀後葉以降に集中している。この時

期においても集落立地の主体は丘陵裾から沖積低地にかけてと思われることから、一定の開発に伴う集落の分散や拡大を示すものと推定される。また、広島大学校内では、平木池遺跡<sup>(96)</sup>、陣ヶ平西遺跡<sup>(97)</sup>、山中池南遺跡第2地点<sup>(98)</sup>があり、6世紀後葉に相前後して成立し、短期間のうちに廃絶されている。これら広島大学内の集落は須恵器生産あるいはそれに関連した工人集落と思われ、陣ヶ平西遺跡、山中池南遺跡第2地点では須恵器焼成窯跡が検出されている。古墳時代後期の手工業生産の様相、工人集団の掌握の実態や律令期前夜の集団再編などさまざまな問題を解明するための良好な資料を提供している。その他、生産関連遺跡として東広島ニュータウン西7地点遺跡<sup>(99)</sup>で水田跡が発見されている。

古代以降の主要な遺跡を概観してみると、古代では安芸国分寺跡<sup>(100)</sup>の他、伝安芸国分尼寺跡<sup>(91)</sup>、高屋町西本6号遺跡(祭祀遺跡)<sup>(92)</sup>、高屋町浄福寺1号遺跡(官衙関連遺構)<sup>(93)</sup>、広島大学校内の東ガガラ窯跡<sup>(94)</sup>、陣ヶ平西遺跡2号窯跡<sup>(95)</sup>(いずれも須恵器焼成窯跡)が調査されている。

西条盆地は中世以降も安芸国の中心的な地域の一つであり続けた。中世では、大内氏が東方進出の拠点としており、西条盆地のほぼ中央に位置する独立山塊に鏡山城を築城している。鏡山城跡<sup>(96)</sup>は発掘調査されていないが、史跡指定に伴って整備がなされており、縄張りなど戦国期前半の山城の構造が明らかとなっている。鏡山城跡の南側山裾一帯は広島大学の敷地となっており、鏡東谷遺跡<sup>(97)</sup>や鏡西谷遺跡<sup>(98)</sup>、鏡千人塚遺跡<sup>(99)</sup>が調査され、鏡山城を直接守護した武士団の居館跡、防衛施設、墳墓と思われる遺構が検出されている。南北朝、室町時代には、鏡山城に関連した八幡山城跡、陣ヶ平城跡をはじめとして、多くの山城が築城されている。また、武士集団の館としての土居屋敷も数多く残されており、西条町道照館跡<sup>(100)</sup>、荒谷屋敷跡<sup>(101)</sup>などが調査されている。

近世では、西国街道(山陽道)の宿場町(四日市)として栄えた。JR西条駅前の再開発に伴って実施された四日市遺跡の発掘調査によって近世後期~末の宿場町の様相が明らかとなっている<sup>(102)</sup>。

このように西条盆地は、旧石器時代から現代に至るまで安芸国の中心的な地域の一つとして重要な位置を占めており、多くの遺跡が残されている。広島大学の移転を一つの契機として、現在も再開発が進行しており、多くの埋蔵文化財が発掘調査されて新たな資料が蓄積されているが、一方では多くの遺跡が消滅している。今後は、開発と遺跡を含む文化財・自然環境の調和を図り、それらの保全と活用を行っていく必要があろう。また、考古学的にも未解決の問題は多く、調査と研究を通じて当時の人々の生活や社会構造を解明していくことが大きな課題となるであろう。(藤野次史)

## 注

- (1) 藤野次史「遺跡周辺の環境」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－農場地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室，11～24頁，2003。  
藤野次史「遺跡周辺の環境」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－ががら地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室，23～30頁，2004。  
藤野次史「遺跡周辺の環境」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，29～40頁，2005。  
藤野次史「遺跡周辺の環境」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，30～46頁，2007。  
藤野2003では弥生時代以降，藤野2004では旧石器～縄文時代，藤野2005では古墳時代，藤野2007では弥生時代の様相を中心に概観した。
- (2) 藤野次史・楨林啓介「鴻の巣遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，52～200頁，2007。
- (3) 藤野次史・中村真理「西ガガラ遺跡第1地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－ががら地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室，41～218頁，2004。
- (4) 藤野次史・中村真理「西ガガラ遺跡第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－ががら地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室，219～364頁，2004。
- (5) 注(3)に同じ(藤野・中村 2004)。
- (6) 注(2)に同じ(藤野・楨林 2007)。
- (7) 藤野次史・楨林啓介「山中池南遺跡第1地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，41～90頁，2005。
- (8) 藤野次史・楨林啓介「山中池南遺跡第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，91～256頁，2005。
- (9) 藤野次史・楨林啓介「山中池南遺跡第6地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－山中地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，257～302頁，2005。
- (10) 藤野次史・楨林啓介「鴻の巣南遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，201～256頁，2007。
- (11) 藤野次史・楨林啓介「ぶどう池南遺跡第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室，275～318頁，2007。
- (12) 出野上 靖・辻満久編『和田平遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査報告書第190集(財)広島県埋蔵文化財調査センター，2001。
- (13) 河瀬正利「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告，第1号古墳」『広島県文化財

- 調査報告」第9集 広島県教育委員会, 81~85頁, 1971。
- (14) 松井和幸「貞付谷遺跡」「金平山遺跡・貞付谷遺跡」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第99集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 35~64頁, 1992。
- (15) 銀治益生編「西条町下見黄幡1号遺跡発掘調査報告書」文化財センター調査報告書第47番 (財)東広島市教育事業団文化振興事業団, 2005。
- (16) 篠原芳秀・植田千佳穂・出野上 靖・井林秀樹編「西本6号遺跡」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第143集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 1997。
- (17) 妹尾周三「大槇1号遺跡の調査」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(Ⅱ) 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第114集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 9~41頁, 1993。
- (18) 注(2)に同じ(藤野・楨林 2007)。
- (19) 金井亀喜編「西本遺跡群-A・B・C地点」広島県教育委員会, 1976。  
山口義信ほか編「西本遺跡群-D・E・F地点」東広島市教育委員会, 1976。
- (20) 妹尾周三「浄福寺1号遺跡の調査」「東広島ニュータウン遺跡群」Ⅲ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第106集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 14~296頁, 1993。
- (21) 藤野次史・増田直人「鏡石谷遺跡の調査」【広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-】広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 25~176頁, 2003。
- (22) 注(8)に同じ(藤野・楨林 2005)。
- (23) 注(10)に同じ(藤野・楨林 2007)。
- (24) 藤田 等「広島県賀茂郡八松町藤が迫遺跡群発掘調査報告, 弥生時代墳墓群」【広島県文化財調査報告】第9集 広島県教育委員会, 68~80頁, 1971。
- (25) 太田史代編「榎ヶ坪3号遺跡(B地区)」広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第72集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター 1988。
- (26) 藤野次史「山中地区(山中池北側一帯)の予備調査」【広島大学統合移転地埋蔵文化財調査年報】Ⅳ 広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会, 10~16頁, 1985。
- (27) 植田千佳穂「狐が城跡」【西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告】(Ⅰ) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 9~64頁, 1983。
- (28) 原田隆雄・向田裕二「鍵向山石棺群」【賀茂カントリーゴルフクラブ場内遺跡群発掘調査報告書】広島県教育委員会, 10~29頁, 1975。
- (29) 加藤光臣「胡麻5号遺跡の調査」【東広島ニュータウン遺跡群】Ⅰ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 129~193頁, 1993。
- (30) 山口義信ほか編「西本遺跡群-D・E・F地点」東広島市教育委員会, 1976。
- (31) 注(16)に同じ(篠原・植田・出野上・井林編 1997)。
- (32) 大上裕士「才が迫遺跡」【山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告】Ⅸ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 11~44頁, 1993。
- (33) 出野上 靖ほか「原の谷古墳・原の谷遺跡発掘調査報告書」文化財センター調査報告書

- 第37冊 (財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター 2003。
- (34) 松崎寿和「白鳥古墳」『広島県史 考古編』広島県, 424・798頁, 1979。
- (35) 1991年に広島大学が測量調査を行っており, 後円部裾から土師器が採集されている。
- (36) 青山 透「榎ヶ坪3号遺跡(A地区)」『東広島ニュータウン遺跡群』I 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集 (財)広島県埋蔵文化財センター, 285~322頁, 1990。
- (37) 梅本健治「胡麻4号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群I(本文編)』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集, (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 101~128頁, 1990。
- (38) 恵谷泰典編「蛇迫第1~4号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書」文化財センター調査報告書第44冊 (財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター, 2005。
- (39) 注(13)に同じ(河瀬 1971)。
- (40) 松崎寿和・潮見 浩「先史時代の広島地方」『新修広島市史』第1巻 広島市, 114~224頁, 1961。
- (41) 松崎寿和「スクモ塚古墳群」『広島県史 考古編』広島県, 436頁, 1979。
- (42) 松崎寿和・木下 忠・豊 元国・池田次郎「三ツ城古墳-広島県賀茂郡西条町-」広島県文化財調査報告書第1輯 広島県教育委員会, 1954。  
石井隆博編著「史跡三ツ城古墳-整備事業第1年次発掘調査概報-」東広島市教育委員会文化財調査報告書第17集 東広島市教育委員会, 1990。  
石井隆博編著「史跡三ツ城古墳-整備事業第2年次発掘調査概報-」東広島市教育委員会文化財調査報告書第14集 東広島市教育委員会, 1989。  
石井隆博編著「史跡三ツ城古墳-整備事業第3年次発掘調査概報-」東広島市教育委員会文化財調査報告書第17集 東広島市教育委員会, 1990。  
石井隆博編著「史跡三ツ城古墳-整備事業第5年次発掘調査概報-」東広島市教育委員会文化財調査報告書第20集 東広島市教育委員会, 1991。
- (43) 金井亀喜「木原向山古墳群」『賀茂カントリーゴルフクラブ場内遺跡群発掘調査報告書』広島県教育委員会, 36~46頁, 1975。
- (44) 青山 透「胡麻5号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』I 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集 (財)広島県埋蔵文化財センター, 129~228頁, 1990。
- (45) 三保光成・梅本健治「中郷2号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』IV 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第128集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 55~66頁, 1994。
- (46) 注(20)に同じ(妹尾 1993)。
- (47) 葉杖哲也「蔵田1号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』IV 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第128集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 7~48頁, 1994。
- (48) 注(41)に同じ(松崎 1979)。
- (49) 松崎寿和「夫婦茶屋古墳」『広島県史 考古編』広島県, 435~436頁, 1979。
- (50) 梅本健治「八幡山大池古墳」『道照遺跡 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 4~14頁, 1982。

- (51) 藤岡孝司「大槇第1号古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 東広島市教育委員会文化財調査報告書第26集 東広島市教育委員会, 78~90頁, 1993。
- (52) 道上康仁「大槇3号遺跡」『大槇遺跡群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 34~95頁, 1985。
- (53) 青山 透「助平3号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集 東広島市教育委員会, 51~80頁, 1992。  
佐々木直彦・松村昌彦「助平3号遺跡の調査」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅱ) 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第114集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 42~169頁, 1993。
- (54) 青山 透「古市2号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集 東広島市教育委員会, 13~31頁, 1992。
- (55) 佐々木直彦・山田繁樹編著「東広島ニュータウン遺跡群」Ⅱ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第97集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1993。
- (56) 伊藤健司編著「浄福寺遺跡発掘調査報告書」東広島市教育委員会, 1984。
- (57) 石井隆博「位置と環境」『森信第10号古墳発掘調査報告書』東広島市教育委員会文化財調査報告書第15集 東広島市教育委員会, 2~5頁, 1990。
- (58) 注(27)と同じ(植田 1983)。
- (59) 植田千佳穂「古市古墳」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅰ) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 77~84頁, 1983。
- (60) 向田裕始「鍵向山第2号古墳」『賀茂カントリーゴルフクラブ場内遺跡群発掘調査報告書』広島県教育委員会, 33~36頁, 1975。
- (61) 吉本裕子「宗近古墳, 宗近柳園第1号古墳」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会, 185~189頁, 1973。
- (62) 藤野次史・増田直人「鏡千人塚遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 177~189頁, 2003。
- (63) 石井隆博「助平古墳」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ 東広島市教育委員会文化財調査報告書第21集 東広島市教育委員会, 81~97頁, 1992。
- (64) 河瀬正利「蛇迫山古墳の調査」『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』塚土古墳発掘調査団, 26~30頁, 1989。
- (65) 河瀬正利「塚土第2号古墳の調査」『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』塚土古墳発掘調査団, 16~21頁, 1989。  
河瀬正利「塚土第5号古墳の調査」『朝日ゴルフクラブ広島コース建設予定地内遺跡発掘調査概報』塚土古墳発掘調査団, 22~25頁, 1989。
- (66) 川越哲志・河瀬正利「広島県賀茂郡八本松町藤が迫遺跡群発掘調査報告, 古墳」『広島県

- 文化財調査報告」第9集 広島県教育委員会, 81~98頁, 1971。
- (67) 道上康仁「奥田大池古墳」『奥田大池遺跡』広島県教育委員会 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 43~51頁, 1983。
- (68) 道上康仁「大楨2号遺跡」『大楨遺跡群 西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第38集 建設省中国地方建設局広島国道工事事務所・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 9~33頁, 1985。
- (69) 石井隆博「御園宇龍王山古墳」『芸備』第26集, 2~5頁, 1997。
- (70) 松村昌彦「蓮道2号古墳」『賀茂カントリーゴルフクラブ場内遺跡群発掘調査報告書』広島県教育委員会, 46~51頁, 1975。
- (71) 恵谷泰典「原田岡山古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』X 広島県埋蔵文化財センター調査報告書第129集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 139~155頁, 1994。
- (72) 尾崎光伸「志村遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅷ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 88~153頁, 1992。
- (73) 吉本裕子「宗近古墳, 宗近柳園第2号古墳」『山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会, 189~195頁, 1973。
- (74) 藤野次史・増田直人「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 191~226頁, 2003。
- (75) 植田千佳穂「助平2号遺跡」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅰ) 広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 93~162頁, 1983。  
石井隆博「助平2号遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 東広島市教育委員会文化財調査報告書第26集 東広島市教育委員会, 3~77頁, 1993。
- (76) 植田 広「西10地点遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅴ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第107集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 135~150頁, 1993。
- (77) 注(66)に同じ(川越・河瀬 1971)。
- (78) 辻 満久「胡麻1号遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅰ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第83集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 57~70頁, 1990。
- (79) 注(73)に同じ(吉本 1973)。
- (80) 松村昌彦・伊藤健司編著「徳政遺跡発掘調査報告書」東広島市教育委員会, 1982。
- (81) 注(75)に同じ(植田 1983)。
- (82) 松井和幸編『金平山・貞付谷遺跡』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第99集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1992。
- (83) 鍛冶益生「柳原遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅸ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第115集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 66~95頁, 1993。
- (84) 鍛冶益生「小谷黄幡遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅶ 広島

- 県埋蔵文化財調査センター調査報告書第98集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 9～64頁, 1992。
- (85) 注(73)に同じ(吉本 1973)。
- (86) 植田千佳穂編『平木池遺跡発掘調査報告』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1982。
- (87) 本報告書所収。
- (88) 藤野次史・横林啓介「山中池南第2地点の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ-山中地区の調査-』広島大学埋蔵文化財調査室, 91～256頁, 2005。
- (89) 松井和幸「西7地点遺跡」『東広島ニュータウン遺跡群』Ⅴ 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第107集 (財)広島県埋蔵文化財調査センター, 67～80頁, 1993。
- (90) 河瀬正利編『安芸国分寺跡-第1次調査概報-』広島県教育委員会, 1970。  
河瀬正利編『安芸国分寺跡-第2次調査概報-』広島県教育委員会, 1971。  
伊吹 尚編『安芸国分寺跡-第3次調査概報-』広島県教育委員会, 1972。  
中山学編著『西条町吉行 史跡安芸国分寺跡発掘調査報告書』文化財センター調査報告書第21冊 (財)東広島市教育文化振興事業団, 1999ほか。
- (91) 是光吉基編著『安芸国分寺跡-第1次調査概報-』広島県教育委員会, 1978。  
松村昌彦編著『安芸国分寺跡-第2次調査概報-』広島県教育委員会, 1979。  
松村昌彦編『安芸国分寺跡-伝承地にかかる第3次調査概報-』広島県教育委員会, 1980。
- (92) 中山 学編『西本6号遺跡発掘調査報告書』1 文化財センター調査報告書第9冊 (財)東広島市教育文化振興事業団, 1996。
- (93) 注(20)に同じ(妹尾 1993)。
- (94) 植田千佳穂・佐々木直彦「東ガガラ窯跡」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥山遺跡・東ガガラ窯跡・鏡千人塚遺跡』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学, 14～20頁, 1982。
- (95) 本報告書所収。
- (96) 吉野健志「史跡鏡山城の概要」『鏡山城 その歴史と意義-大内氏の地方支配を探る-』東広島市教育委員会, 1～13頁, 1999。
- (97) 藤野次史・増田直人「鏡東谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 190～226頁, 2003。
- (98) 藤野次史・増田直人「鏡西谷遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 25～176頁, 2003。
- (99) 佐々木直彦「鏡千人塚遺跡」『広島大学統合移転地内埋蔵文化財発掘調査報告 清水奥山遺跡・東ガガラ窯跡・鏡千人塚遺跡』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター・広島大学, 21～57頁, 1982。  
藤野次史・増田直人「鏡千人塚遺跡の調査」『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ-農場地区の調査-』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室, 177～

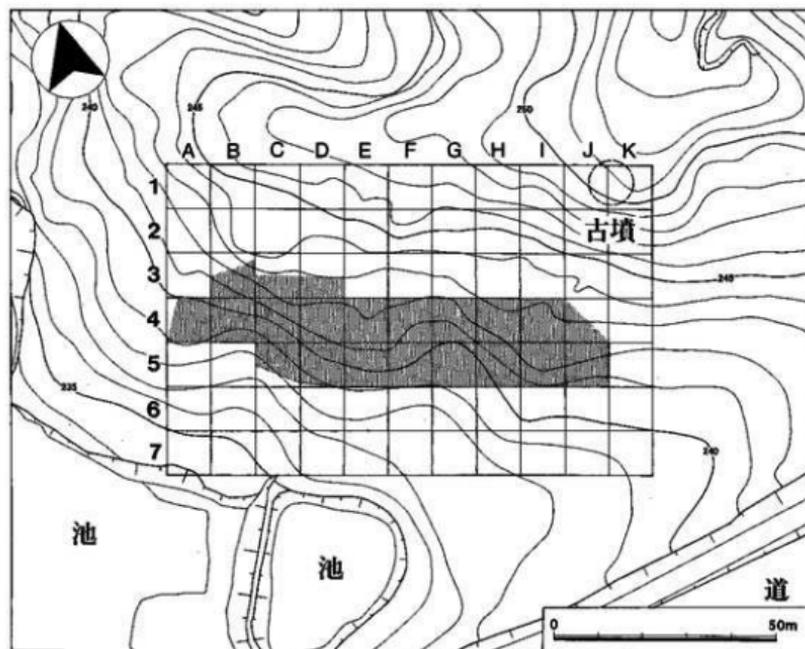
189頁, 2003。

- (100) 鍛治益生編『道照遺跡－西条バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書－』広島県教育委員会・(財)広島県埋蔵文化財調査センター, 1982。  
藤岡孝司「道照遺跡」『西条第一土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ 東広島市教育委員会文化財調査報告書第26集 東広島市教育委員会, 1993。  
松村昌彦編「道照館跡発掘調査概報」東広島市教育委員会, 1981。
- (101) 松村昌彦編「荒谷土居屋敷跡発掘調査概報」東広島市教育委員会, 1981。
- (102) 石垣敏之編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅰ－第1～4次調査－』文化財センター発掘調査報告書第40冊 (財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター, 2004。  
石垣敏之編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅱ－第5～6次調査－』文化財センター発掘調査報告書第43冊 (財)東広島市教育文化振興事業団文化財センター, 2005。  
出野上 靖編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅲ－第7・8(C地区)次調査－』文化財センター調査報告書第48冊 (財)東広島市教育文化振興事業団, 2006。  
増田晴美・和田崇志編『四日市遺跡発掘調査報告書Ⅳ－第8～10次調査－』文化財センター調査報告書第52冊 (財)東広島市教育文化振興事業団, 2006。

## 第2章 陣ヶ平西遺跡の調査

### 第1節 立地と調査区

陣ヶ平西遺跡は東広島市鏡山北に所在し、統合移転地（東広島キャンパス）の北端部に位置する。統合移転地の北端部には標高321mの陣ヶ平山が位置しており、その東側の標高337mの八幡山、南側の標高335mの鏡山、標高331.1mのガガラ山、西側の標高313mの二神山とともに西条盆地中央の独立山塊を形成している。陣ヶ平山の北側および南側一帯は標高250m前後の低平な丘陵地帯が広がっており（陣ヶ平東地区）、西側は北に伸びる谷を隔てて、やはり240m前後の低平な丘陵地帯が周辺の山塊とは切り離されたように独立した地形を形成している（陣ヶ平西地区）。陣ヶ平西遺跡は後者の低丘陵地帯（陣ヶ平西



第3図 陣ヶ平西遺跡調査区配置図  
(網目は1992年度発掘調査範囲を示す。)

地区)の北西に伸びる低丘陵斜面上に立地している。この丘陵地帯は丘陵主軸が南北方向に伸びる東半部と、この丘陵から西側に派生する低丘陵部の大きく2つの区域に区分することができる。西側の低丘陵は北西方向に伸びる北側丘陵とほぼ西に伸びる南側丘陵があり、後者の丘陵はブルバールによってほとんど削平されている。両丘陵の間には比較的規模の大きな谷が存在するが、現在はほとんど埋没して平坦な地形となっている。同様に、南側丘陵と山中地区



1	6	11	16	21
2	7	12	17	22
3	8	13	18	23
4	9	14	19	24
5	10	15	20	25

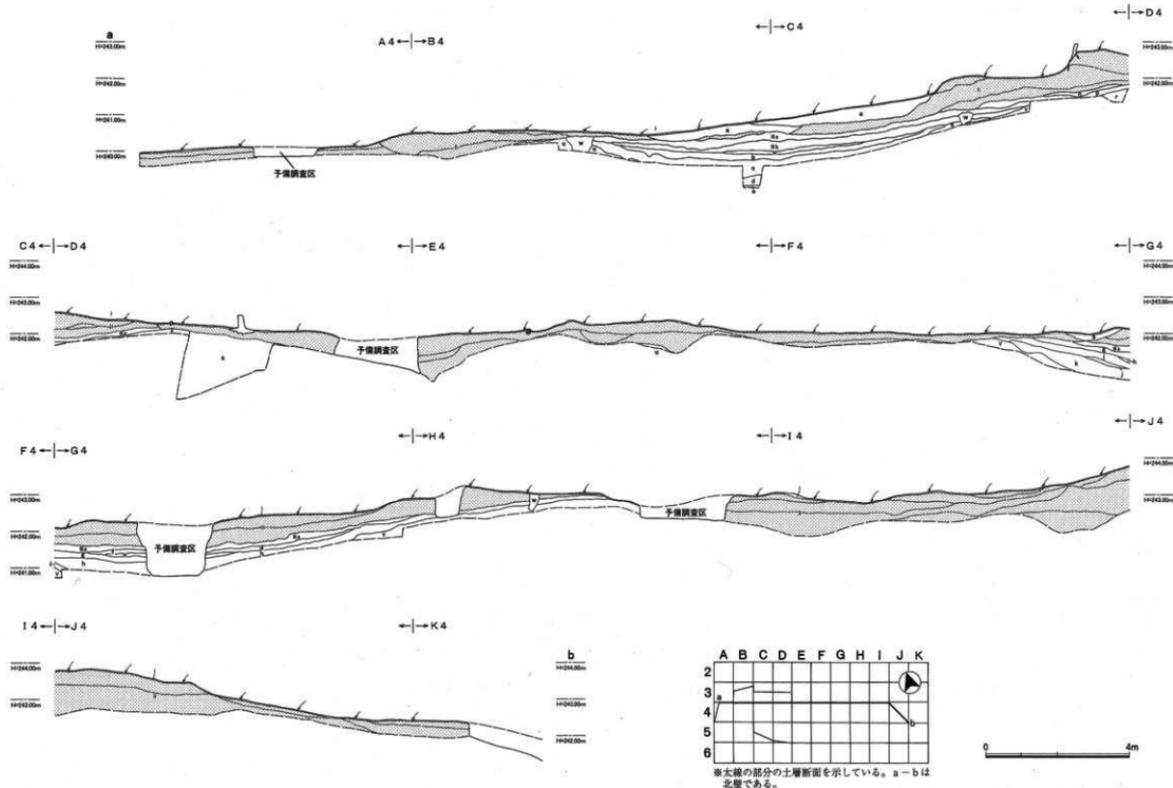
0 5m

第4図 陣ヶ平西遺跡小グリッド区分模式図

の丘陵との間も比較的規模の大きな埋没谷が存在する。陣ヶ平西地区の丘陵地帯は南北に主軸を持つ東側の主丘陵が南側で山中地区北端部の丘陵と接して鞍部をなし、陣ヶ平山東側裾の丘陵部に接続している。

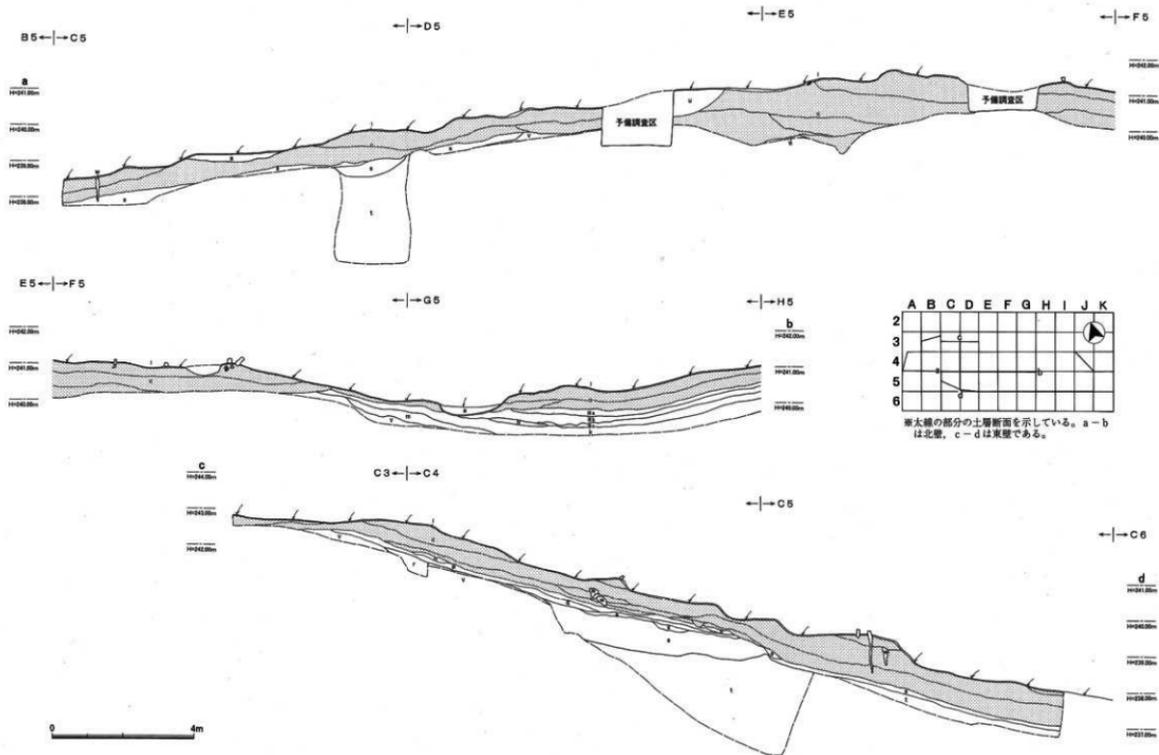
陣ヶ平西遺跡は低平な丘陵地帯(陣ヶ平西地区)の西半部の低丘陵にあり、北側丘陵に位置する。陣ヶ平西地区東半部の主丘陵の中央付近では北西に向かって陣ヶ平西地区の北側低丘陵が派生し、標高248~245m付近まで長さ50m程度の幅狭の平坦面を形成している。この丘陵の西斜面および北東斜面は急傾斜をなすが、南西斜面は比較的緩やかな傾斜で、本遺跡はこの南西斜面を中心に立地している。検出の遺構は、須恵器焼成窯跡群、住居跡群(集落跡)、古墳などで、須恵器焼成窯跡群は標高240m前後の斜面中腹、住居跡群は標高237m前後の斜面下部~裾部に立地しており、古墳は前2者からやや離れた東半部主丘陵から本遺跡が立地する丘陵が枝分れする部分の南端部に位置している。

発掘調査は須恵器焼成窯跡群を対象として行ったが、調査実施前はその存在が未確認で、調査を進める過程で検出したものである。調査対象地は職員宿舍の建設のための進入道路であり、調査区は北西-南東方向に細長い地区である(第3図網目部分)。調査範囲は工事掘削範囲のうち、試掘調査によって遺構・遺物の出土が予想される範囲を中心に決定したが、調査対象地の南側には古墳時代の集落跡が広がっていることなどから、丘陵南西斜面全体を対象として、国土座標を利用しグリッド方式により調査区を設定した。1区画は10m×10mとし、東西列にアルファベット大文字をあて、西側からA, B, C…とした。南北列にアラビア数字をあて、北から1, 2, 3…とした。各調査区の名称は南北列と東西列の名称を組合わせて呼ぶこととした(例えば、B3区, C5区など)。また、各グリ



第5図 陣ヶ平西遺跡土層断面図(1)

(aは盛土, bは褐色砂質土, cは褐色砂質土, dは褐色砂質土, eは黄褐色粘質土, fは橙色砂粒まじり粘質土, gは黄褐色砂粒まじり粘質土, hは明褐色砂質土, iは黄褐色砂粒まじり粘質土, jは明黄褐色粘質土, kは褐色粘質土, nは明褐色砂粒まじり粘質土, pは明褐色砂粒まじり粘質土, rは2号焼成窯跡埋土, wは木根である。網目は全て第II層である。)



第6図 陣ヶ平西遺跡土層断面図(2)

(aは盛土, kは褐色粘質土, mは明褐色粘質土, oは明褐色砂粒まじり粘質土, pは明褐色砂粒まじり粘質土, qは黄褐色粘質土, rは2号焼成産跡埋土, sは1号焼成産跡埋土, tは3号焼成産跡埋土, uは風倒木根, wは木根である。網目は全て第II層である。)

ッド（大グリッド）はさらに25等分して一辺2mの小グリッドを必要に応じて設定した（第4図）。小グリッドは北西隅を1，南西隅を5，南東隅を25として，各区画は大グリッドの名称と組み合わせで呼称することとした（例えば，A5区10，C4区3など）。また，遺物の一括取り上げの際には，大グリッドを100等分して，各小グリッドごとに取り上げた。各小グリッドは，北西隅を1，南西隅を10，南東隅を100として，一辺2mの小グリッドの場合と同様に，大グリッドの名称と組み合わせで呼称することとした。（藤野次史）

## 第2節 層序と文化層

調査対象地区は西に開く谷に面した丘陵南西斜面の中腹に位置する。丘陵斜面には小規模な谷が南北に何本も走っており，谷と谷の間は小規模な尾根状地形を呈している。調査区西部は調査区内では最も早く谷地形が形成され，褐色系の粘質土が堆積して比較的安定した平坦な斜面を形成している。調査区中央部および東部は小規模な谷地形と丘陵状地形が交互に形成されているが，谷が埋積されていたため，調査前は比較的平坦な地形を呈していた。堆積土の主体は花崗岩風化土のマサ土である。

次に，調査区西部を中心に本遺跡の基本層序を説明してみたい（第5・6図）。

第Ⅰ層 表土層

第Ⅱ層 淡黄褐色（10YR7/6）～黄褐色（10YR6/4）砂質土。

第Ⅲ層 暗褐色系粘質土。色調，土質によって3枚に細分される。

第Ⅲa層 暗褐色（7.5YR3/4）粘質土。場所によってはやや砂質分が多く，第Ⅱ層との漸移的な様相を示す場合もある。

第Ⅲb層 暗黄褐色（10YR4/4）粘質土。粘性は比較的強い。

第Ⅲc層 明黄褐色（10YR5/4）粘質土。G区の谷部でのみ確認される。やや軟質である。

第Ⅳ層 明黄褐色（2.5Y6/8）～暗黄色（10YR7/8）粘質土。軟質である。

第Ⅴ層 花崗岩バイラン土（地山）。

先に述べたように，調査区西部と中央部～東部ではかなり堆積状態が異なる。第Ⅱ層は谷部を中心に堆積しているが，調査区中央部～東部は全域で厚い堆積状態を示し，2m程度の厚さを有している。調査区西部でも4列付近から次第に厚さを増しており，調査区南端部では2m前後の堆積を示している。周辺の植生が伐採などによって破壊された際に花

崗岩地山が露出し、雨風による削平・流出の繰り返しによって供給されたものと考えられる。調査区西部の西端部は第Ⅱ層下がすぐに花崗岩風化土の地山で、その東側の谷地形を第Ⅲ層～第Ⅵ層が埋めている。第Ⅲa層は調査区のはほぼ全域で観察することができ、旧表土直下の堆積土かもしれない。第Ⅳ層はこの谷部および調査区中央部のG列付近の谷部を中心に観察され、丘陵部および調査区東部では基本的には観察できない。調査区東部では第Ⅲ層も確認できず、第Ⅱ層下に第Ⅴ層（花崗岩バイラン土：地山）が露出する。また、調査区西部および中央部の谷部では第Ⅳ層下に数枚の褐色系粘質土の堆積が確認される。それらはいずれも谷の埋積土である。

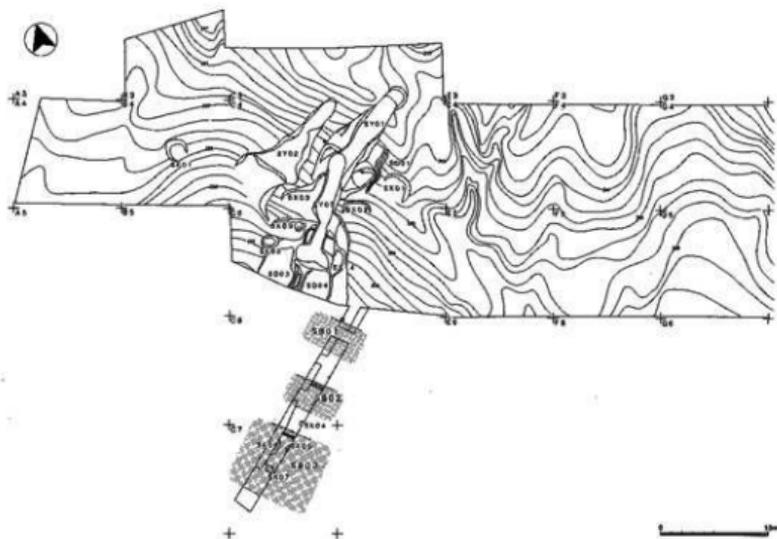
また、1989年度に予備調査を実施した地区のうち第2区は本調査区の南側に位置する。本調査区のC5・D5区の南端部に直接接しており、本調査区からの連続した堆積を観察できる。第Ⅱ層は1.5m前後の堆積を示し、その下層に褐色系の粘質土が複雑に堆積している。3号須恵器焼成窯跡の南側に位置しており、予備調査区北部が1・3号須恵器焼成窯跡の灰原にあたることから、それらの第Ⅱ層下の堆積土の多くは1・3号須恵器焼成窯跡に起源を持つものと思われる。

遺物の出土状況について見ると、古墳時代の遺構が検出された調査区西部で集中的に出土し、調査区中央部の小規模な谷部（G4・G5区）でも若干の遺物が出土している。調査区西部は第Ⅱ層下半部～第Ⅲ層に古墳時代の遺物を多数包含しており、その直下に遺構面を検出した。調査区中央部のG4・G5区では第Ⅲ層～第Ⅳ層および谷埋土中に弥生時代の遺物が包含されているが、遺構は検出されず、上方からの流入遺物と考えられる。1989年度予備調査区では第Ⅱ層下の褐色系粘質土や住居跡埋土などから多量の須恵器・土師器が出土している。

（藤野次史）

### 第3節 古墳時代の遺構と遺物

調査区西部で古墳時代遺構を集中して検出した（第7図）。検出遺構は古墳時代の須恵器焼成窯跡2基（SY01・03）、土坑3基（SK01～3）などである。古墳時代の須恵器焼成窯跡はC4・C5・D3・D4・D5区に位置し、標高237～242mの比較的傾斜の急な斜面に立地している。両焼成窯跡は切り合い関係にあり、3号焼成窯跡、1号焼成窯跡の順に構築している。2号土坑SK02は3号焼成窯跡、3号土坑SK03は1号焼成窯跡に付属する施設と思われる、1号土坑SK01はこれらの遺構とはやや離れて調査区西端部のB



第7図 陣ヶ平西遺跡検出遺構配置図  
(1989年度予備調査第2区：古墳時代住居跡検出地区を含む。)

4区に単独で位置している。なお、2号土坑については3号須恵器焼成窯跡、3号土坑については1号須恵器焼成窯跡の項に含めて説明する。

ところで、1989年度の子備調査で古墳時代の集落跡、1990年度の子備調査で古墳を検出している。前節で述べたように、1989年度の子備調査区（第2区）は本調査の南側に接しており、C6・7区にはほぼ収まっている。住居跡3基、土坑4基を検出している。1989年度の子備調査区（第2区）の東側約50mの1983年度予備調査区でも柱穴や須恵器などの遺物が出土している。予備調査のため住居跡の軒数や配置など、内容を十分に明らかにすることはできないが、本調査区南側の丘陵斜面に1号・3号須恵器焼成窯跡と同時期の古墳時代集落跡が広がっているものと想定される。また、1990年度の子備調査区東端部で横穴式石室を内部主体とする古墳1基を検出した。予備調査のため石室上面を確認するとどまっているが、天井石は失われ、羨門付近が削平されおり、古墳の下手にあたる第11区からは多数の須恵器が出土した。これらの遺構は予備調査であることから詳細は不明であるが、本調査で検出した古墳時代須恵器焼成窯跡と密接な関連をもつ。今回の報告に合わせて再整理を行ったことから、ここに合わせて収録することとした。

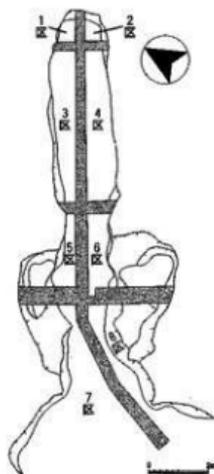
## 1.1 号須恵器焼成窯跡 S Y01

1号須恵器焼成窯跡はC4区～D5区を中心に位置している。3号焼成窯跡S Y03廃絶直後に3号焼成窯跡を埋積・整地し、さらに窯体の主体を約7m北東(斜面上方)に移動して焼成窯を構築している。検出時に天井部はすでに崩落しており、窯体内に窯体上部および周辺からの流入土とともに堆積していた。焚口部の天井については当初より窯体掘削後に別に構築している可能性が高いが、窯体内から出土した壁体の観察結果や残存部の様態の形状から見て、急斜面を掘り抜いて構築した地下式であると考えられる<sup>(1)</sup>。なお、調査は窯体検出時の上面プランの主軸を基線として東西に分割し、さらに主軸に直交して4分割し、合計8区画に分割して調査を実施した(第8図)。

### 1) 窯体と付属施設

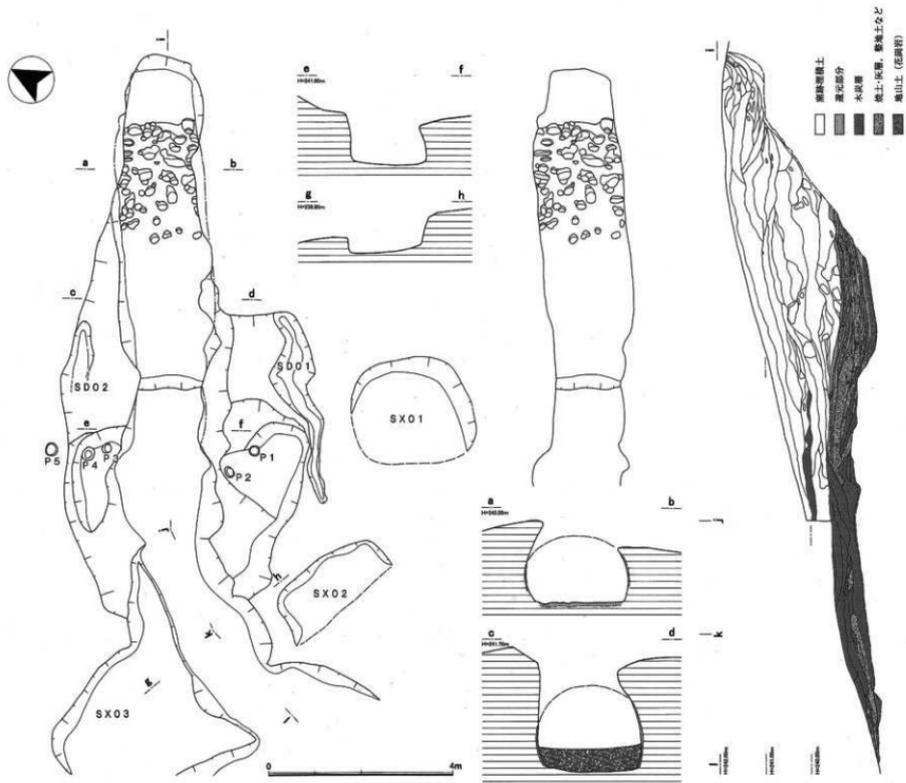
本焼成窯跡は、窯体部、前庭部、灰原部の大きく3つの部分からなり、前庭部や前庭部隣接部に作業平坦面、溝、土坑などが構築されている(第9図)。完掘時点の状態から各施設について概観すると、細長い窯体部に、平面円形状の前庭部(中央部は溝状)、灰原が連続している(第9図)。窯体の焚口部と燃焼部の境界は床面が段状となり、燃焼部が一段低くなっている。前庭部は焚口に接して左右対称に半円状の作業平坦(SX04～07)が付設されている。窯体南部から前庭部にかけて左右対称形に溝(SD01・02)が位置し、南側の作業平坦面の東側と南側に作業場(SX01～03)が構築されている。前庭部中央の溝状の窪みは灰原側が東側に屈曲し、二段掘りとなっているが、操業期間中に3号焼成窯跡埋積部分が沈み込み、これに対応する形で一部成形し直した結果と思われる。前庭部端は灰原に向かってラッパ状に開いており、灰原は斜面下方に向かって緩やかに開いており、中央部が緩やかに窪む皿状の横断面形を呈する(第10図)。

ところで、本焼成窯跡の燃焼部床面は最終操業面下に約70cmの堆積層が認められ、10数枚以上の還元面を確認することができる(第11図上段)ことから、長期間にわたって操業されたものと想定される。燃焼部の堆積状態からは操業期を大きく2時期に分けることが可能で、前半期を第1操業

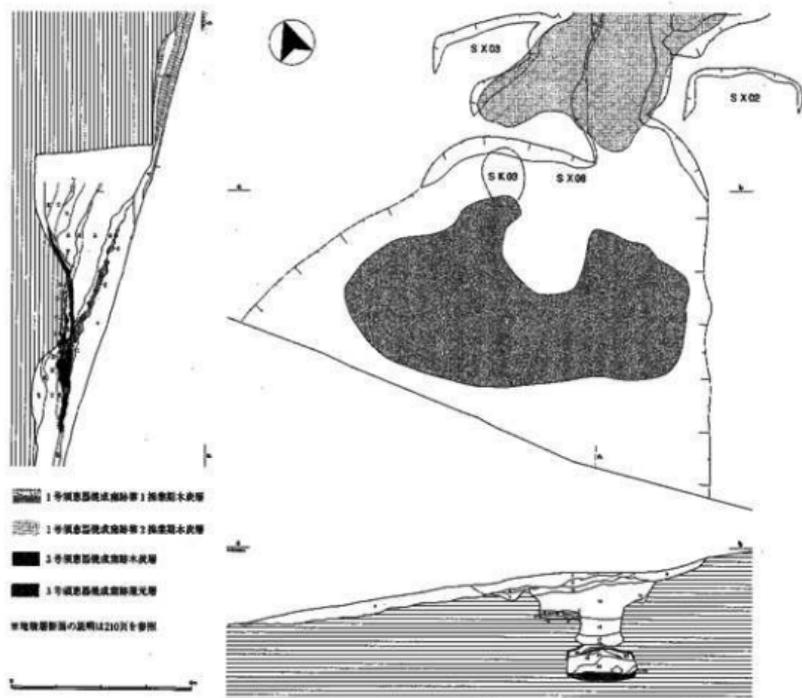


第8図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01調査区設定図

(網目部分は土層観察用セクションベルトを示す。)



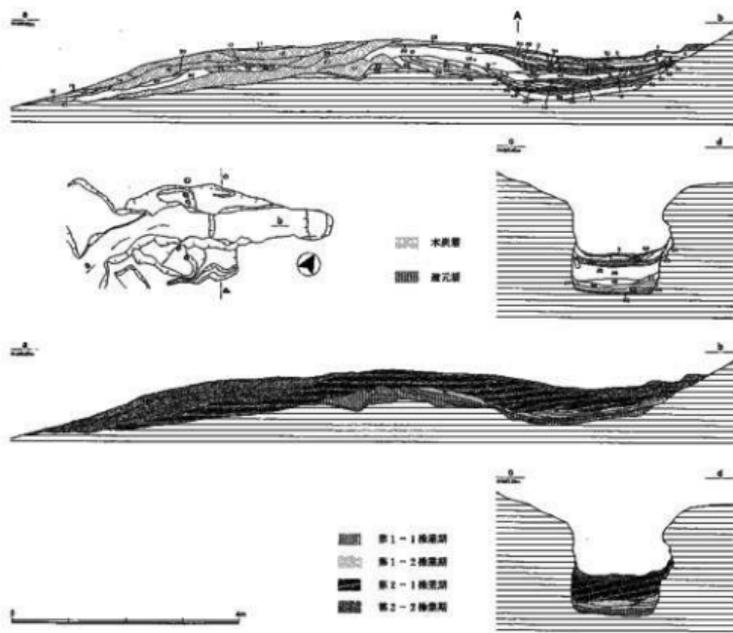
第9図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01実測図  
 (平面図は調査終了時の状態を示す。)



第10図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01前庭部・灰原実測図

期、後半を第2操業期とする(第11図下段)。第2操業期開始期に窯体の大規模改修を行っており、燃焼部～前庭部にかけて窯壁片などを含む非還元層が厚く堆積している(第11図上段39・40・42など)。前庭部の堆積層は木炭層を主体とし、第1操業期の堆積物は第2操業期開始期の窯体部を中心とする改修の際に灰原へ排出されたようで、基本的に第2操業期に関わる木炭層のみである。第1操業期に関わる木炭層は燃焼部～焚口部にかけてわずかに認められる(第11図上段52・57・59)他、灰原に広く堆積が認められる(第10図の濃い網目)。

第1操業期、第2操業期とも非還元層の堆積状況から2時期に細分される。第1操業期では49・50・51層など薄いながらも非還元層が燃焼部を中心に連続しており、小規模な窯体の改修が行われたものと想定される。また、先にも述べたように、第1操業期前半(第1-1操業期)に関連すると思われる木炭層が焚口部から前庭部にかけて認められる(第



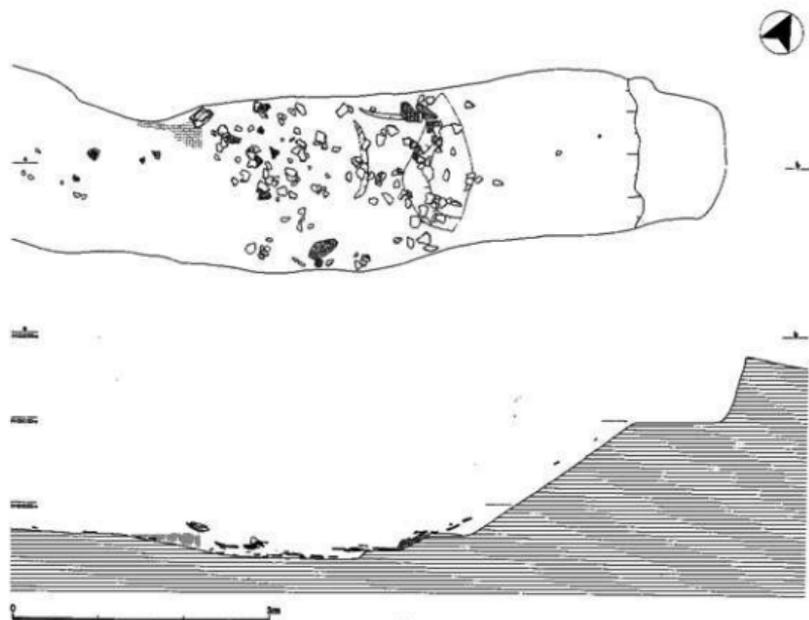
第11図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡S Y01燃焼部・前庭部堆積状況と操業期設定図  
 (上段は還元層と非還元層の堆積状態, 下段は堆積層と操業期の関係を示す。堆積層断面の説明は210頁を参照。)

11図上段52・57・59・61)。木炭層を含む52・57～60層と61～63層は切り合い関係にあり、後者は操業初期の堆積物である可能性がある。第2操業期では4～10層と31・32層の大きく2枚の非還元層群が認められ、3時期に細分できる可能性があるが、還元層を面的に捉えることは十分にできなかった。断面を観察すると、最終操業面で焼成部と燃焼部の境界に造られた平坦面が8・9層上面で観察されることから、平坦面の造成がこの段階に遡ることがわかる。平坦面の造成期とそれ以前の2小期に区分することとした。ただし、先に触れたように、小期に基づく面的な調査はできなかったため、出土遺物については土層観察用セクションベルト部分のもののみが区分できるに過ぎない。

次に、1号焼成窯跡の各部について少し詳しく述べてみたい。最終操業時の窯体の形態および規模について見ると、平面は焚口部で急に幅狭となり、煙道部付近でもやや先細りになっているが、燃焼部・焼成部の幅がほぼ一定で、寸胴状の形態である。規模は、長さ

8.4m、幅は北端部で約1.3m、中央部で約2.2m、焚口部で約1.4mである（第9図）。断面は焼成部および焚口部付近の壁面が良く残存しており（第14図側面の網目部分が還元面を示しており、最終操業期の壁面を示している）、燃烧部についても南側の壁面に天井部の一部が残存していることからほぼ全体の形を推定することができる。床面のやや上部で最大幅となるようで、蒲葺状を呈していたものと推定される。焚口～燃烧部の境界付近では第2操業期初期に側壁や天井部の作り直しをしているようであるが、断面形状は第1操業期初期の形状を基本的に踏襲しているようである（第11図c-d断面）。焚口部は幅狭で、壁面は直立気味である。高さは北端部で約1m、燃烧部北端部の最終の床面から高さ約1.5m、焚口部では1m以下と推定される。主軸はN64°Eで、焼成部床面の傾斜は38°である。窯体の北端部では煙道部は残存しておらず、長さ約1.1m、幅約1.3mの平坦部を形成している。この平坦面の床面はほとんど焼けておらず、周囲の壁も熱を受けた痕跡はあるが、焼成部の壁の状況とはかなり異なり、還元状態を示すところも見当たらない。上部が完全に崩落しているため、詳細な検討が困難であるが、一般的な須恵器焼成窯の煙道部の形態や状況とは異なっている。床面、壁面の様子からは窯が機能していた際の付属施設と見なすのはやや理解しにくい状況にある。しかし、堆積状況を見ると、壁面などを含む堆積層と床面の間にほとんど壁面などを含まない砂質土の堆積が一定の厚さで認められ、その上に天井などの壁面が落ち込んだような様子をしていることから、廃絶後しばらくの間は煙道が残存しており、そこから一定量の土が流入した上に天井などが崩落した可能性が高い。受熱痕跡が弱いのは操業の最終段階で煙道部を大きく改修したことを示すのかもしれない。

焼成部は最終操業面にわずかの堆積が認められ、それらを除去して操業当初の床面を露出させたところ、幅20cm程度の半円形を主体とする平坦面を多数検出した。主軸に直交して並列している部分もあること、燃烧部に長さ20～30cmの角礫が多数落込んでいたことなどから、平坦部に角礫を据え付けるのに利用され、柵状の施設が設けていた可能性がある。また、これらの平坦面が燃烧部のほぼ全面に認められることから、蓋坏、高坏などの小型器種を置くのにも利用された可能性がある。また、先にも触れたように、第2操業期後半には燃烧部との境界付近に平坦面を構築している（第14図S X 08）。最終操業面では2段の平坦面が認められ、上段は平面半月形、下段は方形を呈している。上段は基底部で長さ1.5m、幅80cm、上面で長さ1.1m、幅50cmの規模で、高さは約15cmである。下段は北側と西側（燃烧部側）に段の成形面が認められるが、東側は明瞭な段が認められず、緩やかな傾斜をもって側壁に移行している。長さ1.1m、幅60cmの規模で、高さは約5mである。上段の平坦面は長さ30cm程度の礫を基底部を中心に設置し土を盛り上げて成形してい



第12図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01焼成部・燃烧部最終操業面遺物出土状況実測図  
(白抜きは須恵器、濃い網目は礫、薄い網目は粘土塊を示す。)

る。甕や壺などの大型の器種を置くために利用されたものと思われる。

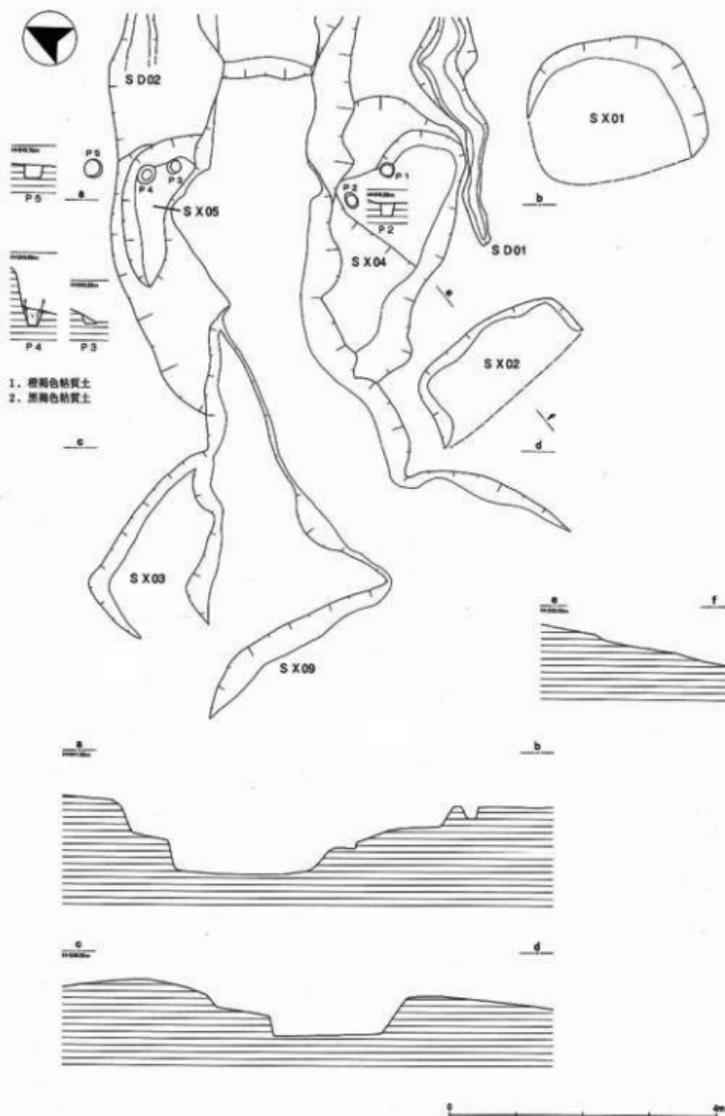
燃烧部最終操業面は焚口部に向かって緩やかな傾斜を形成する程度で、焚口部との比高差もわずかであるが、第2操業期後半を除いては焚口部に向かってかなりの傾斜をもっており（第11図下段断面）、20～30cm程度の比高差がある。床面の傾斜についても変化が認められ、焼成部に向かって操業初期には緩やかに上向いているが、埋積が進むにしたがって次第に水平に近くなっている。

焚口部の壁面は南側がややオーバー・ハング気味であるが、ほぼ垂直に立ち上がっており、非常に強い還元状態を示す。南北壁面には焚口から燃烧部側へ約1m入った部分にそれぞれ3本ずつピットが認められる（第14図P6～P11）。ピットは直径10～15cm程度で、北壁では上下一直線に（P9～P11）、南壁では2本（P6・7）が上下に、残り1本（P8）が下側のピット（P7）とほぼ平行で50cmほど燃烧部側に位置している。ピットの断面はいずれも先細りで、深さは10cm程度である。P8を除くと、壁面に対して左右方向はわずかに

燃焼部に向かって斜めに、また上下方向ではやや下向きに掘り込まれており、とくにP10の傾斜が大きい。P8は左右方向では燃焼部向かってかなり斜め（壁に対して30°程度）に掘り込まれているが、上下方向ではほぼ水平である。これらのピットには直径5～10cm程度の木が差し込まれていたものと推定されるが、ピットの掘り込み方向から見て、それぞれ別の木が差し込まれ、焚口部の中央付近で交差していたものと想定され、焚口部の天井の骨格を構成していたものと考えられる。これらのことから少なくとも操業の最終段階には焚口部の天井は掘り抜きではなく別に構築されていたことがわかるが、焚口部の天井がいつの段階から窯体の掘り抜き天井とは別に高架されていたのかは明らかにできなかった。しかし、焚口部の天井の高さを見ると、操業初期では少なくとも1.2mの規模が想定されるのに対して操業最終段階では80cm以下、第2操業期初期で1m以下と想定される。最終操業面から出土した大甕の高さが約80cmあることから考えると、少なくとも第2操業期初期には製品の窯体内への搬入後に焚口部の天井を架け、須恵器焼成後は再び天井を壊して製品を搬出していったと思われる。

ところで、焼成部東端平坦部（SX08）～燃焼部の最終操業面上には須恵器片が多数残されていた（第12図）。大甕破片を主体とし、蓋坏、無蓋高坏などの小型品や壺などが認められる。これらの遺物はいずれも破片で、焼成時の位置を示すものではないが、大甕破片は全体に分布しているのに対して、蓋坏、無蓋高坏などの小型品は焼成部から燃焼部東部に集中しており、焼成時の位置をある程度反映しているものと思われる。須恵器片に混じって長さ30cm前後の角礫・亜角礫（第12図濃い網目）が散漫な状態で出土している。中・大型の須恵器設置のための固定補助具として利用されたものと推定される。また、焚口部と燃焼部の境界付近でスサ入りの青灰色粘土塊を検出した（第12図薄い網目部分）。焚口部の封鎖などに使用されたものと推定され、製品取り出しのための焚口閉塞部破砕時に窯体内に落ち込んだ可能性がある。

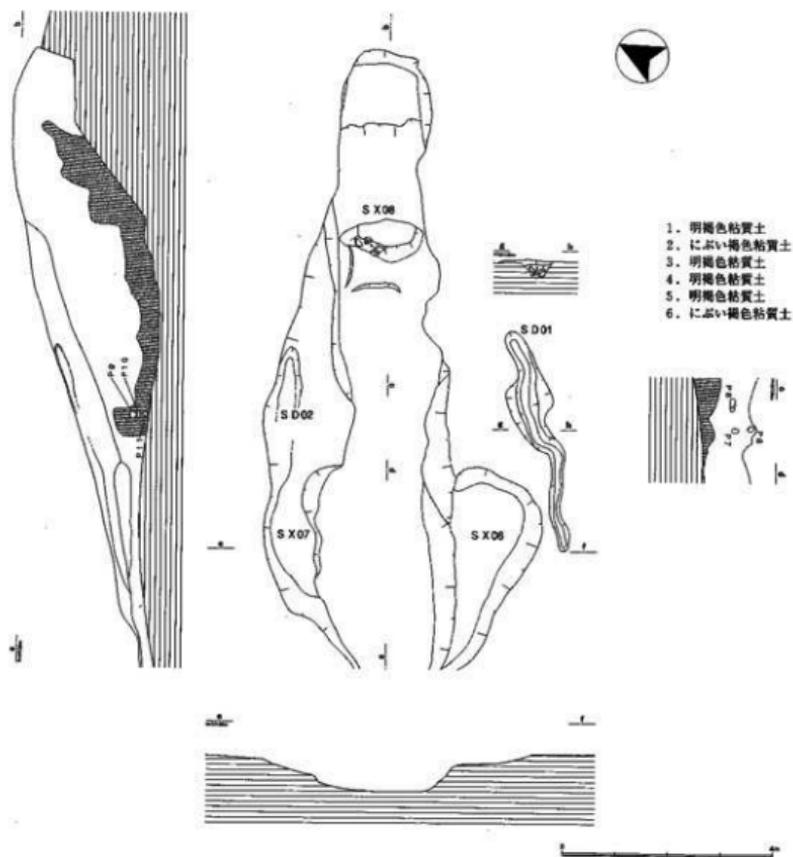
前庭部は中央の溝状部と溝状部の左右に位置する平坦面から構成される。溝状部は焚口に直接接する部分で、焚口部の床面のレベルから変化することなく連続している。完掘時の平面形状は前庭部西側（灰原側）約2/3付近から2段掘り構造となり、2段目（下段）は南側へ屈曲し、焚口から連続する主要部は全体として「く」の字状を呈している（第9図）。幅について見ると、焚口に接する部分でいったんハの字状に開くが、すぐに次第に幅を狭めている。屈曲部以南の2段目は灰原に向かってしばらく幅を減じ、再び幅広に変化するなど増減を繰り返しているが、何らかの機能に基づいた企画というより、下層に3号焼成窯跡が位置することから、3号焼成窯跡埋積土の沈下に影響されていると判断される。溝



第13図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡S Y01前庭部(第1操業期)実測図

状部の1段目(上段)は灰原との境界付近で灰原に向かって大きく開いており、西側の壁は鋭角に、東側の壁も「く」の字状の形状を呈している。溝状部の1段目は屈曲部からしばらくは直線的に窯体の主軸に沿って西側に伸びているが、屈曲点から約2m西側で「く」の字状に屈曲し、灰原へと連続し、2段目との間には広く平坦面が形成されている(SX03)。このように、前庭部溝状部は屈曲部より西側では2段掘り構造となっているが、構築された当初から意図された構造ではなかったと思われる。3号焼成窯跡埋積土の沈下に伴って対処法的に改修された結果と想定される。したがって、当初の形状はほぼ左右対称形を呈していたと考えられ、屈曲部より西側では1段目西側の掘り方、東側では2段目東側の掘り方(1段目と共用)が本来の形状を示すものと想定される。そのように想定するならば、窯体から灰原まではほぼ主軸が揃っていると見ることができ、前庭部溝状部平面は前庭部西側約2/3付近から外側に屈曲し、さらに西側2~3mで大きく外側にハの字状に開く形状となる。この場合、西側の大きく開いた部分からが灰原として意図されていた可能性が高い。本来の溝状部の規模は、焚口部に接するもっと幅広の部分が2.6m、深さ(左右の平坦面との比高差)約60cm、第1の屈曲部で1.8m、深さ60cm、2番目の屈曲部で1.4m、西側の端部で1.2mである。2段掘り状構造の2段目の床面と東側の掘り方上面との比高差は約10cmであるが、1段目の床面と掘り方上面の比高差は60cmであり、これが本来の深さであったと想定される。

前庭部左右作業平坦面は平面三日月形あるいは隅丸三角形を呈し、非対称な平面である。掘り方は焚口部と大きく重複しているが、床面は焚口にあわせるように作り出されている。燃料の一時的な置き場所や工人が窯内の様子を観察するための場所などとして利用されたものであろう。作業平坦面は第2操業期初期の窯体改修に合わせて改修されているようで、平坦面が拡張されている。第1操業期の作業平坦面の掘り方はほぼ左右対称で、全体として扁円形を呈している(第13図SX04・05)。北作業平坦面の掘り方は幅狭の下弦の月状の平面形を呈し、長さ4.2m、幅1.6mである。掘り方の東半をさらに急傾斜に掘り込み、三日月状の平坦面を造成しており、長さ1.8m、幅80cmの規模である。南作業平坦面は北作業平坦面より一回り規模が大きく、掘り方上面は上弦の月状の平面形を呈する。長さ4.2m、幅1.8m、高さ(掘り方上面からの最大比高差)70cmの規模である。やはり掘り方の東半に平坦面を造成しているが、隅丸三角形形状の平面形で、長さ1.7m、幅1.5m、高さ50cmの規模である。南北作業平坦面の西側は明瞭な平坦面形成しておらず、緩やかに中央の溝状部に向かって傾斜している。第2操業期初期の改修に伴う平坦面は第1操業期の平坦面を西側に拡張するような形で構築されている(第14図SX06・07)。北作業平坦面は平



第14図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01(第2操業期)実測図  
(側面図の網目部分は遺元面を示す。)

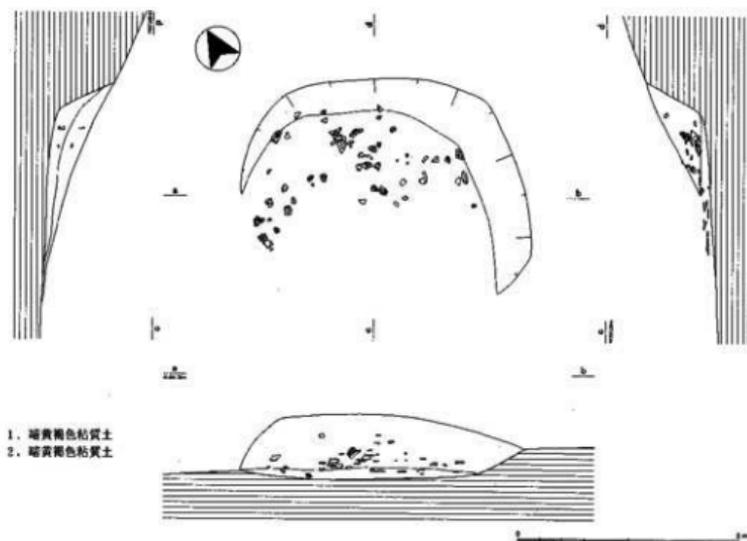
面三日月状を呈し、長さ2m、幅50cm、高さ50cmの規模である。南作業平坦面は北作業平坦面に比較して規模が大きく、東西に長い。平面形は逆イチジク形を引き伸ばしたような形状をしており、長さ3.6m、幅1.4m、高さ30cmの規模である。

第1操業期の南北平坦面上で柱穴4本(第13図P1~4)を検出しており、北作業平坦面の北側でも柱穴1本(第13図P5)を検出した。平坦面上の柱穴は東側の壁面沿いに位置している。北側のP3~P5はほぼ直線的に配されており、南側のP1を含めほぼ直線

状に位置している。柱穴は直径20～30cm前後で、まっすぐ掘り込まれている。P2・3は深さ10cm程度と非常に浅いが、柱穴は調査の最終段階で花崗岩地山を露出した段階で検出したため、もっと深かったと想定される。現状で、P1が深さ10cm、P4が深さ35cm、P5が深さ20cmの規模である。作業時には焚口部を中心に上屋が存在したものと推定される。柱穴の組み合わせについては十分検討できる状況にないが、P1およびP4については完全に第2操業期改修時の堆積土が柱穴上面を覆っていたことから、窯体構築時に掘削されたものであると判断される。P2・3については第2操業期初期の改修面では認識できなかったが、柱穴の深さや断面形状から見て検出面より上層から掘り込まれた可能性が高く、第2操業期初期の改修に伴って掘削された可能性が高い。P5の時期については判断する材料を欠く。作業期間を通じて存在したかもしれない。いずれにせよ、2本柱を基本構造としたと推定され、P5が補助的に利用されたものであろう。この他に柱穴は検出できなかったことから、屋根の東端は斜面に直接立てかけ、下方を柱で支える構造であったものと理解される。

灰原は前庭部の西南側（斜面下方）に構築されている。3号焼成窯跡を埋積して形成された斜面をほぼそのまま利用しており、3号焼成窯跡の前庭部の形状に影響され、北側の縁辺は3号焼成窯跡前庭部掘り方上面とほぼ重複している。第1操業期には前庭部端部から連続的に灰原が形成されており、ハの字状に斜面下方に向かって開く形状を呈している（第10図）。灰原は斜面下方の調査区外まで広がっており、その規模を明らかにすることはできないが、前庭部との境界で幅5.6m、調査区南端部で幅7.4mの規模で、長さ約6.5m分を調査した。前庭部との境界付近は横断面がほぼ平らであり、西側の当時の地表との境界が不明瞭であるが、基本的に横断面は中央部が緩やかに窪み皿状を呈している。また、主軸方向の縦断面は3号焼成窯跡焚口部付近までは30～40°の急傾斜を形成し、3号焼成窯跡前庭部あたりでは水平に近い緩やかな傾斜に変化している。第1操業期の堆積物は木炭層を1層確認できるだけ（第10図濃い網目部分）であり、あまり厚い堆積層を形成していない。しかし、木炭層の上部を覆うのは暗黄褐色粘質土層1枚のみであり、第2操業期初頭に意図的に埋積されたものと想定される。第1操業期の木炭層は南縁が途切れたような状態で南側に分布が広がらないことから第2操業期初頭の改修時に第1操業期の堆積物の一部が削平されさらに下方に移動した可能性もある。

第2操業期初頭には、上述のように、灰原をいったん埋積してほぼ平坦な斜面を形成し、3号焼成窯跡埋積土沈下に伴って形成された前庭部の二段掘り状溝部を延長している。第2操業期初頭の改修では灰原は明瞭な形状を示さず、20°程度の斜面をそのまま灰原としていたようである。前庭部の溝状部南端部の平面形状は調査時には確認できておらず明確



第15図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡S Y01・1号作業場S X01実測図

にできないが、主軸方向ではほぼ水平（第10図c-d断面3層下面の形状）で、横断面は皿状の窪み（第10図a-b断面2・3層下面の形状）であったものと思われる。また、溝状部南端の西側には平坦面（S X03）があるが、この改修時に構築された可能性が高い。

1号焼成窯跡に近接して、作業場や溝が認められる。作業場は4基（S X01・02・03・09）検出しており、前庭部の東側に1号作業場S X01、2号作業場S X02、前庭部の西側に3号作業場S X03、4号作業場S X09が位置している（第13図）。これらの作業場の性格は十分明らかにできないが、製品や燃料、道具などを一時的に置く場所として利用されたものと想定される。

1号・2号作業場S X01・02は窯体・前庭部と切り合い関係を有さず、構築時期が不明である。3号作業場S X03は前庭部と重複しているが、調査時には前庭部の一部として認識して調査したため、切り合い関係の有無については確認できない。以上のように、1号～3号作業場については構築時期を明らかにできないが、2号・3号作業場は、前庭部溝状部南半の2段目主軸とほぼ直交するようにほぼ左右対称的な位置にあり、平面形状、規模ともにほぼ同じであることから、3号焼成窯跡埋積土沈下以降に配置されていた可能性

がある。4号作業場S X09は、先に述べたように、第2操業期初頭に新たに構築されたと考えられる。1号作業場については、その他の作業場が1号焼成窯構築当初には存在していなかった可能性が高いこと、規模や掘り方などがしっかりしていること、前庭部作業平坦面の南東側に近接して位置し、北平坦部、南平坦部とほぼ直線的に配されていることなどから1号焼成窯跡構築当初から存在した可能性が高い。

1号作業場S X01は斜面上方を削平して大略楕円形の平坦面を形成している(第15図)。長さ約2.6m、幅約2.0m、高さ約50cmの規模をもつ。床面上には須臾器片が北半部中心に分布していた。須臾器は床面から浮いているものが多く、北側の壁沿いの資料がもっとも高く浮いている。上手(北東側)から流れ込んだ状況を示しているものと思われる。2号作業場S X02は緩やかな傾斜地を平面コの字状に掘削して平坦面を形成している(第13図S X02)。長さ2.3m、幅約1.0mの規模である。3号作業場S X03は東側の壁の存在は不明であるが、2号作業場とほぼ同じ床面形状と規模を有しているものと推定される(第13図S X03)。長さ2.4m、幅1.2mの規模である。4号作業場S X09東半部は3号焼成窯跡を埋積した整地土をL字状に削平して平坦面を形成しており、長さ約3.4m、幅約1mの規模をもつ(第12図S X09)。3号土坑S K03が位置しており、調査では両者の切り合い関係を確認していないが、4号作業場造成からあまり時間をおかない段階で3号土坑が構築されたものと推定される。

3号土坑(第10図S K03)は検出前に南端部を削平しているが、平面楕円形を呈すると推定される。小規模な土坑で、長径1.2m、短径80cm、深さ約20cmの規模をもつ。埋土は黄褐色系の焼土・灰泥じりの粘質土で、壁面は焼けていない。遺物の出土はほとんどなく、性格は不明である。

溝は窯体に近接して左右対称に近接して配されており、窯体西端部から前庭部にかけて位置している(第14図S D01・02)。1号溝S D01は前庭部作業平坦部の北側では窯体に沿ってほぼ直線的であるが、平坦面付近では平坦面の掘り方に沿うように蛇行している。企画性に乏しく、幅も不規則であるが、窯体側が40cm～1mと幅広で、前庭部側で急速に幅を狭め、先細りの形状をしている。長さ4.2m、深さは窯体側で40cm程度、前庭部側で15cm程度の規模であり、窯体側では一定の深さを保っている。2号溝S D02は東端部が1号溝とほぼ対称的な位置にあるが、痕跡的で、深さは10cm以下であり、西側は不明瞭となっている。現存で、長さ1m、幅50cmの規模である。乾燥した時期を中心に操業されたと想定されることや1号溝は両端とも閉じていることから、排水機能が期待されたかどうかは定かではないが、1号溝の西側に、焚口部付近に存在が想定される屋根の範囲がほぼ一

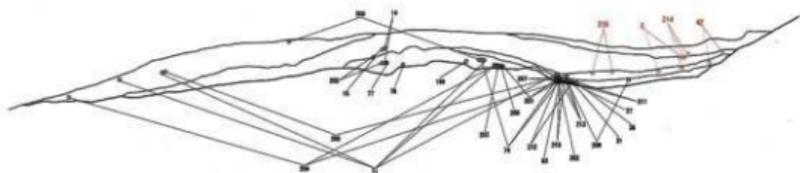
致することから、一定の排水機能を有していたものと理解される。

(藤野次史)

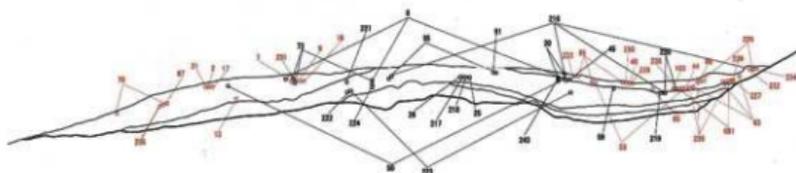
## 2) 須恵器接合資料

窯体内および前庭部、灰原部から出土した須恵器は出土地点を中心にかなり広範に接合しており、一部は集落内出土品とも接合している。これらは操業に伴う失敗品の廃棄や製品の搬出、窯体の改修などに関連して生産物が移動した結果であると判断される。また、燃焼部や前庭部の堆積状態から1号焼成窯跡では大きく2期の操業期が区別され、各操業期はさらに2小期が認識できた。接合資料は出土堆積層内を中心に上下の層とも接合関係が認められる。出土須恵器の接合関係は、1号焼成窯跡の操業の様子や操業期区分を考える上で重要な情報であることから、接合資料の概要について述べてみたい。なお、窯体内の最終操業面および窯跡検出以前の出土遺物については平面位置、出土標高を全て0.5cm単位で取り上げたが、窯体内および前庭部以外の出土資料については1m区画ごとで一括して取り上げている。したがって、以下に示す接合関係図の各遺物うち1m区画一括取り上げ資料の位置は、各区画の中心を仮に出土位置として表示している。窯体内出土資料(最終操業面上の資料を除く)は、第10図に示した調査区を単位として操業期ごとに一括して取り上げた(ただし、第2-1操業期と第2-2操業期は一括して取り上げている)。土層観察用セクションベルトについては、可能な限り堆積層ごとに取り上げ、東西セクションベルトは1・3区、2・4区、3・5区、4・6区、5・7区、6・8区を単位として、南北セクションベルトは1・2区、3・4区と5・6区、7・8区を単位としている。また、出土位置を○印で示しているが、○印は必ずしも資料1点を示すものではなく、同じ位置で複数点数接合した場合も1つの○印で示している。最終操業面以外の窯体内出土資料のうち、各調査区出土資料は調査区の中心付近に重複しないように任意に配置しており、正確な出土位置を示していない。土層観察用セクションベルト出土資料についても同様で、東西セクションベルト出土資料は各区の中央付近に、南北セクションベルトは1~4区および5~8区セクションベルトの中央付近に配置した。各接合資料のうち、堆積期(操業期)を越えて接合関係をもつ場合、接合点数が多い方の堆積層(操業期)に帰属させている(同数の場合は、大型の個体の方に帰属させている)。

まず、上下方向での接合関係について、操業期単位の堆積物と出土須恵器の接合関係から検討してみたい(第16・17図)。まず第1操業期(第16図)であるが、第1-1操業期、第1-2操業期の堆積層中の接合資料はそれぞれ近接した出土位置で接合するものが多く、各操業期の堆積層内で接合しているものが大半である。しかし、第1-1操業期堆積層の接合資料では燃焼部と前庭部に出土位置をもつ資料が接合しており、4~5mの距離



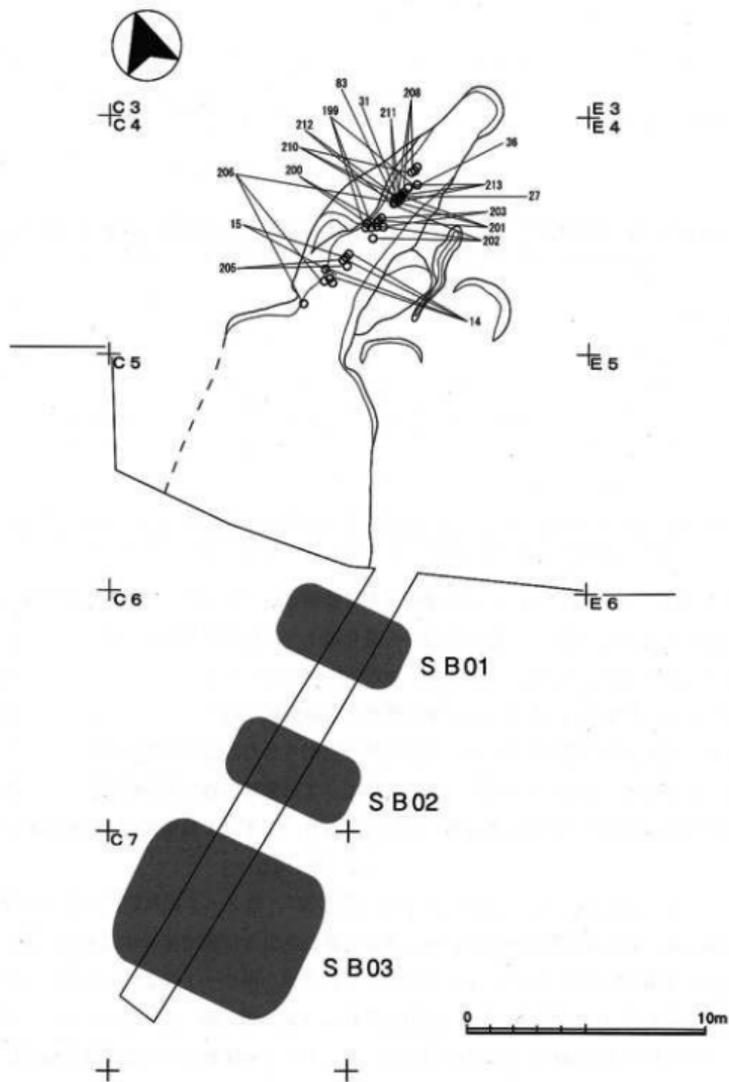
第16図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第1操業期出土須恵器接合関係垂直分布図  
(黒○印は第1-1操業期(前半), 赤○印は第1-2操業期(後半)の資料である。)



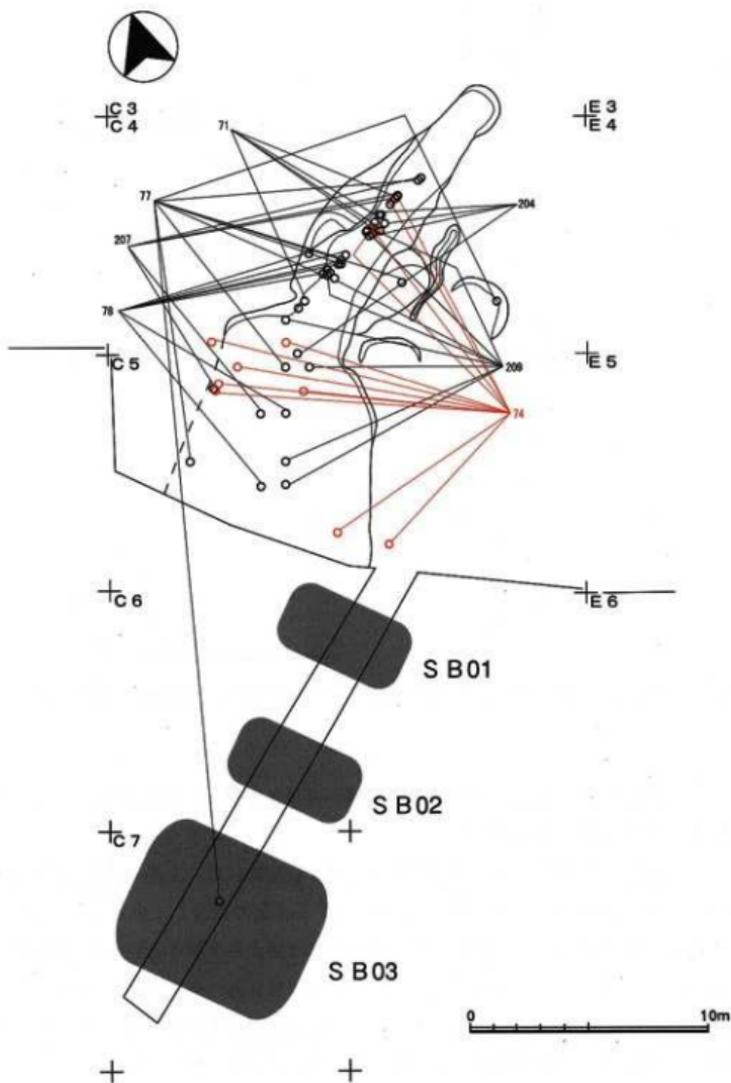
第17図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2操業期出土須恵器接合関係垂直分布図  
(黒○印は第2-1操業期(前半), 赤○印は第2-2操業期(後半)の資料である。)

がある(71, 204, 206, 209)。前庭部の出土堆積層はいずれも第2-2操業期であり、堆積にかなりの時間差がある。接合関係から見た第1-1操業期の堆積層から他の操業期堆積層への浮き上がりと思われる例は14, 205などが認められるが、平面的な移動距離はわずかであることから、71をはじめとする燃焼部と前庭部の接合例は第1操業期における窯体内からの掻き出し行為などによって窯体外に排出された須恵器破片が再堆積(周辺からの流れ込みなど)したものと解釈される。第1-2操業期の堆積層中の接合資料はあまり多くないが、基本的に近接した位置で接合しており、第2-1操業期の堆積層へ浮き上がりと思われる状態若若干の接合例が認められる(5, 42)。

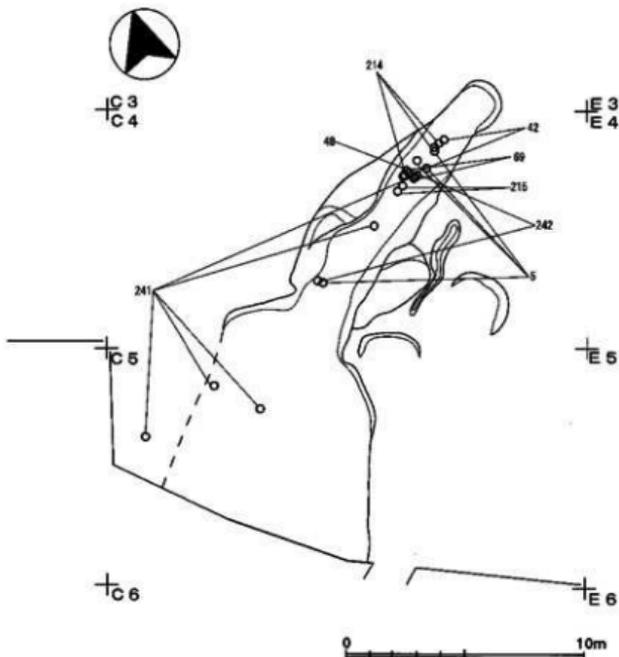
次に、第2操業期について検討してみる(第17図)。第2-1操業期、第2-2操業期についても、第1操業期と同様に、それぞれ近接した出土位置で接合するものが多く、各操業期の堆積層内で接合しているものが大半であるが、第2-1操業期では燃焼部および焚口部と前庭部の間で接合するものが散見される(8, 50, 85, 216, 223)。85, 223は第2-1操業期の堆積層内での接合であるが、8, 50, 216は第2-2操業期堆積層出土品との接合関係である。窯体内から前庭部への堆積層の掻き出し行為に伴う移動と思われる、操業期を越える堆積層相互の接合関係は周辺からの再流入を示す可能性が高い。また、第



第18図 障ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第1-1作業期出土須恵器接合関係平面分布図(1)  
 (1~4ヶ所の接合関係を有するものである。)



第19図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窟跡第1-1操作期出土須恵器接合関係平面分布図(2)  
 (黒○印は5~9ヶ所, 赤○印は10ヶ所以上の接合関係を有するものである。)

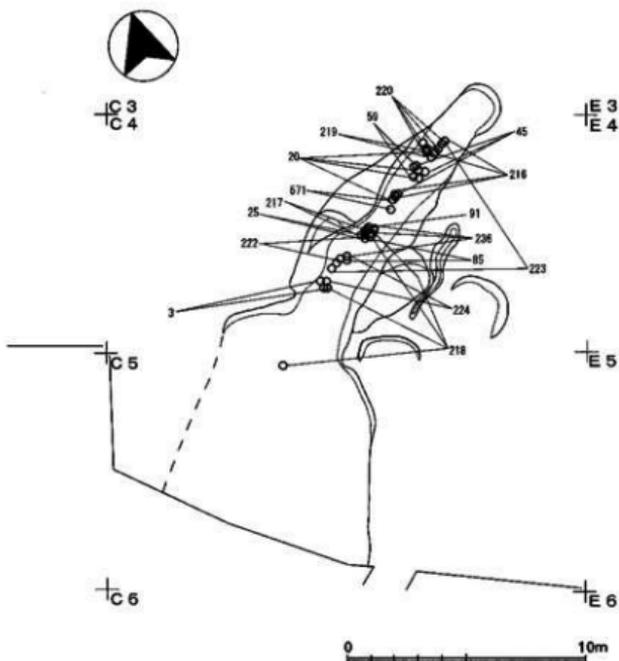


第20図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第1-2作業期出土須恵器接合関係平面分布図

2-1 作業期堆積層から第2-2 作業期堆積層への浮き上がりと判断される例(73)が若干あるが、平面的移動距離は少ない。

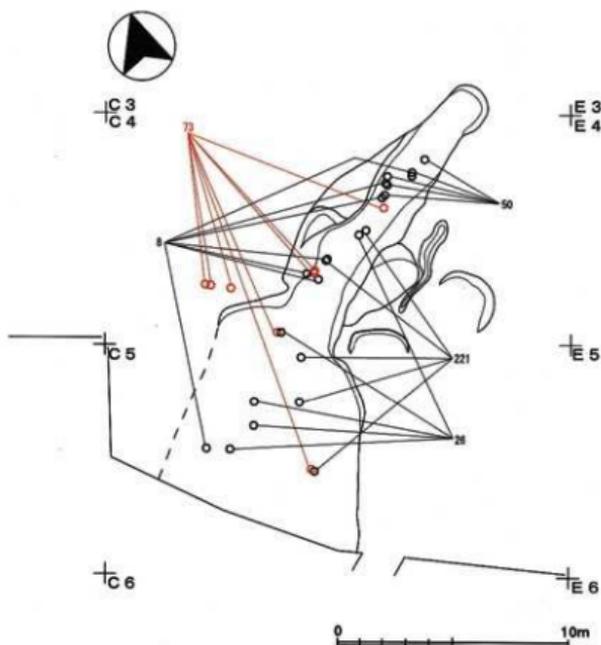
以上、上下方向での接合関係を概観してきたが、結論的には、上述の燃焼部から前庭部にかけての堆積状況から見た作業期区分を補強する状況で接合していると言えるであろう。平面的には窯体内から窯体外へ、上下方向では下層から上層へという動きが想定される。燃焼部や焚口部の木炭・灰層の掻き出しに伴って窯体外へ排出された個体以外に窯内に残される個体が相当量あることが示され、それらは若干の上層や平面の移動があるにせよ、廃棄時の位置を大きく移動していないことが推定される。また、上下方向については、上層への浮き上がりはあるが、下層への沈み込みは基本的に認められないようである。

次に、各作業期の出土須恵器の接合関係について平面分布から検討してみよう(第18~



第21図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-1 操業期出土須恵器接合関係平面分布図(1)  
(1~4ヶ所の接合関係を有するものである。)

25図)。第1-1 操業期では25例の接合資料があり、平面位置の表示可能な24例について提示した(第18・19図)。接合箇所(○印は点数を示しておらず、接合資料の位置を示しているのみである。したがって、同じ箇所にも複数点存在する場合も○印1点で示している。)1~4(第18図)ではいずれも近接した出土位置の資料が接合しているが、5~9(第19図黒○印)、10以上(第19図赤○印)は広範囲に分布する資料が接合している。それらの広範囲の接合資料は窯体内と前庭部、灰原部出土資料の接合で、窯体内出土資料は相互に近接するが、前庭部、灰原部の資料は散漫な分布状況を示す。上下方向における接合資料の分布状況の説明の中で述べたように、元々窯体内にあった資料が木炭・灰層の掻き出しなどによって窯体外に排出された状況を示すものと思われる。また、77は3号住居跡S B03出土資料と接合している。3号住居跡では多量の須恵器が床面などから出土しており、失敗

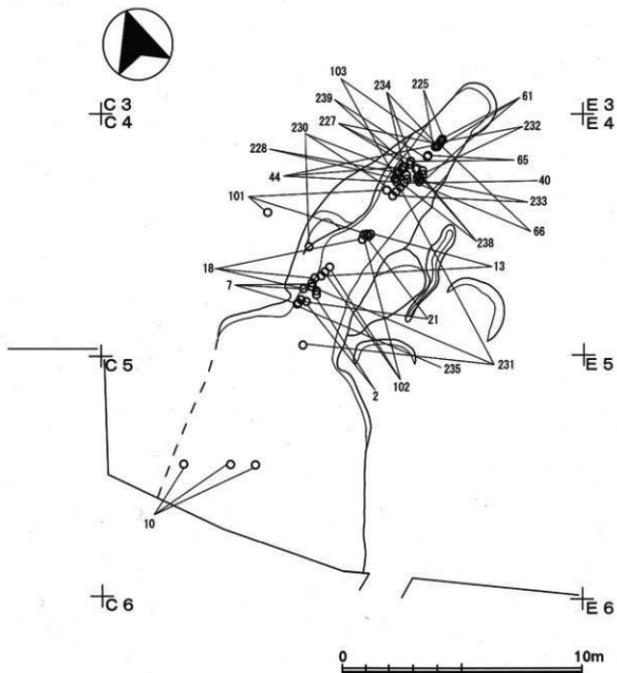


第22図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-1操業期出土須恵器接合関係平面分布図(2)  
(黒○印は5~9ヶ所, 赤○印は10ヶ所以上の接合関係を有するものである。)

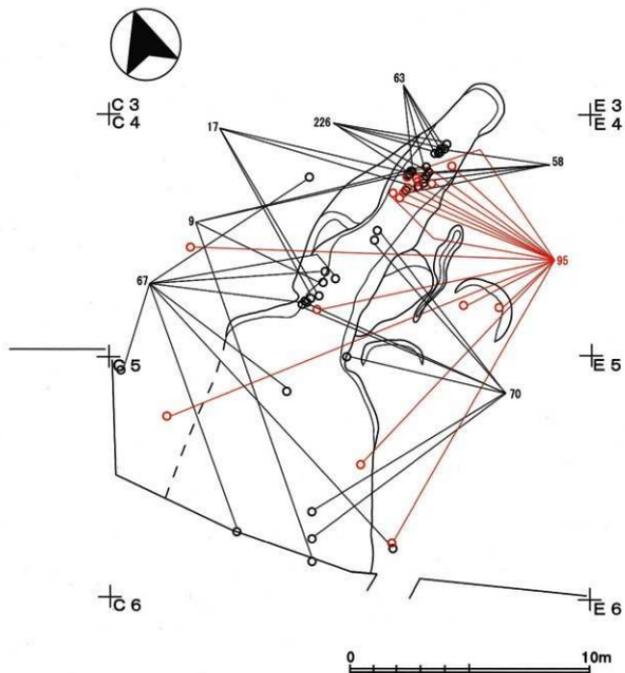
品や破損品などが何らかの理由で焼成窯から搬出されたことを示している。なお、先述したように、接合箇所1~4については窯体内のみに分布が収まっているが、接合作業が進展すれば接合箇所5以上と同様に窯体外との接合関係が認められるようになるものと推定される。

第1-2操業期に属する資料は点数的に少なく、したがって、接合資料も8例と多くはない。241以外は、接合箇所1~3であり、窯体内の近接した出土位置相互で接合しているものが多い(第20図)。5, 241, 242は窯体内と前庭部、灰原部の接合関係を示す。とくに、241は窯体内と灰原部出土資料の接合が中心である。

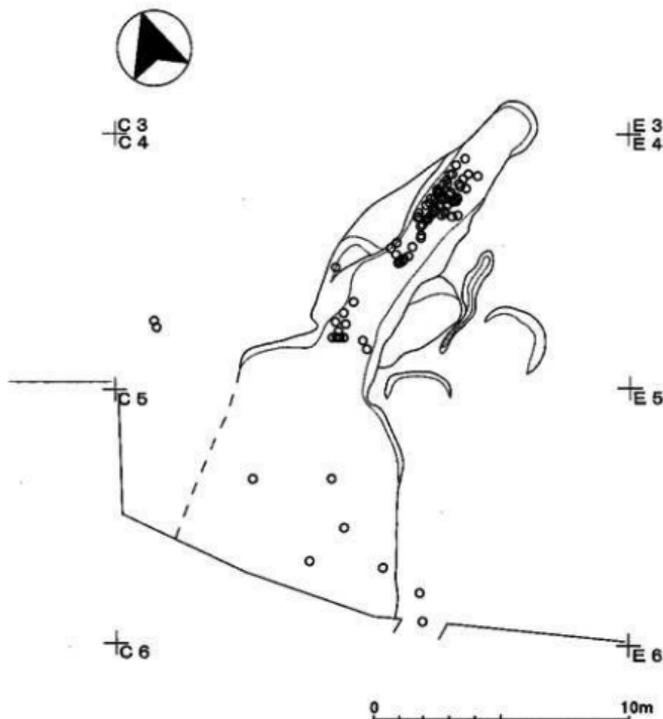
第2-1操業期では22例の接合資料があり、平面位置の表示可能な22例について提示した(第21・22図)。接合箇所1~4(第21図)は窯体内および焚口付近に大半の資料が分布し、前庭部に若干の資料がある。多くの資料は近接した位置関係を示しているが、20,



第23図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窟跡第2-2作業期出土須恵器接合関係平面分布図(1)  
(○印は1-4ヶ所の接合関係を有するものである。)



第24図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窟跡第2-2作業期出土須恵器接合関係平面分布図(2)  
(黒○印は5-9ヶ所、赤○印は10ヶ所以上の接合関係を有するものである。)



第25図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡第2-2操業期出土須恵器接合関係平面分布図(3)  
(大壺(第34図105)の接合関係を示している。)

45, 216など接合箇所3~4では窯体内でも主軸方向にやや直線的な広がりを見せており、218, 223など窯体内と前庭部の間で接合関係の認められる例もある。接合箇所5~9, 10以上(第22図)では50が比較的近接した接合関係を示すが、おおむね広範な接合関係を示し、窯体内と前庭部、灰原部の間で接合している。また、1号焼成窯跡前庭部、灰原部の西側にあたるC4区南部~C5区には多数の須恵器片が分布しており、73の接合関係で示されるように、これらの須恵器が1号焼成窯跡から掻き出された木炭・灰層とともに窯体内から排出されたことを窺わせている。同様に、窯体内の第1-1操業期堆積層と前庭部の第2-2操業期堆積層から出土した須恵器が接合する事実も、窯体外へ排出された堆積層・須恵器の前庭部・灰原部への再堆積(流入)として理解できよう。

第2-2操業期では54例の接合資料があり、平面位置の表示可能な34例について提示した(第23~25図)。最終操業面上に残された資料を中心に接合関係を認めることができる。接合箇所1~4(第23図)は窯体内を主体として前庭部に散漫に分布する。近接した出土位置同士の接合関係を示すものが大半であるが、44, 66, 101, 102, 227など窯体の主軸方向へ一定の広がりを示す資料がある。接合箇所5~9, 10以上(第24・25図)では窯体内と前庭部に集中しており、窯体内では、58, 63, 226のように、窯体主軸方向への広がりが弱い例もあるが、窯体内に分布の集中があり、窯体外に散漫な分布を持つものが多く、67, 70のように前庭部に分布の主体があり、灰原部に散漫な分布を持つものが認められる。もっとも接合個体の多い105(大甕)は窯体内に集中的な分布を見せるが、前庭部、灰原部にも分布が認められる(第25図)。本例は窯体内では全て最終操業面上に残されており、前庭部や灰原部の資料も基本的に最終操業面あるいはそれに近接した堆積層である。先にも述べたように、第2-2操業期の接合資料の多くが最終操業面上の資料であり、接合箇所5以上の資料の分布状況も105(大甕)と同様であることから、製品の搬出に際しても窯体内の須恵器破片が窯体外に拡散することを示している。

以上のように、各操業時期の接合関係を見ると、窯体内の資料は多少の擾乱を受けていると思われるものの、出土状態は廃棄状態を基本的に反映しているものと理解できる。また、窯体外への排出の契機は、製品の搬出や燃焼部、焚口部の木炭・灰層の掻き出し、窯体の改修などと想定される。(藤野次史)

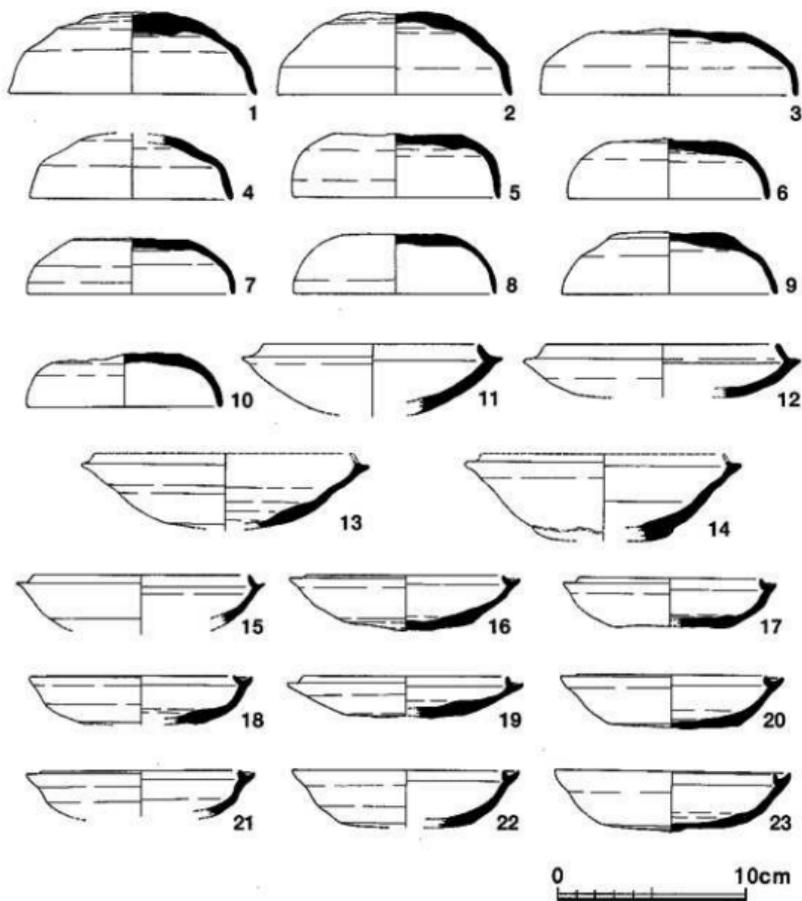
### 3) 出土須恵器

窯体部、前庭部、灰原部から多数出土している。器種には、壺坏、高坏、壺、蓋、坏、鉢、埴、壺、平瓶、甕、横瓶がある。

なお、2号焼成窯跡出土遺物のなかには、1号焼成窯跡および3号焼成窯跡由来のものも含まれる。本報告では、2号焼成窯跡およびその周辺出土遺物であっても、整理・分析の成果として、それぞれを由来する1号焼成窯跡、3号焼成窯跡出土遺物に含めて報告する。

壺坏(第26図) 坏蓋、坏身は完形に復元される個体は少ないが、相当数ある。

坏蓋(1~10) 天井部が丸みを帯びるものと平坦なものがあるが、体部と天井部は明瞭な稜をなさない。口縁部は直立気味のものと同外反気味のものがあり、口縁端部は先細り気味に丸く収めている。1は天井部から口縁部まで大きく湾曲した形状を呈している。口縁端部は先細り気味である。外面口縁部から天井部にかけて回転コナデ調整、天井部は回転ヘラ切り未調整である。内面口縁部から天井部にかけて回転コナデ調整、内面天井部はナデ調整を施している。やや大型である。2は体部と口縁部の境に緩やかな稜がある。



第26図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(1)

口縁部は外反しながらやや外に開く。天井部外面には粘土が残り、その外側に切り離しの際の削り痕が見える。それ以外は磨耗のため調整は不明である。3は比較的扁平な形態をしている。天井部は粘土紐の痕跡が残り、不定方向のナデ調整によって粗雑に仕上げられている。天井部内面も不定方向のナデ調整が施されている。体部から口縁部にかけての器壁は薄く、その境は緩やかな稜を形成する。4は、天井部は回転ヘラ切り未調整である。

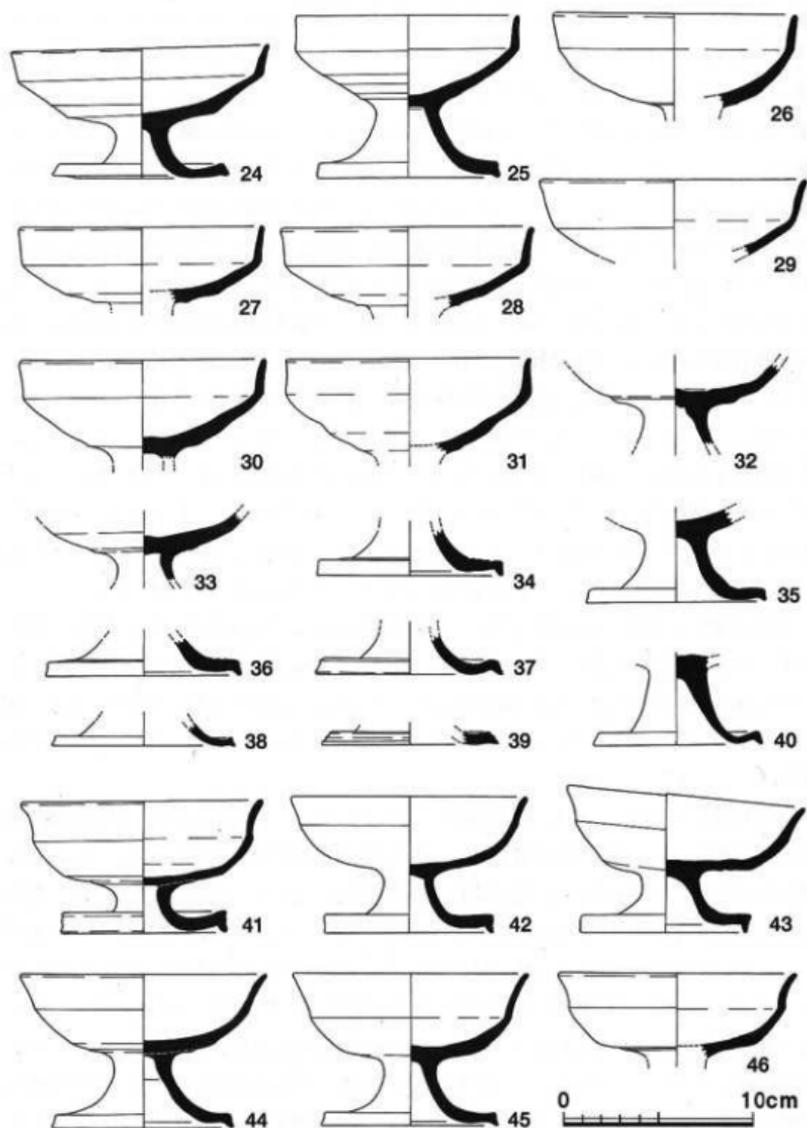
体部と口縁部は緩やかな稜を形成し、口縁部は外傾している。内面上部は不定方向のナデ調整が施されている。5～10は口径10～11cmの小型である。5の天井部は平坦で広く、天井部から湾曲後はわずかに内湾気味に口縁部にいたる。口縁端部は先細り気味である。天井部は回転ヘラ切り未調整である。6～8は天井部が広く平坦で、体部は緩やかに湾曲して、ほぼ垂直に口縁部にいたる。口縁端部は丸く取めている。天井部は回転ヘラ切り未調整である。それ以外の内外面は回転ナデで内面中心まで同心円状のナデ痕が残る。9は体部に緩やかな段状を呈し、そこからやや内湾しながら口縁部へいたる。天井部は回転ヘラ切り未調整で、粘土がまわりへ押し出されている。天井部から口縁部にかけては水挽き時の斜め方向のナデ痕がよく残る。10の天井部はヘラ切り痕がそのまま残る。丁寧な仕上げは見られない。ヘラ切りと体部との境から湾曲して口縁部にいたる。内面天井部は不定方向のナデ調整により仕上げている。全体はやや扁平である。

坏身（11～23）は、底の深いものと浅いものがある。立ち上がりは低い。11は、底部から体部にかけて弧状を呈している。立ち上がりは内傾し、わずかに外反している。受け部よりも上に出ている。受け部端部は水平に外を向き、やや尖り気味である。凹部の凹みはなく、湾曲して立ち上り端部にいたる。器壁は比較的厚い。内面はナデ調整により平滑に仕上げられている。12は底部がやや広めで、底が浅く扁平な形状をしている。立ち上りは内傾して立ち上がっている。受け部端部は水平に外を向いている。外面体部は回転ナデ仕上げ、内面底部付近は不定方向のナデ調整を施している。受け部に、対になる坏蓋の口縁部がわずかに欠損し付着している。13・14は底部から口縁部にかけてハの字状に直線的に開く。内面に成形時の凹凸が残り、口縁部に行くほど、器壁は薄くなる。立ち上りは欠損しているが、受け部よりも上に出しており、また器壁はさらに薄い。受け部端部は水平に外を向いている。13・14の底部は回転ヘラ切り未調整である。内面底部は不定方向のナデ仕上げを施している。15の立ち上りは内傾して立ち上がり、内面がやや膨らむ。受部端部は水平に外を向いており鋭く仕上げている。底部は回転ヘラ切り未調整、それ以外は回転ナデを施している。16の立ち上がりは内傾し、緩やかに外反する。受け部よりやや上に突き出ている。受け部は薄く端部は上を向いている。底部は回転ヘラ切り未調整である。内面底部は不定方向のナデ調整を施している。17の立ち上りは折り返して作り、受け部よりもわずかに上に突き出している。体部と受け部との境は外湾し段を形成するが、すぐに受け部端部にいたる。端部は上を向いている。18の立ち上がりは低く、受け部からほんのわずかに外に出る程度である。立ち上りは折り返しにより作られている。体部と受け部との境は緩やかに外湾し受け部端部は上方を向いている。底部は回転ヘラ切り未調整である。内

面底部は中心まで同心円状のナデ痕が残る。19は底が浅く扁平なものである。底部からわずかに屈曲して体部となりそのまま受け部にいたる。受け部端部外面は外湾し、端部は上を向く。立ち上りはほぼ上方に立ち上り、受け部からわずかに出ている。底部は回転ヘラ切り未調整である。内面は回転ナデ調整で底部付近を不定方向のナデ調整で仕上げている。20の立ち上がりは低く、受け部からほんのわずかに上に出る程度である。立ち上りは折り返しにより作られ、内面に丸みを帯びた稜を持つ。受け部外面は湾曲し、端部上方を向いている。底部は平坦で回転ヘラ切り未調整である。底部内面は不定方向のナデにより仕上げている。21の立ち上りは低く、受け部からわずかに上に出る程度である。立ち上りは折り返し成形が口縁部内面に明確な稜を形成しない。外面体部と受け部の境は外湾し、緩やかな段を形成する。受け部外面は湾曲し端部は上方を向いている。内外面とも回転ナデ調整である。22の立ち上りの高さは非常に低く、受け部と同じである。体部と受け部との境は外湾し、緩やかな段を形成する。受け部外面は湾曲し端部は上方を向いている。内面底部は不定方向のナデ調整で仕上げている。23の立ち上りは非常に低く、受け部よりもわずかに低い位置にある。立ち上りは折り返しによって作られている。体部と受け部との境は外湾し緩やかな段を形成する。受け部外面は湾曲し、端部は上方を向いている。底部は回転ヘラ切り未調整である。内面底部は不定方向のナデ調整により仕上げている。

高坏（第27・28図，第29図67～70） 出土須恵器の中では高坏の出土が最も多い。高坏には、無蓋と有蓋の形態がある。無蓋の形態には、今回確認できたものはすべて短脚であった。無蓋短脚のものは、坏部と脚部の形態からさらに分類することができる。有蓋の形態はすべて長脚である。つまり、大きくは無蓋短脚高坏と有蓋長脚高坏に分けることができる。

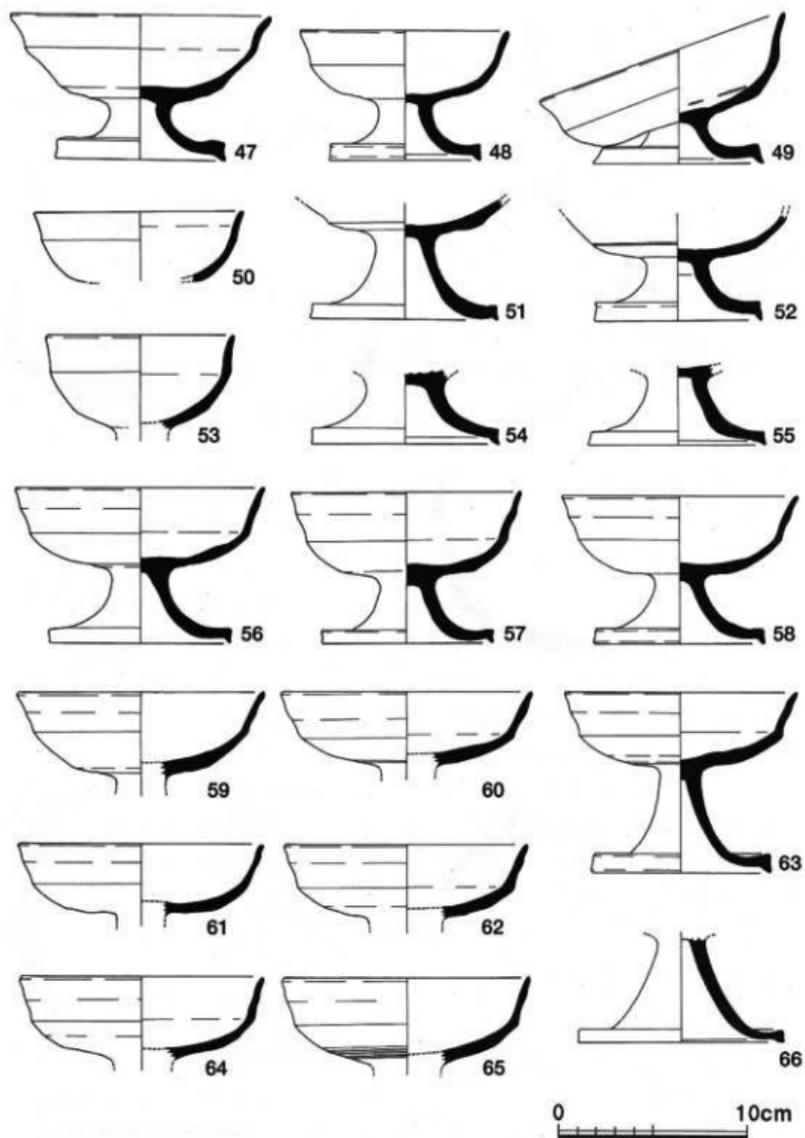
無蓋短脚高坏（第27・28図，第29図67） 高坏のほとんどを占めている。24は口縁部近くに稜を形成し、口縁部はやや外傾している。稜から口縁端部までの幅は短い。坏部底部外面は回転ヘラ切り未調整で、逆さにして脚部を接合している。接合時、脚部の粘土を坏部側に伸ばし付けている。脚部の基部径は細い。ハの字に開くものの、脚裾部でUの字形に垂れ下がり脚端部にいたる。脚端部は外傾している。脚裾部下が下につき、脚端部が浮き上がっている。25は体部上半に明瞭に稜を形成し口縁部にいたる。口縁部はほぼ垂直に上を向き口縁端部は丸く収める。稜から口縁端部までの幅は短い。坏部を逆さにして坏部底部外面2/3にヘラ削りを反時計回りで行った後、脚部を接合している。脚部の粘土が坏部底部に貼り付けられ、その境は段となっている。脚部はハの字に開き、わずかに平坦な裾部を作りながら、そのまま脚端部にいたる。脚端部はやや外傾し下部はわずかに垂



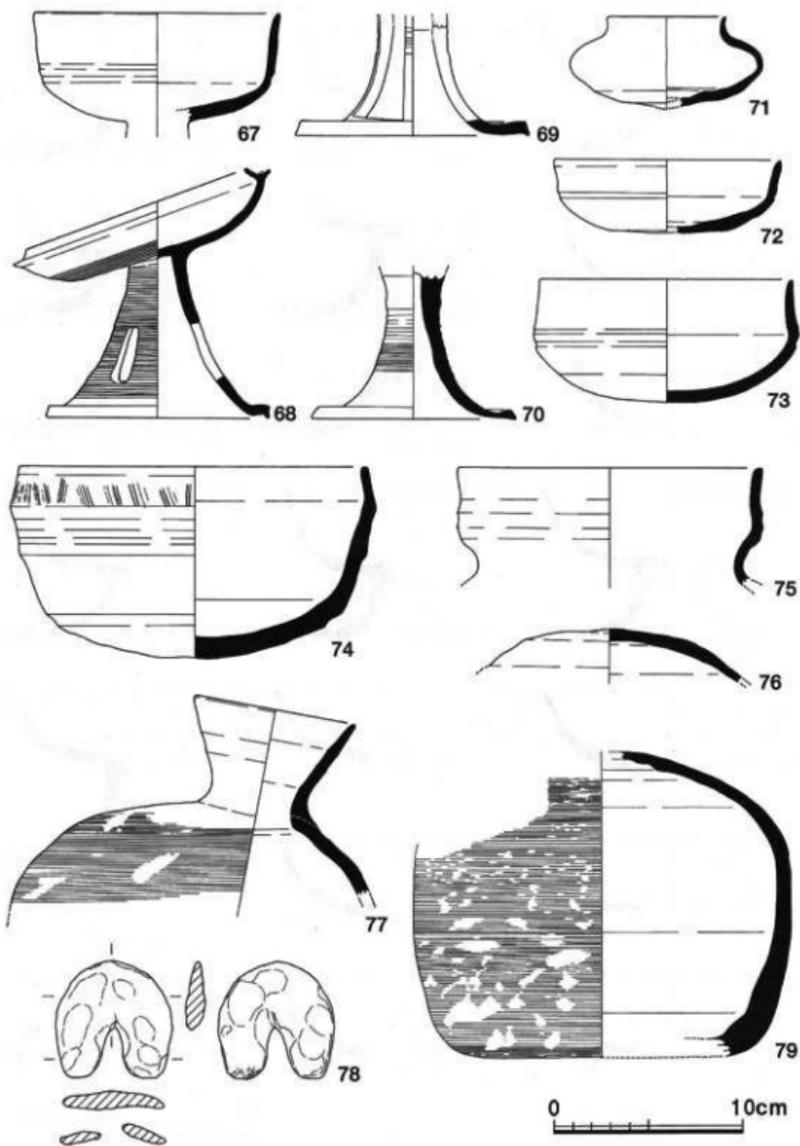
第27图 陣ヶ平西遺跡1号須恵器烧成窯跡SY01出土須恵器実測図(2)

下している。内外面ともに回転ナデ調整である。脚部内面には回転ナデの痕跡が明瞭に残る。坏部内面は不定方向の仕上げナデを施している。26は坏部上半に明瞭に稜を形成する。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁端部はわずかに外を向き丸く収める。体部は碗状を呈する。基部の脚部との境はわずかに段状になっている。脚部は坏部の中心から少しはずれて接合されている。27・28・30は、やや浅い坏部で体部の中ほど付近に明瞭に稜を形成し、そこからわずかに外傾し口縁端部にいたる。口縁端部は丸く収めている。坏底部に脚部の粘土を貼り伸ばして脚部と接合し、その境は稜を形成している。坏底部はヘラ切り後、ヘラ削りで底部と整えているかもしれない。脚部基部径は比較的小さい。底部内面には不定方向のナデ調整で仕上げているものがある(28)。29の口縁部は体部から緩やかに立ち上がり、わずかに外反して開く。稜から口縁端部までの幅は短い。また口縁部は焼き歪みを起こしている。30は脚部の粘土を坏部底部に伸ばして接合している。その境はわずかに段を形成している。坏内面底部にわずかに見える程度だが、不定方向の仕上げナデを施している。31の口縁部はやや外反するがほぼ真上を向いている。体部は丸みを帯びた稜を形成する。坏部底部外面は成形時の強いナデ調整によりうねっている。内面は不定方向の仕上げナデが施されている。脚部との接合は、端部粘土を坏部底部に延ばして付けている。32は、坏部底部に脚部を貼り付け、その境は段を形成している。33の坏部外面はヘラ削り調整で成形し、脚部を接合した際の粘土がその上に貼り付いている。坏部内底部は不定方向のナデ調整で仕上げている。34~37の脚裾部はやや凹んで脚端部に向かって緩く立ち上がる。脚端部外面はナデ調整によってやや凹み、下部は尖り気味に仕上げる。脚裾部に2条の凹線がめぐる。38は全体に作りが薄く、脚端部を上方につまみ上げ、下方よりも突出させている。39の脚裾部には2条の凹線が施される。40の脚裾部・脚端部は比較的小さい。脚端部断面はく字状に屈曲している。41、43は体部の中ほどに稜線を持ち、そこから上に緩やかに外反する。口縁端部はわずかに肥厚し丸く収めている。脚部高は非常に低い。基部は脚部の粘土を延ばして坏部底部と接合し、その境は段を形成している。41の脚部は大きく湾曲し、脚裾部は垂れ下がっている。脚端部は高くほぼ垂直で、ナデ調整により2条の細い凹みがある。43の脚は杯部の中心より少し偏ったところに接合されている。脚裾部はやや平坦に広がっている。脚端部は垂直なところや内傾するところがある。また、坏部は大きく傾いている。いずれも製作時のものである。41、43ともに坏部底部は不定方向のナデ調整により仕上げている。42は体部の中ほどに緩やかな稜を持ち、そこから上にわずかに外反して口縁端部にいたる。体部は碗形を呈しており、器壁の厚さは均一である。坏部と脚部の接合部はナデ調整で整えられている。脚部は低くハの字に開くが脚裾部がな

だから広い。脚端部はほぼ垂直で、ナデ調整により外面は凹んでいる。下部は垂下している。脚端部の折り返し内面は爪で押さえて成形している。坏部内面は不定方向の仕上げナデ調整が施されている。44・45は、体部中ほどに稜線を持ち、そこから上に外反する。稜線から上の口縁部の器壁は薄くなるが均一である。口縁端部はやや細くなり丸く収める。基部は脚部を貼り付け、粘土を延ばしながら接合している。その境は段を形成する。脚部は緩やかに開きながらそのまま脚端部にいたる。端部はナデ調整によりわずかに凹んでいる。下部は斜め下方に尖り気味に伸びている。坏部底部内面には、不定方向のナデ調整が施されている。46は体部に稜を持ち、そこから口縁部は大きく外反している。基部では脚部との貼り付け部位に粘土が盛り上がっている。この部位に掻き目を数周施している。坏部底部内面には不定方向の仕上げナデ調整が施されている。47は体部のやや上方に稜を形成し、そこから大きく外反し口縁端部にいたる。口縁端部は丸く収めている。坏部底部に脚部を貼り付け、粘土を延ばしつけて接合している。脚部は強く湾曲し、脚裾部で少し平坦になりながら脚端部にいたる。脚端部は高く、ナデ調整により大きく凹む。坏部底部内面は、不定方向のナデ調整で仕上げている。48は、比較的小型のものである。体部中ほどに明瞭な稜を持ち、そこから弱く外反している。口縁端部はやや尖り気味であるが丸く収めている。体部は湾曲し、坏部と脚部の接合も比較的丁寧である。脚部は強く湾曲し、脚裾部でなだらかなになり脚端部へいたる。脚端部外面には2条の凹線状にナデ痕が残る。脚端部下部は尖るように仕上げている。49の坏部はヘラ切り未調整で、逆さにして脚部を接合している。脚端部は外傾し、下部は比較的鋭利に仕上げている。坏底部内面には、上に重ねた高坏の脚の一部が欠損し貼り付いている。坏部は焼成時に大きく歪んでいる。50の口縁部の外反は弱い。内面底部は不定方向のナデ調整で仕上げている。51の坏部はヘラ切り未調整で、逆さにして脚部を接合している。坏部内面には粘土巻き上げ痕が時計回りに見える。轆轤方向は反時計回りである。坏底部は不定方向の仕上げナデ調整を施している。52の内面底部は、不定方向の仕上げナデ調整を施している。坏と脚部との接合は比較的丁寧な回転ナデ調整を施している。体部ではわずかに段を形成している。53の内面底部は、不定方向の仕上げナデ調整を施している。脚部との接合は丁寧である。坏部はほかと比べ底が深く境形を呈している。口径も9.8cmでやや小さい。54・55は、脚部は大きく湾曲し、そのまま脚端部にいたる。端部は丁寧に成形されている。下部は下方に外反し、内面に明瞭な屈曲を形成する。55の内面にヘラ記号のような3本の刻みが見られる。56～58・63は体部下半もしくは体部中央に稜を形成し、逆ハの字に開きながら口縁端部にいたる。後から口縁端部までは回転ナデ調整による膨らみが形成されている。口縁端部は丸く収めてい



第28図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(3)



第29図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(4)

る。接合部は脚部の粘土を延ばして坏部に貼り付けている。その境は段状を呈している。脚部は逆ハの字に開き、脚裾部でわずかに脚端部より下がり脚端部にいたる。脚端部はナデ調整で凹んでいる。上端は丸みを帯び、下部は垂下している。坏部内面は不定方向の仕上げナデ調整である。56の坏部底部には時計回りの粘土巻き上げ痕が見える。63の口縁端部は若干尖り気味である。脚部は比較的長い。59～62・64・65も体部の下半もしくは体部中央に稜を形成し、逆ハの字に開きながら口縁端部にいたる。稜から口縁端部までは回転ヨコナデ調整による膨らみが形成されている。口縁端部は丸く収めている。接合部は脚部の粘土を坏部底部に貼り付けている。貼り付け後、粗い掻き目調整を施しているものもある(61, 65)。坏部内面には不定方向の仕上げナデ調整が施されている。65は、脚部接合後、坏部底部外面に掻き目調整を施している。掻き目は高坏を逆さにして反時計周りに施文している。底部内面は、不定方向の仕上げナデ調整を施している。66は基部が細くハの字に開く脚部である。脚部高は比較的高い。脚端部はナデ調整により凹んでおり、上端は丸く収めている。下部は垂下するがやや厚めに成形している。ナデ痕が粗く見える。67はほぼ平底で、体部は底部からほぼ垂直に立ち上がる。体部の器壁は均一な厚さで、丁寧に成形・調整されている。体部下半には2本の凹線が施されている。底部に脚部との接合部がわずかに残っており、高坏に分類した。

有蓋長脚高坏(第29図68) 少量出土している。坏部は底が浅く、立ち上がりは内傾しており、わずかに外反する形状である。受け部端部はほぼ水平に突き出ており、受け部はわずかに凹んでいる。脚部は長脚で基部から脚端部までハの字状に広がっている。脚裾はほとんどなく、脚端部はわずかに凹み垂下している。坏部底部2/3以上と脚部全面に掻き目調整が施されている。脚部下半に長さ3.2cm、幅1.5cmの透かし孔が3つある。透かし孔の切り目は粗雑で、角は丸みを帯びている。一回で四周を切り込んでいる。全体的に均一な薄手で、調整も丁寧である。受け部には欠損した蓋の口縁部の一部が貼り付いて残っている。内面は回転ナデ調整で、不明瞭であるが不定方向の仕上げナデは無い。

脚部のみ資料もかなり出土しており、透かしを有するものも認められる(第29図69・70)。69の脚部は円筒状を呈し、脚下部で緩やかに開く。脚裾部は広くやや下がっている。脚端部は斜めに成形され、わずかに垂下している。脚部上半に上下に連続する、不均一な沈線が施されている。また、長さ5cm以上、幅約3cmの透かし孔が3ヶ所ある。切断面は平滑であるが、透かし孔の形状は不整形である。また、二つの透かし孔の間に、長さ約5cmの切れ込みがある。透かし孔の切り出しをやめたものと思われる。70の脚部の形状は、基部と脚裾部が開き、脚部中ほどがすはまるものである。器壁は基部が厚く、脚端部にい

くほど薄くなる。脚端部は断面隅丸三角形を呈している。脚部中ほどには、幅3.5cmの範囲に上下に連続する沈線と掻き目調整が施されている。上半には幅が不均一な沈線、下半には細い掻き目があり、施文も粗雑である。坏部の形状は不明であるが、こうした特徴の脚部を持つ高坏がほかに見つかっていない。そのなかで、67の脚部の形状が不明であることや、坏部の形態自体も特殊なものから、これと接合する可能性がある。

蓋（第29図76） 坏蓋の可能性も考えられるが、口縁部の形状は不明であるため、扁平であること、今回の資料整理の結果で対応する坏身がないことから蓋に分類している。口縁部はすべて欠損している。非常に扁平な蓋で、天井部と口縁部の間に緩やかな段を形成する。天井部外面はヘラ削り後ナデ調整を施している。内面は不定方向のナデ調整が施されている。轆轤成形である。

坏（第29図72） 点数は多くない。図示した資料は、胴部外面に幅2～2.5mmの凹線が1条施されている。そこから口縁部にやや外傾しながら立ち上がる。底部はヘラ削り調整、それ以外は回転ヨコナデ調整である。底部付近に自然釉が見られる。坏蓋の形状と類似する。SX01出土の破片と接合している。

鉢（第29図73・74） 口径が13cm程度の小型品と口径18cm程度はやや大型品がある。73の底部は丸底で胴部に緩やかな稜をもち、口縁部は内側にやや反りながら直立する。口縁端部は丸く収めている。内面底部は不定方向のナデ調整で平滑になるように丁寧に仕上げている。底部の調整は、底部を上にして直線的なヘラ削り調整を時計回りに回転させながら連続して施している。それ以外は回転ナデ調整である。胴部最大径の位置に2条の凹線が施される。74は比較的大型の鉢である。底部はやや丸底気味で口縁部は緩く内傾して立ち上がる。胴部にはナデによる凹線が3条施されている。口縁部直下には、ヨコナデ後に、幅1cm程度の擔状工具で縦方向に1.0～1.2cmの長さで連続して施文されている。底部外面は不定方向の削り調整の後、不定方向のナデ調整で仕上げている。内面は不定方向のナデ調整が施されている。それ以外は回転ナデ調整が施されている。

柑（第29図71） 胴部から口縁部までは轆轤による成形で、均一な厚さにして丁寧に仕上げている。轆轤方向は反時計回りである。底部はヘラ切り未調整で胴部下半はヘラによる回転ナデ調整を施している。外面には点状に自然釉が発生している。

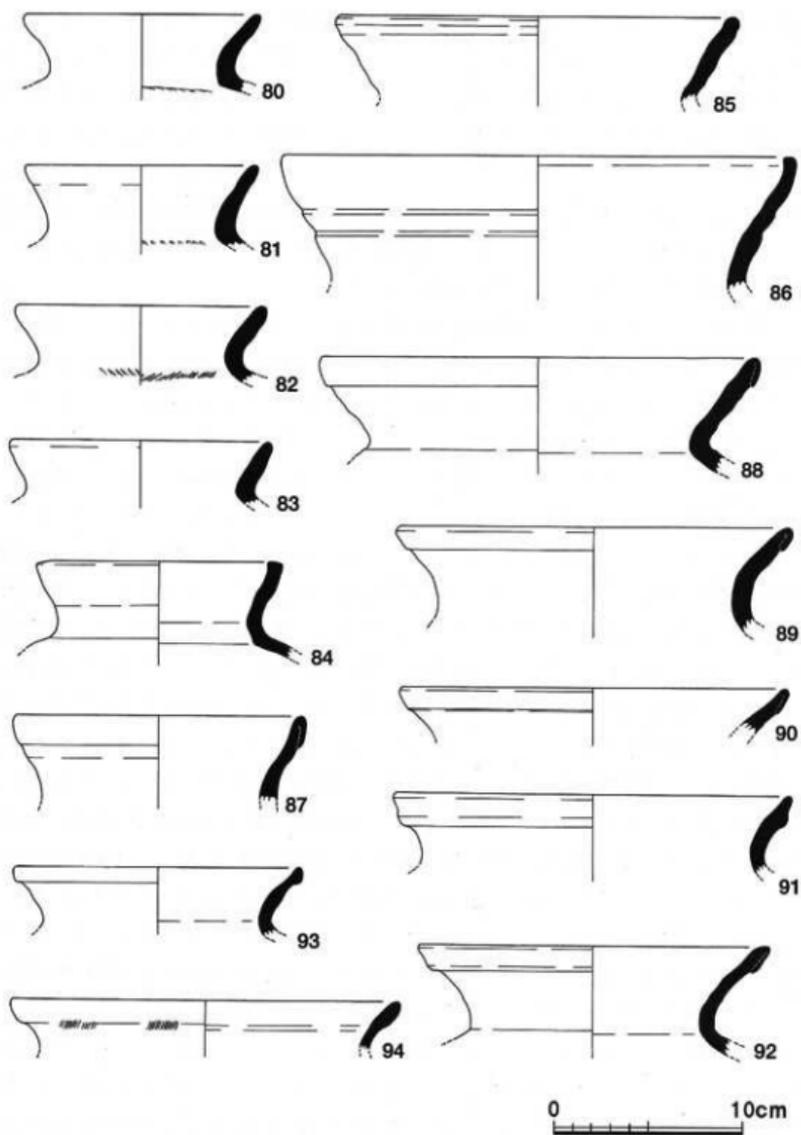
壺（第29図75） やや広い口を持つ壺の口縁部である。頸部から外に強く屈曲したのち直立して口縁部にいたる。口縁端部は丸く収めている。外面は約8mm幅の横位の凹線が上下に連続して施されている。内面は回転ヨコナデ調整である。

平瓶（第29図77・78） 77は口縁部から肩部にかけて残存する。口縁部は直線的に開き、

器面は回転ナデの強弱により波状を呈する。口縁部は胴部成形後に接合され、内面にその痕跡をよく残している。口縁部は内外面ともに回転ナデ調整で、胴部外面は全面に掻き目が施されている。頸部接合付近の外面はナデにより消されている。内面はナデ調整で上部には粘土の絞り痕が見られる。78は底部から頸部までが残存する。底部は平底でいびつな円形を呈す。底部は一枚の粘土板のようなもので、その縁辺に粘土紐を積み上げて成形をしている。底部内面には指頭圧痕やナデ調整が残り、内面のほかは横方向のナデ調整が施されている。胴部は緩やかに張り出す。頸部付近の内面には粘土の絞り痕が残っている。底部から頸部まで全面に、横方向の掻き目が施されている。

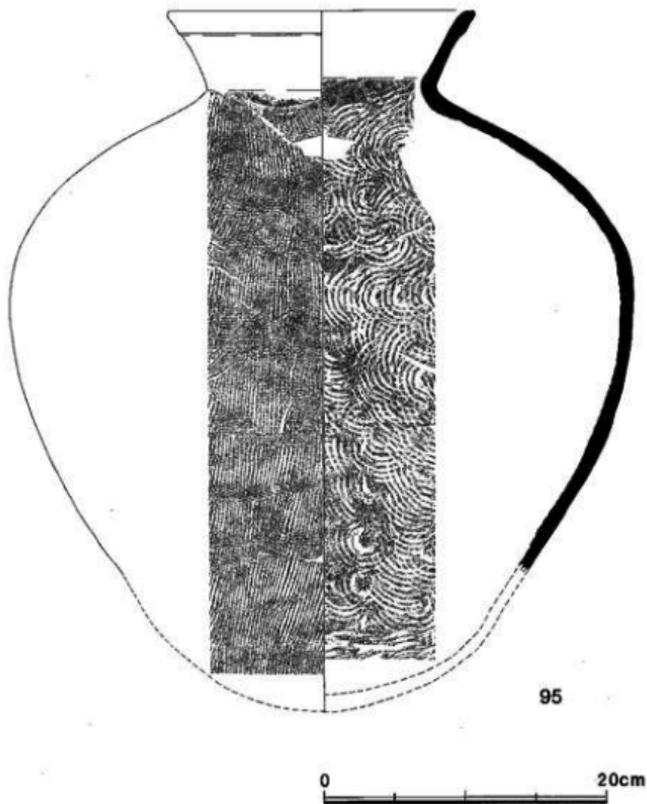
不明土製品 (第29図79) 左右対称の馬蹄形を呈する、扁平な土製品である。手捏ねで製作されており、器面には指頭圧痕や指紋が多数残る。棒状の粘土紐を素材にして成形したと思われる。用途は不明であるが、仮器としての「鉢器」や焼台の可能性が考えられる。

甕 (第30・31図, 第32図96~99, 第33図101~103, 第34図) 大小各種の形態が認められ、本焼成窯跡で焼成された主要器種の一つである。口縁部の形態は、口唇部を肥厚しないものと肥厚するものとに大別することができる。80~84は、口唇部は肥厚せず、頸部から口縁部にかけてくの字に直線的に開くものである。口径は約12cmである。甕のなかでは比較的丁寧な調整を施している。80~83の口縁部はほぼ同じ厚さで成形され、口縁端部は丸く収めている。内外ともに回転ヨコナデ調整である。80は頸部内面に指による調整痕があり、方向は反時計回りである。81は口縁部外面に沈線がめぐる。一見折り返しの痕跡に見えるが、断面観察から鋭利な工具で施した沈線であることが分かった。84の頸部は大きく湾曲し、口縁部の中ほどでやや上方に屈曲し口縁端部にいたる。口縁端部はやや外側に傾斜しながら平坦に整えられている。82の外面頸部直下にタタキ目、80~82の内面頸部直下に同心円文状の当て具痕が見られる。また、83の頸部内面には斜め方向に調整時の細かな擦痕が施されている。85は口縁端部が肥厚せず口縁部は直線的に開く。口縁部はほぼ均一な厚さで口縁端部は丸く収める。端部外面下にはナデによる1条の浅い凹線が施される。内面口縁端部直下はナデによりわずかに内湾する。86は口縁部上半がわずかに内湾している。口唇部は平坦に作り出し、強いヨコナデ調整によって緩やかに凹んでいる。外面中央に2条の凹線を施す。87~92・95は口縁端部を外側に折り返して肥厚させたものである。折り返し後はそのまま貼り付け、口縁端部を丸く収めている。口縁端部をわずかにすぼませているものもある(91)。87の口唇部は外側に約1.8cm、折り返して肥厚させている。肥厚部下方に凹線を施している。88の口縁部は外側に直線的に伸び、端部をわずかに肥厚させる。口縁部は内外面とも回転ヨコナデ調整で、胴部外面には掻き目のような痕跡が残る。



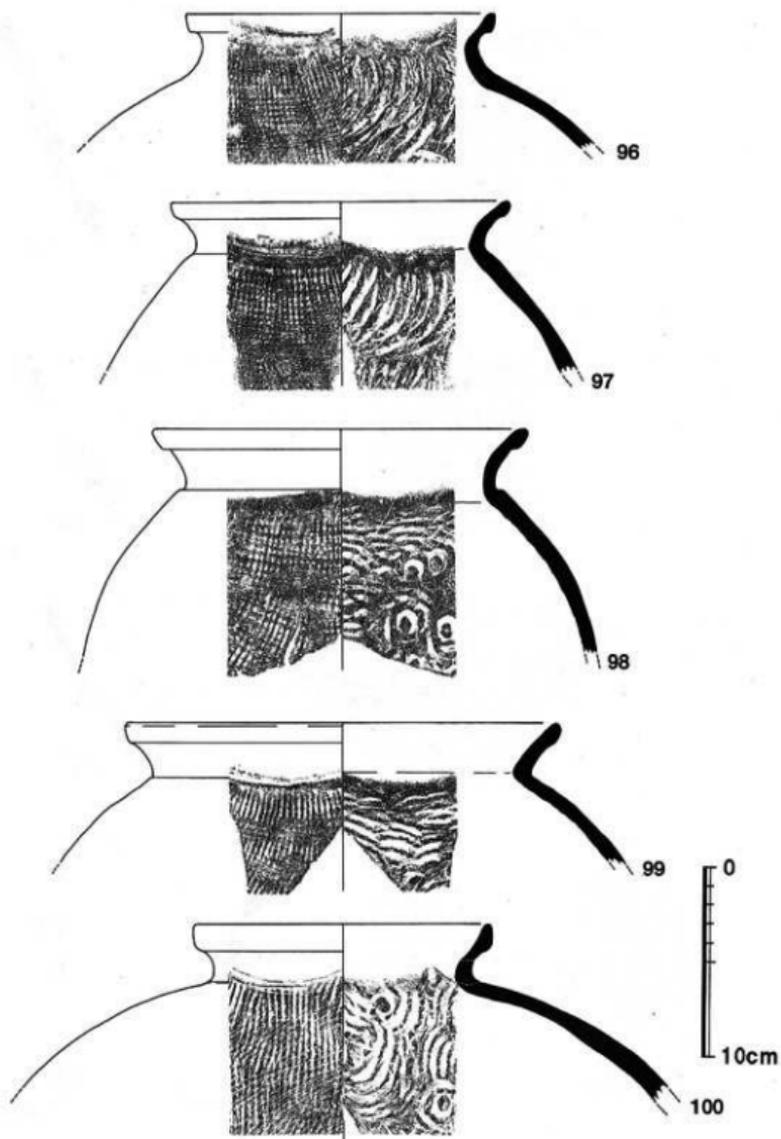
第30図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(5)

内面は青海波状文と思われる当て具痕がわずかに残る。89の口唇部は外側に約1.2cm折り返して肥厚させている。内外面ともにヨコナデ調整を施し、特に内面では約1cm幅のヨコナデ調整が明瞭に見える。ナデは、ところどころ歪んでいる。90の口唇部内面は、折り返して調整したときのナデによる凹線状の凹みが見られる。外面の折り返し端部の接合はナデ調整によって、なだらかになっている。91の口縁部は頸部から大きく外反しながら開く。口縁部の高さはほかと比べ、やや低い。口縁肥厚部の幅は約2.5cmで、中ほどが強いナデ調整により凹む。内外面は丁寧なヨコナデ調整である。92の折り返しは比較的薄いが、肥厚部とその下とは明瞭な段となっている。肥厚部外面は強い回転ヨコナデ調整によって緩



第31図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡S Y01出土須恵器実測図(6)

やかに凹んでいる。口縁端部は水平に整えている。口縁部から頸部にかけては内外とも回転ヨコナデ調整で、胴部はタタキ目調整ののち外面は掻き目調整を、内面はナデ調整を施しているようである。95は底部以外ほぼ完全に復元できたものである。復元口径21.4cm、現存器高39.3cm、推定器高48.5cm、最大胴部径43.8cmである。口縁部は直線的にハの字に開き、口唇部は幅約3.5cm外側に折り返している。内外ともにヨコナデ調整である。胴部は内外面の全面にタタキ目と当て具痕が残る。外面は約10cm間隔で、タタキ目に直交するように横位の掻き目調整が施されている。胴部の上半と下半ではタタキ目と当て具の向きが逆である。残存部最下部では、胴下部の湾曲具合が若干変化するところがある。器壁も一旦わずかに薄くなり、再び厚くなる。胴部下半と底部の結合部と思われる。93・94・96～100は、口唇部を肥厚させたものである。断面観察では折り返しの痕跡はなく、粘土紐貼付けの可能性が高い。肥厚部の幅も比較的厚く、また幅は狭くなっている。厚さと幅が近似値のものが多い。93は口縁部はラッパ状に大きく外反するが口縁端部は上方を向いている。口唇部外面を肥厚させる。胴部との接合面は内面から痕跡を確認できる。調整は内外面とも回転ナデ調整で内面には一部に縦方向のナデ調整が認められる。94は肥厚部から口縁部下半にかけては、なだらかな形状をしいている。口縁部内面は平滑な調整ではなく、波うつように凹む。外面肥厚部直下に擦痕がところどころに見られる。96、97の頸部下部は外面にタタキ目、内面に連続する弧状文を呈する当て具痕が見られる。タタキ目は比較的細かな格子状を呈している。当て具痕は横方向へ施され、頸部から肩部にかけて横方向へ成形したことがわかる。97～100の口縁部と頸部の境に、口縁部をヨコナデ調整したときにできた段状の稜がかすかに見られる。なかでも98は明瞭な段を形成している。96は頸部から口縁部にかけて緩やかに湾曲し口唇部は外側に肥厚する。口唇部内外面は丁寧なヨコナデ調整を施している。肩部はほかと比べ大きく開いて胴部にいたる。97の口唇部は丸みを帯び、口縁端部も丸く収めている。98は胴部の張り出しがあまりない撫で肩の形状をしている。胴部内面は青海波文で比較的細かな同心円文が多く見られる。99は頸部から口縁部にかけてくの字に屈曲し、口縁部はやや直線的に開く。口唇部外側に弱く肥厚している。内外面ともにヨコナデ調整である。外面はタタキ目、内面は青海波状文の当て具痕が見られる。タタキ目は横方向に丁寧に施されている。101～104は口縁部の形態が二重口縁状のもので、口径が35～40cmと大型である。色調は黒褐色を基調とし、胎土は2～3mmの砂粒を比較的多く含む。二重口縁状の口縁部形態は、頸部は大きく湾曲し、口縁部下半のほうが大きく開き、中間付近でやや上方へ角度を変えて口縁端部にいたる。その中間付近は粘土を折り曲げたことで、外面は突帯上の稜を、内面は凹線を形成している。口唇部付近で



第32図 陣ヶ平西遺跡1号須恵器焼成窯跡SY01出土須恵器実測図(7)